

---

# キミに幸あれ!

桜木千尋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミに幸あれ！

### 【Nコード】

N8765C

### 【作者名】

桜木千尋

### 【あらすじ】

男の子嫌いの少女沙紀が全校生徒ほとんど男子の高校にやってきた？！そこには女の子嫌いの少年愁や女の子みたいな顔した少年夏樹、オタクな眼鏡少年鏡などの面白い仲間がいて…？沙紀の男嫌い  
は直るのか？！そして恋の行方は？！【7月27日最終話更新しました 感想等お待ちしております！！】

**第一話 こんなのありえませんか！（前書き）**

誰でも楽しく読んで頂けたら光栄です。  
これを読んだら元気になれる…かも！

## 第一話 こんなありえませんか！

リリリリリリリッ

枕元の目覚まし時計の音が鳴り響いた。

パシッと時計を止めて布団から起き上がった少女は軽く伸びをしていた。

「朝ですねえ…」

少女は新しい制服に着替え始めた。

今日から高校生ですねえ。どんな学校でしょう…？

少女は軽い夢を見ていた。

少女は現在一人暮らしである。

両親は離婚しており少女は一人暮らしをすることになってしまったのだ。家賃月1万円というボロアパートに住んでいる。

「それでは行つてきますおばーちゃん」

少女はお仏壇に飾つてある祖母の写真に挨拶をしてアパートを出ていった。

「晴れましたねえ…」

「おっ！沙紀ちゃん今日から高校生かい？」

「洋さんおはようございます」

「今日は魚が安売りになつから来るんだよ！」

「はい！では行つてきます！」

少女の名前は水野沙紀。  
重度の男の子嫌いという悩みを持っている。  
そんな彼女も勉強を頑張りなんと特待生として高校に入学出来たのだ。

「ここが…橘学院高等学校ですねえ」

沙紀が校舎を眺めているとそこを通り過ぎる他の学校の生徒がボソボソとなにやら沙紀を見て話していた。

沙紀は気にせず笑顔で校門を開けていった。

「水野沙紀…水野つと…。ありました！A組ですね…！」

沙紀が周りを見渡すと女の子の姿が見えない。  
首を傾げながら沙紀は

「変ですねえ…」

と呟いていた。

教室…どこでしょうか…？

沙紀は学校にいる主事さんに聞いてみる事に決めた。

上履きに履き替えてそこに向かおうと歩き出したのだが、急に階段から誰かが降りてきた。

沙紀は

「どうしたんでしょうか」と覗いてみると一人の男の子が立っていた。

「げっ?!女がいる?!」

「はい？」

「言つとくけど…ここ…あんたしか女子いないからな」  
「…え？」

沙紀は距離を離しながらその少年の顔を見た。

するとその少年は沙紀に向かって

「俺女嫌いだから」と言つて走つていつてしまった。

「何でしょう…あの人は！！」

プンスカと怒りながらも男の子がいなくなった事に安心した沙紀であつた。

その後主事さんに聞いて三階のA組だと言つ事を教えてもらった。

「ここですねえ」

沙紀が指を指した【1-A】からは話し声が聞こえている。

沙紀はもう一度制服を確認してドアを開いた。

「失礼しま…」

「うお！女の子だ！」

「かわいい…！」

「俺らのクラスかな?!」

「あの…」

沙紀は顔を真っ青にして教室を飛び出た。

心臓がバクバクしてますう…。

どうして男の子ばかりなんですかあああ！

「さっき言ったじゃん」

「へ…？」

涙ぐんでいる沙紀の後ろに立っていたのは、さっき下でバッタリ会った少年であった。

沙紀はまた後ずさりして三メートルの距離をとった。するとその少年は

「男嫌いか」

と鼻で笑った。

沙紀は

「そうですよおお」と走りだした。

少年は

「変な奴」と言い3・Aのクラスの中に入っていったのだ。

「あの人も同じクラスなんですかああ?!」

と叫んでいた。

ど…ど…どうしましょう!!

男の子苦手なのに男子高（一応共学）に来てしまいましたあ！取り消しも出来ませんし!! ああ…なんと言う事…。

お母さあああん!

お父さあああん!

おばーちゃあああん!

神様あああ!

「なあ…教室入んないの？」

「へ？」

「一応俺ら同じクラスらしいから」

「ああ…そうですね…」

「お前なんで入学式からテンション低いの？」

「……皆さんが高いだけです」

「ふうん…」

少年はチラッと沙紀を見て再び教室に入って行ってしまった。

沙紀はまだ混乱気味。

男の子はかぼちゃ…。

男の子はかぼちゃです。

と繰り返していた。

何度か深呼吸を繰り返し教室のドアを開けた。

「あ、さっきの子だ」

「あの…その…」

沙紀は顔を真っ赤にしてしどろもどろに何かを喋ろうとしているのだが、怖くて声が震えてしまう。

沙紀が視線を下に落としてしまった時、教室の男子の声が静まってしまったのだ。

ど…どうしましょう…。

皆さんの機嫌を損ねてしまいました…？

「ごめんなさ…」

「ねー！名前なんてーの？」

「へ？」

「仲良くしような！」

「あのう…」

「みんな女の子が来たっていうから喜んでただけ」

さっきの少年だ。  
席に座って読書しながら音楽を聴いている。  
その少年の周りには女の子みたいな男の子や眼鏡を掛けて無表情な男の子などがいて、こちらを見ている。

「私は…水野沙紀です」

「沙紀ちゃん？」

「は…はい！」

「さっき愁から聞いたけど男の子苦手なんだよね？」

「……………その通りです」

「俺らがその悩みを無くしてあげれるように沢山遊ぼうな!!」

「そうだよ!!」

「まあ…いいんじゃない？」

愁と呼ばれた少年もかろうじて沙紀の顔を見ていた。

沙紀は少し涙ぐんで

「…よろしくお願いします」

とみんなに言った。

みんなは沙紀の所へ寄ってきたのだ。

沙紀は流石にまだ男の子たちに慣れていないので

「ひっ?!」と言って教室の端に走り込んでしまった。

その際机の脚に引っかかり倒れそうになった。

「あっ?!」

「重い…早くどいて」

沙紀が目を開くと誰かの腕に抱えられていた。

頭をあげるとそこにいたのはなんとあの愁であった。

「あの…すいま…」

「どいて」

愁は顔を真つ青にしながらゆっくりと沙紀を地面に下ろした。

沙紀は愁の顔を見て凍りついていた。

助けられた？！

「スカート汚れる」

「はあ」

「リボン曲がってる」

「はあ」

「髪の毛ボサボサ」

愁は几帳面なのか沙紀を立たせてスカートのゴミを払い、曲がっているリボンを直し始めた。

机の中に手を入れて取り出したのは櫛だ。

「あのう…何を…」

「ボサボサだから気になるだけだ」

「そうですか…って…普通に触ってるし！」

「動かない」

「すいません…」

沙紀の男の子嫌いはまだ直るには難しいようだ。  
頑張れ！！沙紀！！

「こんなのありえません！！」

沙紀の叫び声が教室に響いた。

## 第二話 そんなの嫌です！

沙紀が叫ぶと教室のドアがガラツと開いた。そこに立っていたのは背の高い女の先生だ。沙紀の方をチラツと見て

「かわいいー！」と喜んでいた。

どなた様でしょう…？

「はい！担任の内田です！よろしくね皆さん！」

「先生でしたか…」

「そうよ水野さん！！」

「名前…」

「だってたった一人の女の子ですもん！」

内田先生は沙紀に軽くウィンクをした。

沙紀は顔を赤くして下を向いてしまった。

その反応が気に入ったのか沙紀に笑いかけた。

「じゃあどこでもいいから席に付いて〜」

「俺ここ！」

女の子みたいな顔の男の子は沙紀の後ろの席に座った。眼鏡を掛けた男の子はその男の子の隣に座った。

「愁は〜？」

「めんどいから〜」

愁が座ったのはなんと沙紀の隣だった？！

沙紀は

「ええええ？！」と言って顔を青ざめた。  
愁は沙紀に

「慣れる」

と言った。

慣れませんか!!!

一番このクラスで怖いのはあなたなんですよお!!  
そつ…そのあなたが隣?!

「決まった?じゃあこれからはその席ね」

内田先生は笑った。

一名顔を青ざめている者がいるのは気にしない。

「入学式行くわよ」

「はい…」

やっと始まった入学式。

体育館はとても広く椅子が何個でも置けそうだ。

沙紀は

「広いです」と喜んでいた。

沙紀の後ろからひよこつと頭を出した少年が沙紀に話しかけ始めた。

「俺ねー灰原夏樹!」

「いいお名前ですねえ」

「でねーこつちの眼鏡が椎羅鏡くん」

「そ…そうなんですか」

沙紀はまだ慣れていないのか体が震えていた。後ろに男の子…後ろに男の子…だめだあ…。すぐく怖いですう…！  
でも…がんばらなきゃいけませんよね…。

「座り…ましよう？」

「うん！」

「悪いな…水野」

「え？」

「あれえ…無口の鏡くんが喋ってるー」

沙紀に話し掛けてきたのはいつも無口らしい椎羅鏡である。  
沙紀は

「どうかしました？」と鏡に話し掛けた。  
すると鏡は沙紀の顔をしっかりとみていた。

「あのう…椎羅さん？」

「やっぱり…」

「椎羅さん？」

沙紀がビビりながら鏡の顔に近づいた。  
すると鏡は携帯を取り出し写メをしていた。

「え?!」

「似てる…アスカに…」

「アスカって…誰ですか？」

「キャンディポリスの…女刑事アスカ…」

沙紀は何を言っているのか分からないようだ。  
皆さんも分かりませんかよねえ？

キャンディポリスって…何でしょう…。

飴の…刑事さん？

ムムムムムム…悩みますねえ。

でも…分からないです！

沙紀が悩んでるとまたもや隣に座っている愁が沙紀に言った。

「アニメのキャラクターだよ」

「アニキヤラ?!」

「そうなの…鏡くんアニヲタなんだよ…」

「アニ…ヲタ…?」

沙紀は苦笑いをした。

私…その…似てるんですか…。

アスカさんっていう方に…。

あんまり…嬉しくないです…。

「静かにー!!」

内田先生が沙紀たちに向けて指を唇に当てて

「シー」と言っていた。

沙紀は

「すみません…」と小さな声を出して頭を下げていた。

「え…この学校の校長の猪垣です。入学生の皆さんご入学おめでと  
う」

「校長先生若いです」

「確か29歳だっけ」

「若いね…」

29歳ですかあ…。

私のお母さんの三つ年下ですねえ。

………はい？

離婚していますよ？

私が…確か9歳の時だと思いますが…。

「沙紀ちゃん！入学生の言葉だよ…！」

「はっ?!」

そうでした！

私満点合格でした！

早くいかなくتهはいけないのでした！立たなきゃ！

「水野沙紀さん」

「は…はひ?!」

「お願いしますね」

沙紀は立ち上がりマイクに向けてしっかりと話し出した。

「本年この橘学院高等学校に入学した私たちは、三年間を有意義に過ごし頑張つていく事をここに誓うことを宣言します…！」

で良いんですよ…。

沙紀はマイクの電源を切り一礼した。  
すると大きな拍手が沢山鳴り響いた。

「沙紀ちゃんすごい」

「アスカ…」

「ま、普通だな」

色々言つてはいるが兎に角上手く出来たようだ。

沙紀は顔をあげると周りに男の子たちが…。

「沢山…だめです…」

沙紀はストンとしゃがみこんでしまった。

校長先生は

「どうしました?!」と驚いていた。

「沙紀ちゃん!」

「アスカ!」

「水野!大丈夫か?!」

何故か席から離れて立ち上がった三人は沙紀の隣に座った。  
一番心配していたのは女嫌いの愁だった。

「だめです…」

「ああ!もう!ったくさ!!こんな高校くんなよな!!」

「すいません…」

「今日だけだからな」

「へ?」

愁は女嫌いのはずなのに立ち上がれない沙紀を背中に乗っけていた。

沙紀は

「あの…」と小さな声で愁に話しかけたのだが愁は

「黙る」と言っつて無視していた。

「校長先生・保健室に運びますね」

「よろしく願います」

「はい」

夏樹と鏡は愁の後ろに付いて沙紀を保健室に運ぶことになったのである。

沙紀の顔は赤い。

多分とても恥ずかしいのだ…多分。

なんで私愁さんの背中に乗せていただいているのでしょうか…。

とても申し訳ありません…。

本当にすいません。

沙紀は呟いていた。

「すいません…」

「着いた」

「沙紀ちゃん着いたよー！」

「アスカ…大丈夫？」

「アスカさんじゃありません」

沙紀はため息を付いていた。

愁は

「座れ」と言つて保健室のソファーに沙紀を座らせた。

沙紀は頷いて座った。

「で、そんなに嫌いかな？」

「嫌いじゃなくて怖いんです」

「怖いんだあ…」

「アスカ…怖いのか？」

「アスカさんじゃありませんって…！」

「彼女は水野沙紀だ」

「そうそう沙紀ちゃんだよ」

鏡に愁と夏樹が説得していた。

皆さん私の事はどうでもいいのですね…。

まあそれはそれで嬉しいかもですが…。  
いや…別に嫌いな訳じゃ無いんです。

「で、お前は？」

「何のお話でした？」

「だから何で男が怖いんだ？！」

「ああ…そうですか」

「教える」

「嫌です」

沙紀はニコツと笑って言った。

それにムカついた愁が思いつきり沙紀のほっぺたを引っ張り出した。

「はひふふんでふか！」

「言わないと離さない」

「いはいでふ！」

「沙紀言え」

愁が沙紀をそう呼んだ。

その瞬間沙紀の顔は真っ赤っかになっていた。  
沙紀と呼ばれたのが初めてなのか嬉しそうだ。

「沙紀ちゃん悩み言ってみー」

「アスカ言ってみるとなんでも解決で…」

鏡は夏樹に口を塞がれた。夏樹は

「黙ろっねー」と言いながら嫌な笑顔を浮かべていた。

鏡は

「ムムム」と喋りたくてたまらないようだ。

「はい…」

そして沙紀の身の上話が幕を開けたのだ。

「私の両親は離婚して早7年が経ちます。私は最初母方につくという話だったのですが、父が許しませんでした。父は自分が引き取ると言い張り結局私は父に引き取られました。父は仕事のストレスで私に暴力をふるい、私は怖くてたまらなかつたんです。だから父が寝ている間家を抜け出して祖母の家に助けを求めました」

7年前

「私が沙紀を引き取ります」

お母さんの声だ…。

何の話しているの…？

「金があるのは僕の方だ！！引き取るのは僕だ」

お父さんまで…何の話をしているの？

引き取る？引き取らない？

分からないよ…。

「僕が引き取るからな」

「もう…勝手にして頂戴」

「明日出ていけ」

「分かったわよ…」

母親は立ち上がり沙紀の部屋のドアを開けた。

沙紀は急いで目を閉じた。

気付かれていませんよね…？

お母さん泣いているんですか？

泣かないで欲しいです。何で泣いているんですか？

「沙紀…ごめんね」

母親は優しく沙紀の頭を撫でてあげた。

「さようなら…沙紀…」

その言葉を言ってお母さんは姿を消しました。

朝起きると机の上に手紙が置いてあったのです。

私はそれを見ると走り出していました。

書いてあった文字とは一言で

「さようなら」と書いてあったのだ。

「お母さん!!お母さん!!」

でも…もういませんでした。

それからの人生は辛い事ばかりでした。

「ガキは早く寝ろ!!」

「痛いです!お父さん!!」

「邪魔なんだよ!!」

バシッ

「どつしてぶつんですか!!」

「出てけ!ガキなんかいらねんだよ!!」

毎日毎日ぶたれました。

でも我慢してました。他に行くところが無かったからです。  
お母さんがいなくなつて一週間が経ちました。  
私の怪我は体じゅうに出来ていました。  
もう嫌だと…思いまして部屋にある祖母の住所を見つけて逃げ出しました。

台風が来ていたので死にそうでしたが…。  
何とか着いたのです。

「おばーちゃん…開けて…」

「沙紀ちゃん?! 一体その怪我どうしたんだい?!」

「寒い…」

「傘もさしてこないで…お入り沙紀ちゃん。温かいミルク飲むかい？」

「ん…」

おばーちゃんは温かいミルクをくれました。

事情を事細かに話すとおばーちゃんは一緒に住もうと言ってくれました。

それ以来お父さんには会ってはいません。

幸せだった三年間。

でも…おばーちゃんは病気で亡くなってしまいました…。  
それからは一人で頑張つて暮らしました。

「ぐすん…」

「可哀想に…アスカ…」

夏樹と鏡は涙を流していた。

そんなに可哀想ですかねえ…?

「なあ…だったらさ…男の人を嫌いにならないの？」

まだ何かを悩んでいる愁は沙紀に聞いた。

「まあ…普通はです」

「なんか他にあつたのか？」

「中学の時軽く男子に虐められまして…」

「ああ…言ってたな」

「そういう事です」

沙紀は苦笑いをした。

愁は沙紀は平気なのか頭をポンポンと撫でた。

沙紀は顔を上げて愁を見上げていた。

愁さんは…女嫌いなんですよねえ…？

私も…大丈夫ですが。

愁さんと夏樹さんとヲタさん…いやいや鏡さんは全然怖くないです。

友達ですよね？

「えへへ…」

「気味悪いぞ」

「喜んでいるんです」

「何が嬉しいの…？」

「友達が出来たことです」

沙紀はほんのり笑った。

可愛い…。

友達出来たの嬉しいですよ。

えへへ…。

「沙紀ちゃん可愛い。」

と言って夏樹は沙紀に抱きついた。

沙紀は

「どうしました？」と夏樹のほっぺたを引っ張った。

「あれえ？僕ら平気なおお？」

「友達ですから」

「そーなんだあ」

「少しずつ慣れていきますね」

「そーだねえ」

「はい」

沙紀が笑った。

夏樹は沙紀の膝の上にちよこんと乗っかって喜んでいる。  
そんな二人を見ていた愁が沙紀に聞こうとした。

「なあ沙紀」

「はい何でしょうか」

「……いやなんでもない」

「？」

何かあったんでしょか…？

そんな悲しい顔しないで欲しいですが…。

私男の子に慣れそうです。

頑張りましょう！

でも…未だに…愁さんは怖いであります…。

顔付きが…ちよつと…。

キーンコーンカーンコーン

「鐘鳴りましたね……」

「今日は掃除して帰るんだ……」

「どこだったけ」

「教室」

ああ……教室でしたか。

さて立ちますかあ。

教室掃除にレッツゴー！

……………あら？

「……立てません……」

「足痺れたのかよ……」

「大丈夫……？」

「ごめんなさい……」

「お前さ」

「はひ?!」

「……………乗れ」

再び愁は沙紀の前にしゃがんで背を向けた。

沙紀はゆっくり乗った。

保健室を出ると校長先生がこっちを見て笑いかけている。

しかし愁と目が合った瞬間校長先生は冷たい視線を送った。

「やあ家出少年」

「……」

「私を愚弄するつもりかい？」

「行くぞ」

愁は話もせず校長先生の隣を通っていった。

沙紀は何がおこったのか分からないようだが夏樹と鏡は理解していた。

愁の…全てを。

「校長先生とお知り合いなんですか？」

「ああ」

「そうなんですか…」

「……」

なんだか…大変そうですね…。

愁さんと校長先生の間係は何なんでしょうね？

まだまだ…分からない事が沢山です。

そんな悩みを聞いてあげたいような…。

「沙紀着いた」

「あ…ありがとうございます」

「あら…水野さん大丈夫？」

「先生大丈夫です」

「そう…あ掃除教室よ」

「はい知ってます」

「じゃあ始めましょう」

内田先生は手を叩いた。

始まりの合図のようだ。

沙紀たちは教室の机を後ろに下げてほうきを取り出した。

愁は黒板消しを外にあるクリーナーで綺麗にしていた。

夏樹と鏡はほうきで掃除をしている。

綺麗にしましょう！

私掃除大好きですよ。

………十分綺麗なのに…。

何かすごくやる気が…。  
よし！

「沙紀ちゃん気合い入ってるねえ」

「あ、はい」

「アスカ…頑張るな」

「もう…アスカさんでいいですよ…」

沙紀は肩を落とした。

夏樹は鏡に飛びついた。

可愛いです…。

うさぎさんみたいです…。

「あんまり沙紀ちゃんの事アスカって呼ぶと死ぬよ…？」

「ひいつ?!」

……………怖いです。

夏樹くん裏表が激しいですね…

鏡さんがびびってます。

笑っちゃいけないんです…いけない…ふっ…

「あ…アスカ！助け…」

「…殺」

「いやあああ！」

「まあまあ…掃除しましょう」

「は…い」

夏樹はケロツとして鏡から下りていった。

鏡は顔が真っ青である。

メガネがズれているのも気付いていない。よほど怖かったのだろう。

そんな鏡を心配した沙紀が近付いていった。

「鏡さん？大丈夫ですか？」

「アス力ああああ！！！」

「ひい?!」

鏡が沙紀に抱き付こうとした瞬間沙紀はびびって両手を出してしま  
った。

そして…

ドスッ

みんなが見ていない隙に沙紀は思いつきり鏡の腹を殴った。  
その後背負い投げを…。

投げ飛ばされた鏡は口を開けてメガネを直した。

「あんまり…近付かないで下さいね…」

「は…はい!!!!!!!!!!!!!!」

鏡はゆっくり立ち上がり沙紀の顔を見てポウと赤くなった。  
何…?コイツらバカ?

黒板を消していた愁だけがその一瞬を見ていた。  
しかし全く気にしてはおらず笑っているのだ。

「……………」

「は…投げてしまいました!どうして…」

「なあ沙紀」

「はい?!」

「何驚いてんだよ」

意外にも愁は笑っている。こんな顔して笑うんだ…と沙紀は思った。

私…何考えてんでしよう?!ああ恥ずかしい!

もう一つ…考えている事があります…。

校長先生の冷たい視線には何か理由があるのでしょうか?

「さっきの事…」

沙紀が問いかけようとすると愁が

「気にすんな」

と少し怒りっぽい口調で言っていた。

「分かりました…」

「沙紀ちゃん」

「はい?」

「こつち掃除しよ…」

「そうですね」

夏樹が沙紀の腕を引っ張って連れて行ってしまった。

夏樹は愁と目が合つとウィンクをした。

「夏樹くん?」

「愁くんの事知りたい…?」

「少し…」

「教えたの内緒だよ…」

「え?」

夏樹は沙紀の耳元に何かを囁いた。

それを聞いた沙紀は驚き夏樹に問いたのだ。

「なら…どうしてこの高校に入学したんですか？」

「ん…そうだね。」

「え？」

「ま、僕が分かるのはそれだけだよ。」

「…でも…」

夏樹は沙紀の頭をポンポンと叩いた。

そして掃除に戻ってしまった。

沙紀は愁の顔を見た。

さっき言われた言葉が頭の中でグルグル回っていた。

『愁くんは校長先生の息子さんなんだよ。』

そんな？！

まさかですよ…。

校長先生の息子さんですか？！

ならどうして父親の学校に来たんでしょうか…？

それにあの冷たい視線には何か理由が…？

「家出少年」と呼んだって事は家出中なんですか？！

なんか…色々あるんですねえ。

え？私が投げた？

誰も投げていませんよお。

あははは。

見た人いないんだから大丈夫ですよ…。

そんなねえ…。

「水野さん言い投げっぷりね」

「見てたんですか?!」

「しっかり」

「あああああ…」

見られてしまいましたあぁ?!

どうでしょう?!

もう…ダメです…。

助けてくださあい!!!

### 第三話 これは運命?!

「おい沙紀」

「はいいいー!」

「沙紀ちゃん・お家に帰っていいらしいよお」

「そうなんですかあ」

兎に角頑張りましょう!

お家に帰って今日はお魚を買わなくてはなりませんし…。夕飯は秋

刀魚です!

お味噌汁は…何にしましょうかねえ。

「帰ろお!」

「あ…そうですね」

「先生さよ・なら」

「また明日ね!みんな!」

内田先生は笑った。

沙紀はぺこりと軽くお辞儀をして教室を出た。

後ろからびよいつと沙紀に飛び付いた夏樹に愁は離して自分の背中に軽く乗せた。

小動物みたいです。

愁さんがクマさんで夏樹くんがうさぎさんです。

沙紀はふにやあとした笑顔を浮かべた。

その顔をみた愁が軽く笑って沙紀の頭を撫でた。

「行くぞ」

「あ…はい！」

愁さんって…こんな顔で笑うんですね。  
どうしてでしょう…？

胸がドキドキしてます。

可愛いからですよね！

そうですよお。

(勝手に理解した…)

沙紀は上履きから外履きに履き替えていた。

玄関を出ると太陽の光が差し込んできた。

暖かい光が気持ちよく沙紀は

「んっ」と伸びをしていた。

「あ、ところでえ…今日遊ばない？」

夏樹が愁の背中でVサインをしていた。

沙紀は少し困ったような顔をして頭を下げた。

「私今日買い物に行かなくてはならないのです…」

「そ…なんだあ」

「ごめんなさい…」

「じゃ…僕らも帰ろ…」

「俺も買い物行く」

愁は夏樹を優しく下ろし沙紀の隣に立った。

沙紀は

「そうですか」と微妙な笑顔を浮かべた。

夏樹と鏡は

「また明日ね…」

「アスカ…」と言って手を振っていた。

「さようならです」

「じゃな」

あれ？

愁さんもちらにお住まいなんですねえ。

あ！お魚屋さんに寄らなくてはなりません！  
愁さんとも今日はお別れですねえ。

「なあ」

「はい？」

「今日魚屋何安い」

「あー秋刀魚ですよ」

「秋刀魚か」

「愁さんそのまま帰らないんですか？」

「ああ」

愁はスタスタと歩いている。それについて行くかのように沙紀は歩いていった。

愁は軽く振り向いて沙紀に

「魚屋行くんだろ」

と言った。

沙紀は頷いて愁の隣に急いでくっついていった。  
周りの視線が…。

周りにはいる高校生の女子が

「カッコいい！」とか

「超・イケメン・」とか喜んでいた。

愁は聞く耳を持たず無視しているようだ。

「モテモテですねえ」

「女は嫌い」

「私もですよ…」

「沙紀は平気だ…と思う」

「そうですね！」

「ああ」

愁は沙紀にデコピンをした。沙紀は

「痛！」と言いおでこをさすっていた。

通りがかりの男子校生に時々話しかけられると沙紀は

「ひっ」と言って愁の袖を引っ張った。

愁は

「何怖がってるの」と溜め息を付いていた。

「ね・彼女俺たちと遊ぼうぜ」

「ひっ!？」

「楽しもうよ」

「愁さん〜(泣)」

沙紀は泣き出しそうに顔を歪めた。

男子校生は沙紀の肩を掴んで自分の方にくっつけた。

沙紀は

「…止め…て下さい…」と呟いた。

男子校生はケタケタと笑って沙紀の唇に自分の唇をくっつけようと  
した。

それには驚いた愁は

「止め…」と手を出した。

「…触れんな」

「沙紀？」

「男男男男男男…」

沙紀は壊れたかのように眩き始めた。

そして次の瞬間三秒程の時間であったか…男たちが一気に倒れ出した。

一人の眼鏡でびびっている少年は逃げていった。

「沙紀落ち着け」

「……………」

「沙紀」

「また…投げちゃいました…」

「見た」

「だっ…唇…近づ」

「言葉になってねえけどなんとなく分かる」

「う……………」

沙紀は泣き出した。

さっきのキヤラとは全く違うようだ。

時々嗚咽を繰り返して涙を流している。

顔は真っ赤でぐずっている。

「泣くな…」

「うえーん…！」

「分かったから泣くな」

「……………そうですね」

「早っ?!」

「いや…泣いてたら何か疲れてきたんで」

沙紀は溜め息を付いた。

涙はまだ少し残っていたようだが本人的にはすっかり止まったようだ。

愁がボソツと

「二重人格だな」と呟いた。

ん・そうですね。

何か自分が危険に犯されそうになった時キャラが変わります。何て言うんでしょう…?? 防御みたいなものです。

「魚屋行くんだろ…」

「そうでした!」

二人はトコトコ歩いている。

さっきみたいな事が無いように愁も沙紀との距離を短くした。沙紀は自分の手を見て首を傾げている。

「あう?!」

急に愁が止まったので沙紀は鼻をぶつけた。痛かったのか涙目になって唸っていた。

愁は

「ごめん」と言っつて沙紀の顔を見た。

「着いた」

「お魚屋さんですね」

「秋刀魚一匹六十円だ」

「お・安いです」

「おや沙紀ちゃん!いらっしやーい」

「おじさんこんにちは」

沙紀は朝出会った魚屋のおじさんに笑いかけた。

愁も

「ちは」と言っただけに入っただけ。

沙紀にとっただけこのニコニコ商店街（沙紀の家の近くの商店街）は家みたいな場所である。

「秋刀魚下さい。」

「秋刀魚かい？！いいよー！！じゃあ二本で百円にしてあげようかね！」

「わーい」

「はい！毎度あり！兄さんは何買うかい？」

「俺も秋刀魚で」

愁は一本指を立てた。

魚屋のおじさんは沙紀と同じように二本いれてくれた。

愁は

「すみません」と恐縮したように頭を下げていた。

「沙紀ちゃんの友達かい？」

「それは……」

「そうですよ！！友達です！」

沙紀はニコニコしていた。おじさんは

「そうかい」と喜んだようにはにかんだ。

愁は

「ま……いいか」と言っただけを掻いていた。

（俺……まだ多分コイツの事苦手っばい……）

「愁さん？」  
「…ああ？帰るか？」  
「そうですね」

愁は沙紀が後ろにいる事を気にせずスタスタと歩いていった。  
「…」

沙紀は困り顔をしてついていった。

「お家どこですか？」  
「あっち」  
「私と一緒にですねえ」  
「……」  
「まだ苦手ですか」  
「悪い……」

愁は頭を下げた。  
まだ沙紀に慣れない様だ。

沙紀は  
「大丈夫ですよ」と愁に笑いかけた。  
沙紀の家は最初に言った様にボロアパートだ。  
沙紀は小柄なので全然広い部屋らしい。

「では、さようなら！」  
「お前…家どこ？」  
「はい！」  
「まじかよ……」

沙紀が階段を上って行くと愁も一緒にいた。  
不思議に思った沙紀は愁に

「お茶しかありませんよ？」と聞いた。

すると愁が

「いらん」と怒りっぽく言った。

「私のお部屋です…」

「……………」

「ところで何か？」

「…名前見る」

愁が肩を下げて指を指した場所は沙紀の隣の部屋であった。  
沙紀が見上げるとそこに書かれていた名前は

【INOGAKI】

と書かれていた。

ん…？

どっかで聞いたような…。

うーん。

「猪垣愁…校長息子だ」

「ああ！……………ん？」

「隣だ…」

「いやああああ！！！！？」

「叫ぶな…俺も叫びたい…」

愁はドアを開けた。

じゃあなと言って部屋に入っていた。

中から猫の鳴き声がした。

あ！ミントくん！

沙紀は愁の部屋に入って黒猫を抱いた。

愁は

「そいつお前の？」と沙紀に聞いた。

沙紀は笑って頷いた。

「ミントくんです」

「目が緑だな」

「はい！」

「で、様あんの？」

「ありません！」

沙紀は愁の部屋を出た。

黒猫のミントくんは沙紀の腕に静かに抱かれていた。時々ペロペロと沙紀の顎を舐めていた。

「ミントくんただいまです」

「うにゃあ」

「今日は疲れました」

「にゃ？」

「沢山男の子がいたんですよ」

「にゃ」

ミントくんは沙紀の言う事が分かるのか心配そうに鳴いた。

沙紀は

「そうなんです」と軽く頷いた。

沙紀はコロンと寝転がり目を閉じた。

ミントくんは沙紀の頭の隣に座り眠った。

沙紀もスーっと鼻息を出して眠りについた。

夢のなかに愁さんが出てきました。

「沙紀」

「あれ？愁さんどうかしたんですか？」

「愁でいいよ」

「何かあつたんですか」

ニコニコしている愁に対して沙紀は変に思い話しかけた。

「ん？沙紀が好きただけだよ」

「え?!」

「そんなに驚くなよ」

「……………」

愁は沙紀の肩を抱いた。

沙紀は

「はわはわわ…」と混乱気味に顔を赤くしていた。

今日の愁さん変…?!

「沙紀…」

愁が自分の唇を近づけてきた。

沙紀は逃げる事が出来ないのか目を閉じた。

チュウ…は嫌です!

ペロペロ…

ペロペロ…

ん……………?

沙紀が目覚めますとミントくんが腹の上に乗る唇をペロペロと舐めている。

「ミントくん…でしたか…」

「うに?」

「びつくりしましたあ…」

沙紀の顔は赤らんでいた。チュウされたのが余程恥ずかしかったのだらう。

ミントくんはもごもごして沙紀にくっついていてる。

「あはは…どうして愁さんなんでしょうねえ」

沙紀が立ち上がるとミントくんが机の上に乗って丸まった。

沙紀はキッチンに行って秋刀魚を取り出した。

下拵えしときましよう！

上手に包丁を使い秋刀魚の下拵えをしている。  
終わると冷蔵庫にいれて部屋に戻った。

「明日も楽しみですね」

「うにゃ」

「散歩にでも出かけますか」

沙紀は立ち上がった。

その頃隣の愁の部屋では何か探し物をしているようだ。

愁の家には沙紀と同じ様な黒猫が二匹いる。

一匹は瞳が赤色で二匹目は金色である。

赤色の方はイチゴちゃん

金色の方はレモンくん

という素敵な名前だ。

その二匹はぐっすり眠りについている。

「どこにあんだよ…」

愁は何を探しているのだろうか？

ゴソゴソタンスのなかに手を突っ込んでいる。

パタッ

隣の部屋の沙紀が家の扉を開け閉じたようだ。

愁は頭を掻いて困り顔をしている。

聞いてみよう。

何探してるんだい？

「あ？携帯…」

携帯かよ！

タンスのなかに携帯入れるなよな！！

メール何件来てるんだよ…

ほら…テレビの横とかにあるんじゃないの？

「ああ！あつた！」

めでとー。

愁は喜んでいのかどうか分からないので兎に角無表情という事で携帯の電源を入れた。

しかし付かない。多分ずっと使わなかったので自然と電源が切れたのだ。

愁は固まった。

「充電器…無え…」

愁は頭を抱えた。

携帯の充電器ぐらい家から持ってくれば良かったな…。

あの馬鹿オヤジ金だけくれて後はポイツかよ?!

ま…出ていったのは俺が自分でだけどな。

「にゃお」

「イチゴ起きたか？」

「み…」

「レモンもか」

愁の声で起きたイチゴとレモンは右足でポリポリ掻いている。

愁は動物が好きである。

この顔で。

「この顔では余計だ」

愁は二匹を抱き上げた。

イチゴとレモンは愁の顎をペロペロと舐めている。

愁は

「くすぐりたい…」と言いながら笑った。

実を言うとイチゴたちは拾い猫なんだよ。

俺が中学に入った時オヤジと喧嘩して追い出されてさ…。

雨降ってたしさみいし？

兎に角橋の下に隠れて体育座りしていたらさ、猫が二匹いたんだよ。

俺動物好きだしさみいから呼んで抱いてたら朝になってさ…

オヤジに後でガンガン怒られて出ていったわけ。

こんな喋ったの久しぶりだな。

「秋刀魚でも卸しておくか」

「みゅー」

「だーめ。これは俺の大事な夕飯なんだ」

「み」

「よし！」

愁はレモンの頭を撫でた。嬉しそうだ。

夜

隣の部屋にて

「ご馳走様でした」

両手を合わせて挨拶をしている少女は夕飯が美味しかったのか嬉しそうに笑っている。

片目が緑色の黒猫もご満悦そうにペロペロと皿を舐めていた。

今日の夕飯はとても美味しかったですねえ。

明日洋さんにお礼でもしましょうかねえ。

ミントくんも可愛いです？

わあ！お風呂に入る時間でしたね！

銭湯行かなくては！

少女はキャミソールとパンツなど色々袋に入れて家から出て行った。

「あ…愁さんではないですか」

「沙紀か」

「どこかにお出かけですか？」

「風呂」

愁と呼ばれた青年は銭湯の方に親指を向けた。  
少女の方は

「一緒ですねえ」と喜んでいた。

だんだんとこの青年にも慣れてきたようだ。

「行くか？」

「はい！銭湯にれっつー」

二人のアパートには風呂は付いてはいない。

だから昔から近くにある銭湯に行っているのだ。

自分のお家にお風呂が無いので毎日通わなくてはならないのですよ。  
でも銭湯のおばーちゃんが優しくしてタダです。

お風呂の時間が幸せの時間なんですよ。

温かくて気持ちよくて…想像してたら入りたくなくなってきましたよう  
！！

「婆ちゃん」

「おや愁さんと沙紀ちゃんじゃないか」

「お風呂借りま〜す」

「はいはい」

おばーちゃんは笑った。

私は赤い方に愁さんは青い方に入っていました。

そして着替えて風呂に入った沙紀は一息ついた。

「ふう…」

気持ちいいですねえ。

ん〜誰もいないお風呂は伸びやかです。

隣には多分愁さんがいますよねえ。

声かけてみますかあ。

「愁さん〜います〜?」

少し経つと声が返って来た。

「なんだ」

「気持ちいいですねえ」

「まあな」

「いつもこの時間なんですか」

「何が」

「お風呂の時間ですよ」

「ああ」

そうなんですか。

今まで会ったこと無かったのおかしいですね。  
なんか…

「なあ」

「はい?」

「お前、まだ男嫌いかな?」

「少し…慣れました」

「言っておくが…俺はお前の味方だから」

少し照れているようにも聞こえますねえ。

私はまだ…少ししか慣れていませんが、愁さんが味方だと安心ですね。

私は顔を赤くしてお風呂の中に顔を沈めた。  
ブクブクブク…と。

「おい沙紀」

「はあい……………」

「早く出てこいよ。外で待っててやるから」

「はいです」

なんだかんだ言っつて、愁さんは優しいです。

沙紀はそう考えながらお風呂を出た。

体を洗いシャワーを浴びて風呂から出た。

「さっぱりです」

しかし…良いですねえ。

お風呂つてもんは。

うーん…

ああ…！！！！そっだあ！！！！

愁さん待ってるかも…。

今日は幸せだったなあ。

初めて出来た友達。

それが男の子だなんて変です。

#### 第四話 明日晴れるかな？（前書き）

ずいぶんあいてしまつてすみません！

読んで下さった方々本当に有難うございます！

#### 第四話 明日晴れるかな？

お風呂から出て持ってきた下着に着替えた。

お風呂上がりはやっぱり冷えますね。

素早く服を着て沙紀は外に出た。

髪の毛はびしょびしょである。

外では愁が腕を組んで待っていた。

男らしい姿にすこしびくつとした沙紀である。

「愁さん！ま…待たせてすみませ…ぶしゅんっ」

くしゃみをしてしまった私を見て愁さんは軽く笑った。

髪から水がポタポタと垂れているせいかくしゃみが止まりませんっ！

「くしょんっ」

「だ…髪の毛乾かさないと風邪引くんだ」

「そうなんです…くしょんっ」

「…タオル」

愁さんはタオルを私の頭に被せた。

お父さんみたいです。

／／／／／／／／／／てへへ。

「……………帰るぞ」

「はい」

「……………寒くないか？」

「大丈夫ですヨ」

実は寒いんですっ！

私夏生まれだから冬が苦手で…って今春！！  
しかも4月！

私…頭おかしいんじゃない…（泣）

百面相をしている私を見て再び笑った愁さん。  
そんな笑顔に私は気付かなかったんです。

勿体無い…

「着いたよ」

「はわ？もう着いちゃったんですね?!」

「変な奴」

「なんか言いました?」

天然で返した沙紀に愁は溜め息をついていた。

「じゃあサヨナラ」

「あ、お休みなさい!」

俺は部屋に入っっていった。

部屋に入ると何か一気に疲れてきた。

女の子の付き合うなんて面倒くさいことなかつたからな。

アイツ…変な奴だよ。

男の子苦手だつて言ってる癖に俺には懐いて。

いつか俺の女嫌いが治ったらアイツと…  
いやアイツも男の子苦手なんだよな…  
少しでもアイツのこと守ってやらなきゃな。

意外とかわいいし。

(違う意味で)

ま…いつかだけ。

\*\*\*\*\*

はあ…緊張しますた！

男の子苦手な私が初めて会った人と温泉(銭湯)行っちゃいました  
?!

いや…それは別に良いんですがね…

私なんだか幸せです。

変人で結構です。

コケコツコ(笑)

私はベランダに出て習慣の天体観測を始めた。

昔から星を見るのが大好きでおばあちゃんと見てたんです。

空一面に広がる星空がすごくきれいで。

手を伸ばせば届きそうに届かない。

初恋のようなものです。

ふふふ。

初恋もしたこと無い人が何言ってるんでしょっかね。

一つ流れ星が流れた。

**第五話 恋の予感（前書き）**

ここまでの感想待ってます！

## 第五話 恋の予感

「くわあ〜」

大きな欠伸をして布団から出ると朝日が差し込んできた。  
いやあ眩しいねえ〜。

って和んでる場合じゃないから私ったら！

現在7時5分。

沙紀にしては寝坊ぎみ。

顔を洗って食パンを口に挟んで家を飛び出た。

「へいふくっ！」

制服を着忘れた。

部屋に戻り制服に着替えた沙紀はもう一度忘れ物がないか確認した。

「はいはふ！」

おばあちゃんへの挨拶を忘れた

そんな急がなくても間に合うと思いますが…。

「ひつてきはーす」

沙紀は元気よく飛び出ていった

目の前に愁がいた。

「ふうはーん！はって〜！」

「はって？」

「もぐもぐ…待ってです…」

「なる程」

愁は納得して歩いて行ってしまった。

うう…置いてかれた…。

そんなに変な顔…？

嫌われてるんですね…。

ぐすん…

「早く来いよ」

「へ？」

「置いてくぞ」

愁さんは待っていていてくれるの…？

そんな優しい愁に沙紀は笑った

「てか…朝ご飯ぐらいゆっくり食べよ」

「もぐもぐ…はふう…いや今日寝坊しちゃって」

「あっそ」

食パンを飲み込むと詰まりそうになった。

ゴホゴホッ……………！

食パン一枚で死にそう…>>>

「何やってんの」

「うう…」

「はあ…」

愁さんは呆れ顔で私を持ち上げた。  
急な事にびっくりして食パンを飲み込んだ。  
あ…流れました。

愁さんは身長がデカいので少し恥ずかしい…。

足をバタつかせると愁さんは

「バタつくな！」とキレていた。

はい…すみません…。

「くしょん！」

「あ…風邪引いたんじゃないかねえのか」

「かもです…」

ダダダダダダダダダ

「アスカ！おはよ！」

後ろからハイテンションで走ってくる人がいた。  
眼鏡少年である。

「鏡さんおはようございます」

「アス…」

「はい！殺すよ？」

「ひい！」

「おはよ 沙紀ちゃん」

「おはようございます。夏樹くん」

ちっこくて可愛い男の子の夏樹くん。

この少年は裏表が激しい気がするんですが…。

この三人は仲良しなんですよ。

「愁さん重いですよ」

「軽い」

「下ろして〜」

愁さんは教室まで私を運んだ。

教室にいる生徒（男子）は私を見て騒ぎ出した。  
な…なな何でしょう？

「わぁ！沙紀ちゃんだ！」

沙紀ちゃん……………？

「おっはよ 今日可愛いねさつち」

さつち……………？

皆さんご自由にニックネーム決めてますね…。  
私沙紀です。

愁さんは私を席に座らせて溜め息をついた。

「疲れてるんですか？」

「いや…大丈夫」

「そうですか…くしょんっ」

「だ…熱は？」

「大丈夫だと思います 多分」

実は熱っぽいです。

昨日の夜ずっと外にいて空を眺めていたので…多分それで悪化したんだと思います…。  
頭がぼおつと……………。

沙紀は一瞬目眩がした。

「おい…本当に大丈夫なのか」  
「は…？」

キーンコーン

鐘が鳴り響いた。

教室の中に担任の内田先生が入ってきた。  
内田先生は私の顔を見て喜んでいた。  
この学校には女子は私だけなんです……………。

「はあい！みんなおはよう！」

「おはようございます」

「今日から運動会シーズンですよー！」

「まじ？」

「じゃあ授業ねえの？」

「ありませえん」

内田先生はVサインをしていた  
授業ないんですか…。  
勉強したかったです…。  
運動苦手なんですよ…。

「じゃあ体操着に着替えて校庭行くわよ！」  
「はいー！」

私どこで着替えれば…？  
混乱している沙紀を見た愁は沙紀のおでこに手を当てた。  
有り得ない程暑いおでこに愁は驚いた。

「おま…」

「へえ…？どおかしました？」

「ちよっ来い！」

愁は沙紀を抱えた。

急にお姫様だっこされた沙紀は拳動不審になっていた。  
鏡と夏樹もついていった。

保健室にて

ピピピッ

体温計の音がなった。

脇から取り出して保健の先生に渡した。

「ん〜39.6度かあ…ちよつと高いかな？」

「あう」

「自己紹介するの忘れてたわねえ…私工藤朱里。保健の先生よ〜」

保健の先生の工藤さん。

とても美しい〜。

頭くらくらししてきました…。

もうムリ…。

バタンッ

私はベッドの上に倒れ込んだ。

あう キモチワルイ…。

といいますか…入学して次の日に倒れるってどうなんでしょうね…私。

バカだなあ…

「沙紀…寝ろ」

「うん…寝た方がいいよっ沙紀ちゃん」

「アス…」

「てめえは黙れ」

夏樹に睨まれた鏡は泣きそうになっていた。

私はベッドの上で眠りについた

あったかいです…。

何か聞こえる…。

「……………くん…どうなの？」

「……………ません」

誰と誰が話してるのかな……………？

何の話をしているのかな……………？

「あら…起きた？」

「せんせえ？」

「まだ熱下がないみたいね…大丈夫？気持ち悪くない？」

「大丈夫です…」

スーッ

隣から寝息が聞こえた。

隣にもベッドはある。誰が寝てるんだろっ…？

隣を向くと何か格好いい人が寝てる…。

誰もが羨むような綺麗な黒髪にすらっとした長身…。  
つてえ!!!

「愁さん?!」

「ん…」

「あらあ…バレちゃったわね」

「なにがですか?!」

「ふふふ。猪垣くんねあなたが心配だったのよ」

工藤さんは私の唇に人差し指を当てた。

色気が有りすぎて熱が上がってきた…。

とありますが…愁さんを”格好いい”と思った?!

あっ 混乱してきたあ…どうしよう!

ドキドキしてまふ…

「あら顔赤いわね」

「へ? いや…ね…熱が」

「熱…あらやだ!」

「?」

「みんな来てるわよ?」

外を見るとさつきから居たのか窓に男子(全員)がへばりついてい  
た。

怖いよおおお?!

隣の愁さんは寝返りをうつてこちらを向いた。

「よによによによっ！」

「美し　　?!」

「にやにやにやにやっ！」

「女あ　　?!」

「し…愁さん？」

「うーん…」

「起きてました？」

「起きてるように見えるのか」

寝起きなのかイラついているようだ。

でも綺麗な顔立ちは変わらないんっす

寝起き素晴らしいです。

「熱は？下がったか？」

「上がってます」

「…って何だよ…お前昨日風呂から出てちゃんと髪の毛拭かないから」

「…すびません…」

「はあ…と愁さんは溜め息を深くついた。

「本当にすびません…」

「熱出したの久しぶりなんで分かんなかったんです…」

「迷惑かけてすいま…」

「別にかかってない」

「え？」

「ただ心配だったただ俺は」

愁さんは私の頭をそっと撫でた  
何て優しいんだろう。  
顔がぼおっと赤くなる。  
これはまさか…

”恋”……………？

いやそんな訳は無い！

無い！

無いと思います…。

でも

顔が赤いの治まらないんですよ

熱のせいですか？

それとも……………

## 第六話 溜め息の理由

キーンコーン…

四時間目終了の鐘が保健室にも鳴り響いた。

さつき熱を計った沙紀は今は静かに眠りについていた。

その隣のベッドにはクラスの男子が全員座って眺めていた。

「寝顔…可愛いな」

「さーちゃん熱あるんだよな」

「辛いよね…」

「てか…愁さんズルいつすよ」

「あ？」

クラスの一人山本克が話しかけてきた。

俺は不機嫌そうに聞いてみた。

ズルいつてなんだよ。

「だってさーちゃんと仲良いじゃないっすか！」

「……………」

「僕らも仲良くしたいんすよ」

「すれば…？」

なんかムカつくな。

俺は別に仲良くしようとして一緒にいるんじゃないかねえし…。

仲良くしたいんならすれば良いじゃねえか。

沙紀は友達がたくさんいれば幸せなんだよ。

アイツの笑顔は何回見ても飽きねえし…。

可愛いし？

俺女嫌いだよな…？

はあ…分かんねえ。

「仲良くしたいんなら、してやれよ」

「え？」

「お前ら良い奴らなんだから」

「愁さん／＼／＼」

うわ…何かキラキラした瞳で見してきた…。

俺昔から男にモテるんだよな…

ホモ疑惑が出たぐらい。

ホモじゃねえからな…。

沙紀が寝返りをうつた。

綺麗な黒髪が赤いリボンで二つに結ばれていて、睫が長い。

やっぱり女の子なんだなって思わせる。

抱き上げた時細くて折れちゃうかと思っただ程だ。

……………心配？

違う。

ただ顔を見ていたかったただけだ

……………変だよな俺。

女嫌い治ったかもな。

「ん…にゃ」

「可愛い！」

「し 沙紀ちゃん起きちゃっうじゃん！」

「ごめんごめん」

「アス…」

「黙れヲタク」

鏡は静まった。

時々ぼそりと

「僕今日全く話してない…」と悲しそうに言っていた。  
ヲタク…ね。

「あれ…ここは…」

沙紀がゆっくりと起き上がった

周りを見渡して俺を見つけたのか一瞬嬉しそうな顔をしたが次には  
つとした顔をして目を逸らした。

耳朵が赤い。

何照れてんだ…？

コイツおかしいんじゃない？

「おはよ！沙紀ちゃん！」

「あ…夏樹くん」

「熱どお？」

「大分下がりました」

「良かった！」

「ご心配おかけしました…」

ペコリと頭を下げた。

その照れ笑いが可愛かったらしく男子はキヤーキヤー言っていた。

……………皆さん元気ですね…。

ではそろそろ授業に出なくてはいけませんね。

つて…運動会シーズンだから授業ないんです！

はあ…

「今日は休むか？」

「え？」

「お前完全には治ってないんだから休めよ」

「愁さん…でも…大丈夫です」

愁さんがなんか優しい！

ていうか…さつき目を逸らしてしまいました…。

愁さんを見ると顔が赤くなってしまっんです。

……………どうしても…。

「アスカ！元気にな…」

私をアスカと呼ぶのはもう止めてください…。

鏡さんは言葉の途中で固まった

男子全員に睨み付けられたからでしょうか…？

「死にたいの？」

ぼそりと夏樹くんが呟いた。私にも聞こえた…。

何かキャラが違う…。

面白い人たちだなあ…何て思いました。

「ねえさーちゃん」

「はい？」

「僕らと友達になってくれませんか？」

「え？」

そんな質問されても…。

まだ慣れてないんです。

でも。

「はい／＼／＼」

慣れていけたら嬉しいです。  
皆さんと友達になれたらきつと幸せです。  
皆さんよろしくお願いしますね

「じゃあ更衣させるから男子は外！」

「え〜〜〜〜〜！」

「え〜じゃないの！ほらさっさと行く！」

男子はブーツと頬を膨らまして残念そうにしていた。  
流石に更衣は見ないで下さいね

十分後

「も 良いですよ？」

ダダダダダダッ

保健室の前で待っていた男子が一斉に入ってきた。  
うわぁ…怖い…  
ビビっていると愁さんが私の腕を引っ張った。  
ストンと立った私を連れて校庭へ向かった。

横顔…格好いいなあ…

は?!

私男の人苦手なはずですよね？  
あう〜何だか分からないよう〜

「今年の優勝は我がクラスが貰った！」

内田先生が大きな旗を作りながら叫んでいた。  
き…気合い入ってますね…汗  
男子は

「ういっす!!」と元気良く返事をしてた。

あのう…私は何をすれば良いんでしょう…?

オドオドしている私を見つけた愁さんは話しかけてきた。

「何やってんの?」

「え?!あ 私何をすれば良いんでしょう?」

「走る?」

「運動苦手なんです…」

「特訓するか?」

「え?」

私は苦笑した。

運動苦手なんですっ!

走るの…。

愁さんはそんな顔をした私の頭を優しく撫でた。  
あったかい…。

「どーすんの?」

「……………くれるなら」

「え?」

「愁さんが一緒に走ってくれるならっ!」

顔を真っ赤にさせて。

そんな沙紀を愁は優しく見つめていた。

照れてんのか？

変な奴……………

こっちが誘ってんだから良いに決まってるのに…苦笑い…

「ああ…良いよ」

目を輝かせていた。

犬…

いや…なんでもない。

ただ可愛いなあっと軽く思ったただけだ。

……………何か文句ある？

「じゃあ走るぞ」

「はい！」

今日の日程は校庭十周。

女子もである。

てか女子は沙紀しかいないのであるが…。

男子は

「おいっちに〜」と元気良く叫んでいる。

沙紀は一周目でへたれていた。

つ…疲れましたあ…

マラソン嫌いです〜（泣）

愁さん元気ですね…

「沙紀大丈夫か？」

「ちよつと疲れました…あ、でも大丈夫ですよ」

「……………んなよ」

「え？」

「無理…すんなよ？」

愁さんはニコツと笑って私を見た。

その笑顔にキユンとしてしまいました！

えーあ…私どうしたんでしょ…？

さっきからずっとずっと愁さんの事気になってしょうがないです…。  
胸がドキドキしてます。

よく…分からないです。

三周目

「ひいつ…ふお」

変な声が出た。

汗がダラダラと出て止まりません…っっ！

はあ はあ ……………！

「後七周だ。頑張れ」

「ふい…！」

四周…五周…六周…七周…八周…九周…

「じゅ…十周…！！…！！」

私は万歳をしながらゴールへ突っ走った。

何だか泣けてきました！

ああ 私ここまで頑張れるんですね…（ー、ー）

バタンツ

勢い余って地面に突っ込んだ沙紀は動かない。  
し…死んだ？  
愁が急いで駆け込むと顔を擦りむいた沙紀がへにゃあつと笑っていた。

ふう……………

安心したのか愁は小さく溜め息をついた。  
そつと沙紀を抱き上げてベンチに連れて行った。

沙紀は

「ど…どうも…」と少し照れ気味にお礼を言った。

「あれ…どこ行くんですか？」

愁はとことこと歩いていつてしまった。

沙紀は首を傾げて空を見上げた

「さーちゃん！大丈夫？」

「え…っ？」

「あ 僕<sup>スメル</sup>克。克って呼んでね」

「は…はあ」

克くんは笑った。

マラソンをしていたのか汗がびっしょりです。  
私はタオルを差し出ししてみました…。

「まじ？優しいね」

「いや…」

「男の子早く慣れるといいね」

と言って私にタオルを返してもう一度校庭に向かって行ってしまいました…。  
忙しい人だなあ…。

ヒヤッ

「うきやあ?!」

突然頬に冷たさを感じた沙紀は変な声を上げた。  
振り返る前にクククツという小さな笑い声が聞こえた。

「どんな声上げてんの…はいスポーツドリンクでいいか？」

「……………愁さん」

「何だよ？急に俺がいなくなって悲しかった？」

「つつつ!」

「凶星ですノノノノ」

そうですよ！愁さんがいなくなって悲しかったんです…。  
ずっと側にいて欲しかったんです!!

これが言えたら良かったのですがねえ…。

ごめんなさい…。

「あり…がとう」

「素直素直」

「愁さんは飲まないんですか」

「俺は大丈夫」

でも水分取らなきゃ倒れちゃいますよ…？

私の飲むかなあ…？

はっ?! 間接キスじゃ?!

自分でやらしい事を一瞬考えた事について沙紀は悩んでいた。

う　　？

いつの間にか顔が赤くなっていた。

「何くれんの？」

今日愁さんキャラが違いますッ

何か 何か ……………

格好いい……………

あうゝゝゝ

いつもなら

「早く飲め」とか

「何だよ」とか冷たい感じですよね…？

……………どうして…？

混乱させないで下さいよお…

またまたぼおっと赤くなる顔を押さえた。

「変な奴…どうかしたのか」

「あれ…?」

「大丈夫か？」

「はあ…」

キーンコーン…

終わった……………。

何か夢が覚めたような気がしますね…？

お家に帰るつて

「沙紀ちゃん！明日！学校お休みでしょ〜？」

「はい」

「遊びにいこーよ」

「遊び…ですか？」

遊び…遊び？

男の子はどの様に遊ぶのですか

カラオケ？

パチンコ？

け…競馬？

え？だんだん親父の遊ぶものになってる？

…………… そういえば……………

そうですね。

「ゲームセンター！」

「ああ……………」

「じゃあレッツゴー」

私は夏樹くんに連れられて街のゲームセンターへと向かいました…

……………。  
はあ……………。

## 第七話 前途多難な二人

沙紀たちは近場のゲームセンターへと向かいました。

学校から10分ほど歩いた所にゲームセンターはあるのです。まあ…なんといいいますか学生たちの溜まり場ですね。遊びに来ている人が沢山いる。沙紀は口をパソコンと開けていた。

こ…こ…こんなの 見たこと無いです…っ！

ピコッ…ティツティティー…

広いゲームセンターの中に沢山あります！

あのウィンウインは何ですか？！

ぬいぐるみが入ってますよ？！

瞳をキラキラさせて喜んでいた沙紀を見て愁が問いかけた。

「もしかしてお前…ゲーセン初めてなのか？」

「はいっ！」

素直過ぎる……………

可哀想な奴…

「あのウィンウインはなんですか?!」

「ウィンウイン…? ああクレーンゲーム」

「クレーンゲーム…」

やりたいやりたい…。

何かやりたい！！！！

そんな目をしていたのか愁さんは私に百円玉を渡してくれました。  
私何をすれば…？

「だから…教えてやるからどれが欲しいんだ？」

「え っと…あれです！！」

沙紀が指指したのは熊のぬいぐるみ。

少女が好みそうな顔をしていた

百円を入れて愁はお手本を見せた。

初めて見るクレーンゲームが余程楽しいのか沙紀は目を見開いて  
いた。

ポトツ

チーチチチチチ

「愁さん凄いです！！わぁ本当に凄い！」

「…………やる」

「え?!本当ですか?!わーいありがとう!!」

沙紀は幼い少女のように喜んでた。

……………私もやらなきゃ!

「やるぞぉ!!」

えっと…百円入れて…あつ動いた…。

これを動かすのかな?

あの熊さんが良いですねっ!!

……愁さん喜びますかねえ？  
いや…喜ばない確率の方が高いですね！  
でも頑張ろうっ！

私はその熊に狙いを決めた。  
か…可愛い…／／／

「右」

「え？」

「熊取りたいんだろ？」

愁さんは腕を組みながら教えてくれた。  
私は右に動かして熊さんの近くに寄せた。

つ…次は何をすれば良いんですか？  
という目で愁さんに聞いてみた

「前に少し…ぐらい」

「はいっ」

熊さんに合わせるように前に動かした。  
クレーンが動きだした。

(これは…楽しいです)

ウーン…………

あっ降りていってます。

どんだんどん近付いていきました。

熊さん…取れます様に！

目を閉じて手を重ねた。  
お願いします…。  
お願いします…。  
取れます様に…。

ガタンッ

チーチチチチチ

「と…取れたっ！取れましたよっ愁さん！」  
「やったな」

嬉しすぎてピョンピョン跳ねている沙紀を愁は嬉しそうに見ていた。  
クレーンゲームの下から熊のぬいぐるみを取り出した沙紀は愁に近  
付いていった。

「どうかしたのか？」  
「あの…熊…好き…ですか？」  
「？」  
「これっ…愁さんに…」

真っ赤な顔をして俺にぬいぐるみを差し出して来た沙紀は子供の様  
だった。

何というか…？  
俺はぬいぐるみは飾らない主義てか男だし…。  
でもこいつから貰うものは嬉しいかもしれない。  
俺はそれを受け取った。

その時のアイツの顔すつごく嬉しそうに照れて。  
「ありがと／＼／＼」なんて言うから笑えた。  
普通だったらこっちのセリフなんだけど（笑）

「ありがとうございます」

「！！！！」

「なんだよ…行くぞ」

「あ…はいつ／＼／」

俺はコイツの笑顔が好きだ…と思う。

出会って二日しか経っていないが…何故だろう。

”嫌い”だった筈の女の事を愛しく思う。  
守ってやりたい。

コイツを苦しめる全てのものから…って歌あったよな…苦笑  
でもそれは俺の本当の気持ちかもしれない。

「ふつたりともくホツケーやろうよ」

「じゃあアスカと僕が…」

「敵だろ…？」

「ひい？！はひっ！そです！」

いつも通りに夏樹が鏡を覗みつけた。

夏樹は鏡に対しては有り得ない程怖いキャラで通ってる。

コントみたいに見えるが現実に見てみる。

俺でも怖いと感じた。

顔は笑ってんのに目は鬼の形相

人間じゃねえから…×

結局俺と鏡、沙紀と夏樹のチームになった。

沙紀は少し悲しそうに俺を見ていた。

う……………っ。

そんな目で見ると…。

抱きしめるぞこの野郎。

／＼／＼／＼／

何言っただ俺は。

沙紀は男が嫌いなんだぞ…俺も嫌われてる。

今のままでいいんだ。

「いくよおっ！」

「頑張らましよう！夏樹くん」

「アス力ああっ」

「……………死」

「ひいひい！！！」

ウケる…。この二人まじウケる

沙紀は天然で二人を無視してるし…何か楽しいわコイツらといると。

「はっじめ〜」

意外と燃えたホツケー勝負。

結果は俺らの勝ち。

沙紀なりに頑張っただけはいたんだが…慣れだな。

悲しそうにうなだれていたから俺は頭を撫でた。

「またやろうな」

「はいっ！今度は愁さんとお仲間！」

ニツコリと笑った。

そんな顔の変化に俺はびっくりしながらも可笑しくなって爆笑してしまっただ。

「負けたのに笑ってたら意味ねえじゃんっ！」

「え？」

「どんだけだよっ！」

俺の爆笑に一番びっくりしていたのは沙紀だった…と思う。

俺は滅多に笑わないし顔怖いしな…

でも今のはウケた！

沙紀は

「何がおかしいんですかぁ」と俺に聞いてきた。

お前の顔だよ…（笑）

「次何やりたい？」

「え っとですね…」

沙紀が探していると後ろから甲高い声が出た。

振り返るとびっくり。

沢山の女子がいたのだ。

う”……………

女…かよ（汗）

「キヤアアア！超カッコイーんだけど！」

「まじ ？！」

「本当だ〜！いやぁん〜カッコイい〜」

ウザイウザイウザイ…

てか逃げようぜ…

俺は逃避行を試みた、がそれは打ち切られた。

何故かというと…

「カワイい〜ちっこいの〜」

「眼鏡くん萌〜」

約一名を除いて男子全員捕まっていたからだ。

沙紀はどうしたら良いのか迷っていた。

一人の女子が沙紀を見て啞然としていた。

沙紀もびっくりしていたようだ

「さーちゃん?!」

「凜ちゃん?!」

「何でさーちゃんがここにいるの?!もしかして連れ?!」

「高校の友達です」

「…あんた男の子苦手じゃなかった…?」

「うん。でも私の高校が男の子の皆さんばかりで女子私だけなんです」

普通に喋ってるよ…。

沙紀が女の子と喋ってるよ…。

中学の友達か…??

しかし…嬉しそうな顔してんだな沙紀は。

てか腕離してくれ!!!

「あの人超ハンサム!」

「愁さんですか?って…皆さんストップです!」

「え?」

沙紀が女の子に言った。

みんな沙紀を見ていた。

「愁さんはダメですよ?」

ときめかせるなあ!!

ダメですよってなんだよ沙紀!!

俺の腕に引っ付いていた女子は諦めないとでも言うように俺の腕を離さない。

沙紀は友達にも言った。

「愁さんは…ダメなんです…」

「アイツら聞かないよ?」

「でも……………」

「彼氏なの?」

彼氏っていう言葉に凄く反応していた沙紀の顔が笑えた。

今の状況は笑えないが。

俺はコイツらを無理やり離して沙紀の方へ向かっていった。

沙紀は俺には気付かない。

ポンっ

「え?あれ?愁さん」

「ごめん。コイツ俺のだから」

「ふうん…やつぱりね。」

ちゃんとさーちゃん守ってやれよ」

男勝りな口調の女は沙紀を大切に思ってる。

俺は頷いた。

沙紀はゆっくりと俺の方を向いてきた。

耳朶まで真っ赤だ。

初めて会った時は真っ青だったのにな。  
トマトみたいになってる沙紀を持ち上げた。

「えっ?! ちよ…愁さん?!」

「お前さ…その気にさせんなバカやろう」

「?????」

俺の照れた顔に一番驚いていたのは夏樹と鏡であった。

「愁くん…ありや惚れてるね」

「アス…」

「てめえは死ぬか？」

「いやあ!」

沙紀ちゃんも愁くんも…前途多難って感じだね。  
これじゃあ両想いだって事気付くか分からないね……………。  
どっちが言うのかな…?

一番この二人を理解していたのは夏樹かも。

## 第八話 初恋そして失恋（前書き）

読んでくれた方が200人を超えました！  
ありがとうございます！

今回はちょっと暗めです……。

## 第八話 初恋そして失恋

「で…なんで愁さんは私を…持ち上げてるんですか?!」  
「知らねー」

さっき私何言っていました?!

ど…どうしよう…

ドキドキしてます…。

「愁さんはダメですよ」って言ってました…?

そうですねっ!愁さんだけは誰にも渡したくないんです。

大切な大切な人だから…っ!

まだ俺分かんないんだ。

コイツの顔見ると落ち着いて側にいてやりたい。

誰にも渡したくない。

絶対に。

「愁さん…あの…」

「ん?」

「愁さんの事…沢山知りたい…です」

どういう意味だ?!

ドキドキさせてんじゃねえよ!

あっびっくりした。

お前それがどういう意味だか分かってんの?

まあ…分かってないと思うけど

俺は顔を赤くした。

「俺の事知りたいの？」

「はいっ」

「……………どういう事？」

「生年月日や好きな物などですよっ！」

「ふうん」

によこつと俺の後ろから夏樹が出てきた。  
助かった……………。

夏樹は自己紹介（俺の）をし始めた。

「猪垣愁、16歳、好きな物はオムライスで、誕生日は12月24日なんだよ。好きな人は近くににいる人々だと思っよ」

「なっ…つき！」

「あはは、バレバレだよ愁くんはあ」

夏樹には負けるよ……………。

コイツには何でも見破られるし

でも相談に乗ってくれるからすげ 良い奴。

友達たくさんいるわけだな……………

てか…沙紀にはバレてないみたいだな……………

あれ…メモってる。

てか涙ぐんでる……………？

え？！

「な…何で……………」

「じゃあ片思いなんですかね？！」

は…………………………？

まあ…そうだけど？

次に顔を真っ赤にして笑っていた。

一体なんなんだよ…

「ところで沙紀ちゃんのプロフも教えて〜」

「プロフ？」

「プロフィールだよん」

「はいっ！水野沙紀、15歳です。好きな物はおでんです！好きな人は…現在片思い中です…。いつか告白しますっ！あ…誕生日は四月三日です」

「なるほど〜…ん？」

「誕生日四月三日？」

「はいっ！」

「明日じゃんっつ？！」

重大発言だろ！！！！！！

ええええ？！

ちよつと待てよお前…

はあ……………汗

それを先言え…。

「じゃあ明日ぼくんちでパーティーやろう！」

「良いんですか?!」

「クラス男子も来ると思うけどね〜」

「大丈夫…ですっ…多分…」

沙紀は嬉しそうだ。

まあ…両親のいない沙紀にとっては家族みたいなもんだしな。

まてよ……………？

プレゼントどうする？

金はあるが…女にプレゼントをやったことが無い俺にとっては難しい問題だそ…

ペンダント…？  
いや普通すぎる…。

……………あれしかないな。  
決定だ。

明日学校サボる。

何となく沙紀の笑顔が浮かんだ  
その笑顔が可愛くて／＼／＼明日が楽しみだった。

告白してやる……………！

次の日

ピピピピッ！……………！

ウザイ…目覚まし。

毎回この時間になるように設定したのは俺だが。  
悪態を付き気味にそれを止めた

今日はサボる気満々。

てかサボんなきゃアイツのプレゼント買えねえ。

「に」

「あ…これな」

飼っている猫二匹に牛乳を差し出した。

レモンとイチゴ。

果物が好きだからもあるがただ単に覚えやすいからという意味もある。

俺は外に出た。

太陽はとつくのとうに上っている。

現在 9 : 30。

完全に遅刻している。

てかアイツの学校あんま行きたくね ……………。

あのバカ親父。

舌打ちをしながら歩いていった

「てかサボリ久しぶりな気がすんな…」

「静かだな…」

だんだんと沙紀達の声が聞きたくなってきた。

いつもなら沙紀と夏樹と鏡がいる。

孤独を感じなかった。

でも今は…淋しい。

アイツらがいたから俺は俺でいられたんだ。

あの日家を飛び出した時夏樹が泊めてくれた。

まあ…びしょびしょだったし黒猫みたいな俺を。

そついや夏樹の自己紹介してないな。

灰原夏樹。

年齢は同じ年で好きなもんはケーキとか甘いもんが好きだと。

家は父親が社長の超お金持ち。

俺とは小学生の頃からの仲。

優しくて利点が効く。

親友の一人だ。

誕生日は七月七日。

もう一人鏡の事だ。

椎羅鏡。

年齢は俺と一緒に。

好きなもんはラーメン。あとキャンディポリスのアスカっていう人が大好きらしい。

良く沙紀をアスカと呼ぶのは顔がそっくりらしいからだ。

……………今度見てみるか。

誕生日は十一月三日。

俺は”ある場所”へと向かっていった。

「愁さん…今日お休みですかねえ…」

「あれはサボリだね」

「サボリ…ですか」

今日に限ってサボリとは…愁さん風邪でしょうか…？  
凄く心配です。

……………会いたいです。

側にいたいです。

……………愁さん。

キーンコーン…………

「ホームルーム始めるわよ…ってあら…珍しく猪垣くんがいないわね」

内田先生は早くも愁さんがいない事に気がついた。

私はヤバいと思いつち上がった

「どうした〜?」

「あのっ…愁さんは用事があるらしいですっ」

「あら」

「私伝えてくれって朝言われたんです…」

「そう、ありがとう」

とっさに出た嘘 ウソ。

本当は嘘は嫌い。

でも愁さんが悲しむのは見たくないんです。

初めて嘘をつきました。

夏樹くんは後ろで良く言ったねと爆笑していました…。

つまらないです…

いつの間にか愁さんは私にとってかけがえのない人になっています。

だから…

会いたいです

昼休み

「今日は僕んちにそのまま来るから…って聞いてる?沙紀ちゃん〜?」

「はい?」

「ふふ…可愛いね」

「え?!」

夏樹くんは不思議な笑みを浮かべた。

か…可愛い?

誰がでしょうか…？  
私な訳無いですし…？

時間が過ぎるのが早い。

愁さんの事を考えていると一時間ずつ過ぎていく…。

胸が苦しい…………。

も…もしや可愛い彼女さんとデートしていたり…うわぁ〜ん。  
それは嫌です〜！

「愁くんの事考えてたの??」

「え?! いえ…はい…」

「どっち?」

ケタケタ笑っていた。

夏樹くんには負けれます。

何でもお見通しですもん…………。

はぁ…早く夜にならないかなあ

「これ…下さいって…姉貴?!」

「愁?! なんであんだ」

「……………」

「ふふ…彼女?」

「……………まあな…」

違うし…!

沙紀のプレゼントだ!

まあ……………って何だよ俺?!

今プレゼント買いに来てるんだけど…初めてだ。

プレゼント買うの。

しかも女の子に。

分かんねえからこれにした…。

喜ぶかなアイツ。

姉貴は俺に色々と聞いてきた。

話しにくいタイプだ。

「へへサボリか」

「……………」

大学生のくせに…。

そっちは学校ねえのか？

全く……………。

俺はそれを貰うと普通に帰っていった。

俺には姉貴がいる。

名前は猪垣馨イノガキカオル

大学生のバカ女。

頭は良いけどバカ女。

……………はあ……………

「てか…姉貴あそこで働いてんだな」

夜

早く来ませんか…？

沙紀は夏樹の家で待っていた。

クラスの男子は殆どがお金持ちなので服はきちんとしていた。

……皆さんお金持ちなんですね  
少し苦笑いをしてみた。  
目の前に克くんがやって来た。  
克くんは私に飲み物を渡してくれました。  
オレンジジュースです。

「…ありがとうございます」

「愁さん遅いね…?」

「はい…」

「ねえさーちゃん聞きたいことあるんだけど」

「はい?」

克くんはヤケに真剣な顔をして言葉を言った。

「彼氏いる?」

いるわけないじゃないですか。

私男の子苦手ですよ?

でも好きな人はいます。

………あはは。

まる分かりですよね。

「いないですよ」

「なら…」

「でも好きな人はいますよ」

「そっか…」

いますよ…愁さんが。

と言いますがまだ好きか分からないんです。

ドキドキするだけです。

「僕…諦めないよ……」

「へ？」

克くんは私の頭をそっと撫でて歩いていってしまった。

何て言っただんですか？

わからない……？

ピンポーン

そんなタイミングでベルが鳴り響いた。

愁さんだっ……！！

私は夏樹くんと一緒に玄関へ向かった。

愁さんに会えるっ……！！

私は嬉しかった。

が………

「愁さ………」

「ごんにちはあ〜」

「………」

愁さんの腕にはかわいい女の子がくっついてた………？  
かわいい……女の子？

「この子がさーちゃん？？」

「わ……わ……わ」

「初めまして〜 私静っていいま〜す」

.....

.....

その人が好きな人ですね…愁さん。

私あなたが好きです。

でも…もう諦めます。

涙が出そうだった。

だから一生懸命笑って笑って忘れま〜す。

えへへ…

静さんですか…。

やっぱりだめですね。

私は外に飛び出していった。

腕を一瞬掴まれたけども私はそれを払い走って行ってしまった

私…だめな人ですね。

泣くのおばあちゃんが死んだとき以来です。

来るときに見かけた公園のブランコで泣いています…。

告白してないのに振られた気分です。

「うう…うう」

声を押し殺そうとしてるのに出てくる。

悲しくて悲しくて悲しくて悲しくて悲しくて…

あう !

「さーちゃん！」

後ろにいたのは愁さんではなく克くんだった。  
何で愁さんじゃないんですかあ  
何で克くんなんですかあ

「泣いてるの……？」

返事ができない。

声を出せば嗚咽が止まらなと思います。

もう　　良いんです。

「さーちゃん？」

「克……くん……？」

「うん」

克くんは私の隣のブランコに座った。

こっち見てますね。

絶対笑ってますね。

笑ってくれた方が良いですよ……

すごくお似合いだったんです愁さんと静さん。

私なんか枝豆ですよ……？

枝豆の意味は無いですよ……

「どうしたの？」

「……」

「大丈夫？さーちゃん」

「はい」

「あの人……愁さんの……」

「ごめんなさい」

沙紀は克の言葉を遮って謝った  
何故謝ったのか分からない克は沙紀を見た。  
沙紀は泣いていた。

それがすごく綺麗で。  
驚いたんだ。

こんな綺麗な女の子いないから  
小さな子供みたいに肩を震わせて。

「僕の胸貸すよ？利子付きで」

「何で…」

「利子付きやだ？」

「何で…優しくするんですか」

彼女は涙を流して僕の顔を見ていた。  
真っ赤な鼻に小さな顔がかわいくて綺麗で。  
抱きしめたくなった。

「うわあああんっ！」

ビクついた。

急に大声で泣き出すんだもんこの子。  
飛びついてきた。

「よしよし………」

子供だね…。

てか…泣いた理由僕分かつちゃったんだよね。

愁さんでしょ？

愁さんの事好きなんだよねさーちゃんは。

僕もさーちゃんが好き。

初めて見た時から好きだった。

”好き”なんだよ……………？

二人は走ってきた愁に気が付くことはなかった。

「沙紀……………」

第九話 告白・コクハク・(前書き)

今回は愁サイドで書いてます。  
お楽しみ下さい

## 第九話 告白・コクハク・

……俺何があつたのか良く分かんねえんだ。  
でも一つだけ分かる事。

それはアイツが泣いていた事。

俺の腕を振り払って走っていった。

後から克が走っていったのをただ見るだけで。

何も出来なかつた。

泣いてるアイツを抱きしめることも。

好きだって言う事も。

コイツのせいだ。

一時間前

「確か五時だよな……」

時計を見ると四時だ。

あと一時間ある。

何しよう……？

ソワツ……

何か鳥肌がたつた。

嫌な予感がして振り向くとその通りだ。

「あら、誰かと思ったら愁じゃなあい」

「お前……それ……」

「情報」

「ついてくんなよ」

後ろには美少女がいた。  
違うだろ…作者。

美男子だ！！！！

この女装している奴は俺の…従兄弟だ。

あ

ね

き

！！！！！！

「さあ行きましょう！」

「腕を掴むな！」

「キレイないキレイない」

語尾にハートを付けたコイツに俺は溜め息をつくだけだ。

コイツは路乃静ミチノシズカ

オトコだ！！！！

美少女に見えるけど男。

ついでる（笑）

「今日俺忙しいんだけど」

「私暇よ」

「同年だからって俺の学校くんなよ？」

「行くに決まってるじゃない！可愛い子いるんでしょ？」

「ああ…沙紀？」

「沙紀ちゃん！可愛い〜！」

結局コイツも来ることになった

……………はあ……………

ピンポーン

鐘を鳴らした。

部屋から走って来る音が聞こえた。

沙紀だな……………？

どんな顔すんだろうな。

「愁さ……………」

「こんにちはあ〜」

「……………」

静つてめえ……………！

何か様子が変わだぞ…………沙紀…………どうしたんだ？

てか腕離せよ！

「この子がさーちゃん??」

「わ…………わ…………」

「初めまして〜 私静つていいま〜す」

沙紀は静の顔をみるなり俺を見つめた。

何か…………悲しそうな目をしていた

次の瞬間沙紀は俺の横を通り抜けていった。

俺は沙紀の腕を掴んだ。

「そ……………」

でも沙紀はそれを振り払って走っていった。

それについていこうとした時後ろにいる克に言われた。

「愁さんさーちゃん泣かせないで下さい」

男に睨まれたのは初めてだった

克は走っていった。

俺は止める事も出来なくて立ちすくんでいた。

「一体…なんだよ…」

「ああ〜お邪魔だったかしら私」

「……………」

「追いかちなさいよ」

「アイツ…」

俺は沙紀の涙を見て体が動かなかった。

俺は…何をしたんだ？

誰か教えてくれよ…。

「弱虫だねえ全く」

「…夏樹」

「行つてきなさいよ」

「…静」

俺は玄関から走った。

近くの公園だと思った。

三分ぐらい走ったら公園に沙紀がいた。

…………… 克もいた。

「利子付きやだ？」

「何で…優しくするんですか」

沙紀は克に聞いた。

俺は動きたくても動けなかった

「うわあああん!!」

遂に沙紀は大声で泣き出した。

アイツの胸を借りて。

わんわん泣いていた沙紀を克は抱きしめて頭を撫でていた。

「よしよし………」

そんな沙紀を見る克の目は優しかった。

俺は沙紀を幸せに出来ないと思った。

泣かせてごめんな。

で現在に至る。

俺は夏樹ん家の夏樹の部屋で泣いていた。

つか泣くの久しぶり。

てか初めてじゃねえ?

枕に頭突っ込んで声を押し殺して。

コンコンッ

誰だよ…こんな時に。

「僕だよ」

「な…つき?」

「正解。入っていい?」

「ああ…」

近くにあつたティツシュで鼻をかんだ。  
あ じんじんする。

俺の顔を見た夏樹は爆笑していた。  
失礼な奴。

笑いたきや勝手に笑え。

「あははっ！は … お腹痛いよ …！そろそろ沙紀ちゃん帰ってきたよ」

「…」

「克くんとね」

「あそ」

そいつの名前を出すな。

怒り爆発しそうだ。

「静くんが男だつて言えばいいのに」

「…え？」

「気付かなかつたの?!」

「…うっせ」

また爆笑し始めた。

アイツ俺が嫌いで逃げた訳じゃ無いんだ。

何か…疲れた。

もう…いいんだよ…。

「弱虫」

「なんだよ」

「沙紀ちゃん好きなら好きって言えよ」

あ…ヤバいかも。  
鏡モード入ったな（汗）  
これ恐いんだよ…。

「ただのくそガキが。好きな女泣かせて」

「……………」

「情けねえと思わねえのか愁」

愁って呼ばれた…！！

てか…怖いんですけど。

情けないと思うが…。

「思いを言わなかったら何も始まらねえんだ！！」

はいつつつつ！！

すいませんっ！！

君が一番怖いです！！

……………はああ…。

どうやって言えば…？

「そのままだ」

「そのままって？」

「言いたい事全部に決まってるだろくそガキ」

「なあ…夏樹」

「あ？」

「戻ってくれたら言いにくよ俺…」

もう嫌です。

そんな怖い空気。

戻れ戻れ戻れ戻れ！！！！

「じゃあ愁くん頑張ってるね!!」

「ああ…」

戻ったよ…鬼畜キャラから…。

てか一気に疲れた。

言う気力残ってるか……はいっ残ってます!!

俺は夏樹の部屋から飛び出ていった。

沙紀発見。

克と一緒にいる。

「沙紀」

「え?………」

「来い」

「あの………」

「だめですよ愁さん。今さーちゃんは僕と……」

「俺と沙紀の問題だ」

我ながら言いセリフ。

俺は沙紀の腕を引っ張りベランダに連れて行った。

までは良いんだけど……。

またアイツが……

「ああ……お二人さんどうかしたの〜」

「げ……」

「あの……私帰ります」

俺の腕を払って戻ろうとした沙紀に俺は言った。

「待て沙紀。」

「え？」

「お前に話がある」

「でも……」

「聞いてくれ」

沙紀は混乱していたが頷いた。

コイツもいることだし。

口を開いた。

「あのな……まず誤解を解くでしょう。コイツは男だ。OK？」

「……………男？」

「あら〜バレちゃった」

「男おおお?!」

「ごめんね〜」

男だとバラすと静は帰っていった。

微妙な空気が流れる。

なんだこれは。

……………。

沈黙の時間が流れた。

「じゃあ……好きな人じゃないんですね」

「当たり前だろ」

「良かったです……」

「え？」

「私言えますね」

「何が？」

何が言えるんだ？

”嫌いです”って言われるっすか…？

それはちよつと…。

でもなあ…あ　　！！

泣きてえ超泣きてえ！

耳塞ぎてえ！！

「私愁さんが……」

「待った！」

「え　つと……」

「俺が先に言う」

「ズルいですよ？」

「だっ……」

「分かりました。どうぞ？」

ム力つく…この笑顔。分かりきってる顔だ。

言ってやるうじゃん！

深呼吸して俺は口を開いた。

「俺は…お前が…す……」

はずいはずい………

告白なんか初めてなんだよ俺さ

あ　　！

「す…きだ」

「はい」

「沙紀が好きだ！」

「はい／＼／＼」

意外と普通に返事したよこの人  
はい…しか言っていないんだけど  
一応告白したんだよな。  
気持ち伝えたんだよな。  
不安になつてきた。

「で…そっちは？」

「あ、はい。好きです」

「早っ?!」

「ずつと言おうと思つてたんですよ」

沙紀は照れ気味に言っていた。

いやそれにしてははつきり言い過ぎだろ？

まあ…両想いだな。

ああ…嬉しい。

「じゃあ…付き合つて下さい」

「俺が言うセリフ…」

「ふふふ」

「付き合つてくれ」

「良いですよ」

可愛い…可愛い過ぎる。

この純な顔。

抱きしめていいのか？

抱きしめてえが…。

いいのか？

「……………良いですよ？」

「心読んだ?!」

「テレパシーですよ」  
「なるほど」

俺は沙紀の腰に手を伸ばした。  
そして抱きしめた。

沙紀は嬉しそうに俺の胸に顔をうずめた。  
可愛い過ぎるぞっっ！

ぎゅっっっ……

「愁さん苦し〜」

「あ、ごめ」

上目線で俺を見上げた沙紀の瞳には俺が映っていた。

キラキラしていて…

可愛い。

すっごく可愛い。

あ　幸せ。

こんなに幸せなのは初めてだ。

誰も見てないよな……？

あ…見てねえ。

見られたくねえ。

「克くん〜良いの？」

「うーん…本当は嫌だけどさーちゃんのあの笑顔作れるのは愁さん  
だけだからね」

「優しいね〜」

「ふふ。ありがとう。」

「嬉しそうに笑ってる愁くん」

「本当だね。これは僕からの誕生日プレゼントにしとっかね」

克は笑った。

本当は諦めてないよ。

でも悲しませたくないから僕はひく。

でも…いつか。いつかまた泣いていたら返さないから。僕はさーちやんが好きだから。

幸せになってね

## 登場人物紹介 (前書き)

初めて読む人も読んで下さっている人も気楽に見て下さい！

## 登場人物紹介

\* 本編主人公\*

水野沙紀

ミスノサキ

主人公。

高校一年生で15歳。

重度の男嫌いである。

両親は離婚しており祖母と住んでいた。

天然で照れ屋な女の子。

好きな物はおでん。

誕生日は四月三日。

牡羊座のO型。

猪垣愁

イノガキシユウ

高校一年生で16歳。

重度の女嫌いである。

父親は沙紀たちが通う橘高等学校の校長。

生真面目で優しい。

誕生日は十二月二十四日。

山羊座のA型。

灰原夏樹

ハイバラナツキ

高校一年生で16歳。

裏と表が激しいのが難。

いつもはキャピキャピキャラである。

好きな物は甘いもの。

誕生日は七月七日。

蟹座のA B型。

シイラキヨウ  
椎羅鏡

高校一年生で16歳。

アキバ系が大好きなオタク少年

いつもは無口の眼鏡だが沙紀を見ると騒ぐ。

キャンディポリスのアスカが好き。

誕生日は十一月三日。

蠍座のB型。

ヤマモトスゲル  
山本克

高校一年生で16歳。

初めて見たときから沙紀が好き

愁を尊敬している。

運動神経が良い。

誕生日は八月十二日。

獅子座のO型。

ミチノシズカ  
路乃静

高校一年生で16歳。

綺麗な顔立ちでいつも女装をしている男の子。

愁の従兄弟。

髪の毛は地毛。

誕生日は五月十八日。

牡牛座のA B型。

ウチダアケミ  
内田朱美

沙紀たちの担任で26歳。

元気がある優しい先生。

沙紀の事が大好き。

結婚したいらしい。

運動神経は抜群！

誕生日は二月二十八日。

魚座のA型。

第十話 満月に替って（前書き）

何かラブラブです…。

今回は沙紀サイドです。

## 第十話 満月に誓って

私嬉しかった。

愁さんが私を好きだって言ってくれて。

初めてこんなに幸せになったんです。

愁さんの体は暖かくて優しくして

ぎゅっってされた時私この人が好き……って気が付いた。

これが”好き”っていう事に気が付いたんです。

実は克くんにも告白されてしまいました。

皆さん気になっていらっしゃると思いますのでお話させて頂きます。

一時間前

「うわあああんっ!!」

大泣き中の私。

こんなに泣いたのは初めてだったから……。

克くんはずっと私を抱き締めてくれて。

何で私こんなに泣いてるんでしょうか……?

何分か泣いていると疲れてきて泣き止んだ。

「大丈夫?さーちゃん?」

「はい……すみません」

「ねーさーちゃんは愁さんの事好きなの?」

「?!」

「バレバレ」

ニヤツと笑った克くんは何だか不気味です。  
バレバレでしたか…。

ならどうして？

私を抱き締めたんでしよう…？

克くんは

「笑える」と爆笑し始めた。

そんなに笑わなくても…。

「あはは〜」

「……可笑しく無いですよ！！」

「愁さん嫌い？」

「いいえっ！あ…。」

「正直だね。」

笑ってたのに妙に真剣な顔になった。

私…空気に吞まれそう。

何言われるんだろう？

ゴクリと唾を飲み込んだ私は変な汗が流れていた。

緊張するんですが…？

そんなに見つめないで下さいよ

「僕さーちゃんが好きなんだ」

「……………はい？」

「だから好きだっ！」

「……………あのう…。」

「ん？返事は？」

「さっき私に愁さんの事好きか聞きましたか？」

純粋な質問である。

バレバレ っって言っていましたよね？！

おかしいですよ?!

涙完全にひっこまりましたよ!!

あ !

びっくりしました!

冗談…ですよね…? 克くん冗談ですよね…?

「へ んじは?」

「……」

「OKなの?」

「……ません」

「え?」

「すみませんっ!!!!!!」

顔を真っ赤にして私は克くんに言いました。

断ってるのに何故赤くなっただんでしょう…?

でも…ごめんなさい。

私まだ愁さんが気になって気になってしょうがないんです。

忘れようとしても忘れられないんです…っ!

……好きなのが分からないんですっ!

分からないんです…。

「あ あ振られちゃった…」

「ごめんなさい…」

その割には顔笑ってますけど克くん?

何だかよく分からないんですけど…?

「じゃあ帰ろっか?」

「はあ…」

「行くよ?」

克くんは私に言った。  
私はブランコから立ち上がって家に戻ることにしました。  
克くんと二人で。

で、今に至ります。

「寒くないか？沙紀」

「大丈夫」

「…克と何かあったのか…？」

「え?! 無いですよ!」

「……お前は嘘を付けない人だからな……」

バレバレですか…また。

告白されてしまいましたなんて言えませんか！  
嘘を付けない人なんです…私。

ごめんなさい

「告白されたんだろ」

「なんで?! あ…あ」

「やっぱりな。そうだったのかよ…あいつ…」

「でもっ…私…愁さんが…好きだから…」

「……… / / / / /」

愁さんは紛れもなく照れていたと思います。  
ふふふ。

私にとって最高の誕生日会です

ありがとうございます。

神様…!

「あのさ…」

愁さんが私に言ってきました。  
な…何を言われるんでしょうか

「これ…プレゼント…」

「え？」

そつと差し出してきたのは花束だった。

色とりどりの花がピンクのリボンに包まれていた。

それを私に渡した。

……………照れてる。

照れてますね愁さん。

／／／／／／／／／

私も照れてきました。

「ありがとうございます」

「……………／／／／」

「どこのお花屋さんですか？」

「flower arrangement」

「知ってます！！嬉しいですよ」

その花はすごく綺麗でした…。

今夜は泣いたり笑ったり色々疲れました。

でも…幸せでした。

ありがとうございます。

月が綺麗でした……………。



## 第十一話 幸せという光

さて、今朝は打って変わって運動会練習が再び始まりました。

沙紀は校庭をいつも通りに走っています。

毎日走っているうちに慣れてきたようです。

隣には愁さんが。

なんてまあ…仲良さげに話してるんでしょう。

あの沙紀の誕生日から既に二週間経ちました。  
運動会は明日です。

「明日ですねっ！」

「お前元気だな？」

「はいですよっ！」

「はいですよっ…」

「え?!」

「何でもねえよ」

あんの親父、沙紀の事に気が付きやがった。

夜中メール来たし！

『最近はずせだろっ！！彼女出来たら紹介しなさいよ家出少年』

『

ウザイウザイ!!

てかメアド変えたのに何でくんだよ?!

あ~~~~~?!

あの日かつ?!

充電器取りに行った日!

山揉さんっつ!(メイド)

何か仕掛けられそうだな…。

心配になってきた。

あんのくそじじい!

若いかな…。

愁は小さく溜め息をついた。

実は愁の父猪垣校長は愁の本当の父ではない。

姉の誓も違う。

この二人は本当の姉弟なのだが猪垣校長に養子として引き取られた。猪垣校長の奥様つまり愁たちの義母は子供が出来ない体だった

そんな時両親を飛行機事故で亡くした愁たちを引き取ったのが彼等なので校長は若い…。

奥様は元気ですよ。

え?校長の名前?

自己紹介してっつ!

「良いですよ?わたくし猪垣<sup>イノガキケンイチ</sup>研一と申します。年齢は若いですが仕事はきちんとしてますのでご心配なく」

ありがとうございます…。

何故愁が出ていったのかはいつか説明しますね。

「お父様と仲悪いんですか?」

「仲悪いってか…」

「仲直りして下さいね」

「いつかな。ほら走れよ！全く」

愁さん照れてるのか怒ってるのか分かりませんが面白いです。  
私赤組が良かったです。

愁さんと仲間になりたかったんですが…。  
残念です…

「おいっちに〜」

「沙紀も慣れてきたな」

「マラソンっですか？」

「ああ」

「運動会一緒に頑張りましょうね！」

沙紀はにっこり笑った。

そんな顔にキユンときた愁は首を縦に振りまくっていた。  
後ろから声がした。

「沙紀ちゃん！愁くん」

「アスカあつ！」

「しぬ…」

「すいませんっ！」

夏樹と鏡がいた。

二人はいつも通りに仲良く？会話をしていた。

「夏樹くん！！鏡さん！！」

なんつ 嬉しそうな顔してんだコイツは。

まあ…俺達が入学して二週間経ったしな。

男が苦手な奴でも流石に慣れるだろう…と思った人はだめだ。

沙紀はまだ”俺ら”にしか慣れていない。  
てか…俺ら付き合ってるんですがねえ…

「今日も走ってるねえ」

「はいっ！優勝目指してますからねっ！」

「他のクラスは女子がいないからな」

「そうなんですよ…あっ！！静さんだ！！」

「呼んだあ？」

静は結局俺達の学校にきやがった。

しかも女として！

顔だけは女だからいいものを

親父には説得したらしい…ふざけんな…

「静さんは私のクラスだから一緒ですね！」

「そうよーさーちゃん相変わらずかわゆす」

「か…かわゆす？」

「可愛い〜っていう意味よ」

沙紀は顔を赤らめた。

そんな反応が気に入った静は沙紀を抱きしめた。

こうして見ると静も女に見えないこともない。

鏡意外の全員が頷いた。

「しっ静さんは運動とか好きですか？」

「運動〜？」

「私最初は苦手だったんですが最近好きになりました！」

「私はね〜化粧とか得意なのよん 今度さーちゃんにも化粧してあげるからね〜」

「ありがとうございます！！」

だからその笑顔不意打ちだこの野郎っ！  
俺はただ一人顔を赤らめていた

その後沙紀達は練習を終えて鏡の家にお邪魔する事になりました。  
鏡の家は普通な家…ではありません。

夏樹よりデカイ？  
かなりデカイ家です。

「うひゃあ　?!」

今叫んだのは沙紀。

デカすぎてびっくりしたらしい  
金持ちばかりの学校だからね

「じゃあ来て」

「お…お邪魔しますね」

「アスカ」

「死にたい人手上げて」

「ごめんなさいごめんなさい」

やっぱりこのコント笑えるわ

沙紀はびっくりして口をパカンと開けてるし。

まあ俺も初めて来たときは驚いたしな。  
シャンデリアなんて今頃ねえからな。

「あらお友達………?」

「お姉様」

お姉様?!

ここは何処ですか?!  
イタリア?! フランス?!  
しかもお姉様美しいですよ!!  
なんか…カンドーです。  
クルクルした茶髪の髪はお嬢様を想像させます。  
こんな綺麗な方見たことありませんっ!

私がぼーっと見とれているとお嬢様が（お姉様）こちらを向きました。

瞳を輝かせて抱きついてきました……………?  
ぼ…ポリュームが…。

「可愛いですわっ！鏡！彼女ですの?!」

「違いますよ。彼女は愁の彼女です」

「あら…」

「ふがふがふ…」

「あら、すみません」

ドデカい胸から解放された沙紀は呼吸を整えていた。  
顔は真っ赤である。

む…む…胸おつきいです…?!

くるしかったです…。

ほわぁ…素敵です…。

「大丈夫かしら? んまあよく見ても可愛いですわっっ!」

「お姉様僕は部屋に行きますのでそろそろ」

「分かりましたわ。では後でお茶しましょうね〜子猫さん」

「こ…子猫さん?」

「ふふふ〜」

何だか不思議な方ですね。鏡さんのお姉様。  
胸おつきいですし…。

いやっ！そこは関係ないですよねえ…

「子猫さん」

「はいっ?!あれ愁さん!?!」

「わりいわりい」

「もっっ!」

私はぶうつと頬を膨らました。

鏡さんが顔を赤らめながら声をかけてきました。

「部屋どうぞ」

「失礼しますね」

軽く鏡さんにエスコートされて部屋に入った。  
部屋に初めて入った沙紀は心の中でこう思った。

(シンプルイズベストですね…)

その通りだった。

机の上にはパソコン一台で筆筒が一つ。

ベッドははじっこに置いてあったのだ。

他には難しそうな本がずらりと並んでいた。

(真面目…ですねえ)

驚き顔をしていた沙紀を鏡は座らせた。

「アスカ」

「はい？」

「僕アニヲタなんだけど変って思わない？」

「思いませんよ？」

「何で？」

「そうですね…人には個性があると言っじゃないですか？それですよ？」

そう言うと鏡さんは立ち上がりパソコンを持ってきた。

何を始めるんでしょう？

というより…初めて見ましたパソコンという物。

こんなの何ですねえ。

あ…付きました。

Windows…って読むんですかねえ…？

こんなもの良く使えますねえ…

「僕はパソコンでもあるんだ」

「パソコンヲタクですか？」

「うん」

カチカチカチカチカチ

は…早いっ?!

何でこんなに早く打てるんですか鏡さんは?!  
すごいです。

見に入ってた沙紀を愁はずっと見ていた。

アイツ絶対パソコン見たの初めてだな…。

キラキラ輝かせてるよ。

「昔からヲタクだった訳じゃないんだよ」

沙紀は急に話を始めた鏡にびっくりしていた。

パソコン見ているのにどうして話が出るんですか?!  
何か凄いです!!

「僕の家…まああいう系だから苦手です…」

「私も少し苦手でした」

「それは良いんだけどさ何かつまなくて」

「つまらない？」

「こんな良い家なのに？」

夏樹くんが鏡さんに笑いながら聞いた。

私も気になります!!

鏡さんは少し困惑そうに口を開いた。

「良い家じゃないよ……ここは息が苦しい」

「”坊ちゃん”として生活する事がですか？」

「うん……」

「でもそれは気にしなければ良いんですよ!!好きな事は好きで結構です!!息が苦しいのなら私たちと沢山遊びましょう!」

「……………うん／＼」

鏡はニツコリと笑った。

実はといえば鏡は笑ったことが無かった。

いつでも無表情で感情を表さないから。

だからこんなにも優しく笑ったことは俺は見たことが無かったのだ。

びっくりした。

きつとアイツがいたから鏡は笑えた。  
鏡にとつても沙紀は大切な人なのかもしれない。  
沙紀は幸せを運ぶ奴だ。

……………。

静さんが話を変えて私に聞いてきました。  
静さんいましたよ…？

「ところで、愁とさーちゃんどこまでいったの？」

「は?!」

「沙紀耳を傾けるな」

「その反応じゃキスもまだみたいね」

クククツと小さく静さんが笑った。

私は顔を真っ赤にして頭から煙が出そうだった。キス…キス…?  
キスっていったら唇に唇が……

ポツ…

また顔が赤くなった。

「かわい〜」

「かわい〜って言わないで下さいよっ／＼／」

「照れてる!かわい〜」

「／／／／」

愁さんが隣でため息を付いて私を持ち上げた。

私だから重いつてい…

「沙紀、帰るぞ」

「え〜っと…まだ来たばかりじゃないですか」

「お前に聞きたいことがあるんだよ」

「？」

「つて事で俺ら帰る」

「バイバイ」

「アスカあああつ」

「死にたい？」

コントが始まる前に帰るとするか。

話したいこと？

そんなのねえに決まってるだろ

何か嫌だったただけだ。

誰かが沙紀を好きになる…俺は渡したくない。

手放しもしない。

絶対に裏切らない。

死ぬまで側にいる。

喻えお前が俺から離れようと俺はお前を想い続けるから。

安心してくれよ。

「愁さん〜？」

気付けば既にマンションのまえ

愁さんは黙り込んで私を持ち上げたままです。

心配です…

愁さんが口を開いた。

「お前俺の事……………」

愁さんの…事…？

「大切な人だと思っています」

大切な大切な大切な人。

失いたくないです。

好きですから。

「……………」

「今日暇ですか？」

「あ…ああ」

「じゃあ私の家でお茶しませんか？」

「じゃあ…お邪魔する」

「はいっ」

\*\*\*\*\*

「ふう……………」

「あれえ静ちゃんどうかしたのお〜？」

「そうね…どうもしてないわね…」

私は小さく溜め息を付きお菓子を口に運んだ。

ほんわかと口に広がる甘い味が私を落ち着かせた。

悩んでいる事がある。

それは”あの子”達の事。

幸せ過ぎるほど別れる時は辛くなるの。  
何かあったら耐えられないと思うのよ……………。  
……………心配だわ。

「心配はまだしなくていいんじゃないか？」

「そっかもね…きよん」

「きよん……………」

「ふふふ…ありがとう」

ニツコリ笑って誤魔化してみた

何も起きなければ良いんだけどね……………。

愁…守りなさいよ。

どんなことがあっても。

再びお菓子を口に運んで一休みをした。

\*\*\*\*\*

「お……………猫か」

「はい。ミントくんです。ほらご挨拶して」

「みゃ」

「いい子だな。お前によく似てるよ」

沙紀の家でお茶をしている二人は楽しげに話をしていたからささ  
話は明日の運動会の事。

晴れるかな〜とか優勝してみたいなあ〜とかの話をしていったんだよ。

僕ミント。

今この状況見ると本当に幸せそうなんだ。  
沙紀も愁とかいう男も笑ってばかり。  
でも…それが良いんだよね！  
明日は楽しみだな。

「みや

」

第十二話 運動会！！！！！！！（前書き）

今回は新キャラ登場です！！

昔の鏡と愁の出会いなども描いています！！

## 第十二話 運動会！！！！！！！

今日は快晴！！

そして運動会です！！

高校に入って初めての運動会なので楽しみです。  
優勝目指したいです

学校には椅子がズラリと並び生徒が座っていた。  
沙紀も席についた時はちまきを渡された。  
沙紀のクラスはA組なので白色のはちまき。  
みんな付けていた。

「沙紀。曲がってる」

「愁さん！」

後ろにいた愁が沙紀のはちまきを直した。  
相変わらずの几帳面だ。

「アスカおはよう」

「鏡さんおはようございます」

「僕もいるよぉ〜」

「夏樹くん」

ヲタクの鏡とキャピキャピキャラの夏樹は元気だった。

「はい集合〜」

担任の内田先生の大きな声で私たち1 Aは校庭の中心部に集まりました。

この学校は総勢500人ぐらいなのでたくさんいました…  
(つまりだな500分の1の1が沙紀なのだ)  
そういえば結構この学校良い人たちですねえ。  
もっと乱暴な方々だと思っていたのですが……。

「ではまず最初に校長先生のお話です」

……高校に入ってもやはり校長先生のお話はあるんですね…

「………皆さん精一杯頑張らしましょう！」

あ…終わりましたね。

最初の競技何でしたっけ……？

今日は午前と午後に分けて運動会をやりま

競技は全て午前5個午後5個の計10個です。

小学生の時とほとんど同じですが競技の種類は時々異なります

クラスで色別に別れますが人数が少ないクラスに変えられる人もいます  
ようです。

愁さんがそうなんです。愁さんは赤組なんです。

はあ……。

淋しいです……。

「最初は徒競走だよ」

「鏡さん」

「沙紀ちゃん何番目？」

「私は…三番目ですよ」

「じゃあ僕の次だね、頑張ろうね」

そう言つて夏樹くんと鏡さんは徒競走の列に並びに行つてしまいました。

私も並ばなきゃです。

「さーちゃん気合い入つてるわね」

「静さん！静さんは何番目ですか?!」

「私？四番目よ？」

「一緒じゃなかったですね…」

やっぱり今日は私運が無いです

悲しいなあ〜ラララ〜

ラララ〜…はっ?!歌い出していました?!

すいませんすいません!

なんだかもう疲れてきましたよ……………。

私は四番目ですから……………もう並んどかなきゃいけないですよねえ?昨日までの練習を出し切らなきゃいけませんよねっ!!

そうです!!頑張ったんですから大丈夫です!!

ファイトです私!!

パアッン!!

耳に大きな銃声が響きました。

始まりましたねっ!

白おおっ!頑張れえ!

速いですね皆さん。私段々と不安になつてきたんですけど…。  
はあ……………。

「次よ!さーちゃん?」

「あ…はいっ!」

「頑張つてね」

「あい!」

そして遂に私の番……。  
周りは男の方……。あれ？あれは鏡さん！！鏡さんも三番目なんです  
ね！！  
良かったです〜！！

目があった私はニッコリと笑いかけた。  
鏡さんは照れながら

「頑張ろうね」と言っていた……。  
昨日からおかしいですねえ鏡さん。ずっとニコニコしてます。  
幸せそうです。

「よ い……………」

わわわわっ？！  
え っと愁さんの言葉を思い出すんです！！

『まずは深呼吸して前を見つめるんだ』

深呼吸…ふう ひい。  
よしOKです！！  
前を見つめる……………。

パアッン！！  
私はその音を聞いた途端走り出した。  
隣にいた鏡さんたちがいないですが…もう前にいつちゃってるん  
です。

自分は自分の走りをしなきゃいけません！

「ゴール…です…」

前を見るとテープが切られてなかった。

あらら…？もしか…？と思いい後ろを見るとまだ男子が残っていたのだ。

私…もしかして一位…？

「何かすげえ！！さーちゃんはええ?!」

「あれは人間じゃなかったよ。うん」

「……………アス力速い」

「あの…手抜きまし…」

「抜いてない!!」

なるほど…。

私速かったんですね。

一位取っちゃいました!

空に向かって話しかけてる沙紀を見て全員が思ったこと。

「……………天然だ」

「何か言いました?」

『言っていないよ』

「ハモってますね。」

なんて乙女な瞳をするんだい沙紀姫……………。

今すぐ抱きしめたいけど愁さんに殴られる…。ああでも可愛い…。  
乙女っっっ!!

「あの……………」

『はいっ』

「結構なハモりありがとうございますなんですけど鏡さんにお話しが…」

『どござつ』

ちくしょう！ 椎羅めえ！ 沙紀姫を！ つつ！

しかし沙紀姫と話してる椎羅の顔は幸せそうだな。ん 俺が思うにな  
椎羅は沙紀姫の事好きなんだと思うんだよね。いや多分だけどな。  
でも愁さんがいるしなあ……。

俺”里内由也”。

俺の好きな事は人間観察なんだけどさ！ 最近は沙紀姫が現れてみん  
な変わった気がする。

まあ…女子が来たからだとも言えるかな。でも彼女は男嫌이었다。  
”だった”の部分大事ね。

今はこうして俺らとも仲良くしてるだろ？

実はさ椎羅も前はこうだったんだわ。

俺らは中学の時から仲だから良く知ってる。  
アイツは一度も笑った事が無かったんだよな。

\*\*\*\*\*

「椎羅鏡です。よろしく」

最初のイメージ”殻に閉じこもるタイプ”だと俺は確信。

一言で済ます人を見たことが無かったからな。

いっつも無口で何も興味ありませんのオーラ出してた人だし。

噂を聞くと超お金持ちの家らしい。  
俺は興味本心で話しかけてみた

「椎羅くんおはよう」

「……」

「誰だって顔してるね…同じクラスの里内」

「……」

「何でわかんのかって顔してるね…うん人間観察が得意で」

「……」

「ごめんね変な趣味で」

無言の人の顔を見るのは久々だ

てか人間観察得意だから喋んなくても分かる、それって結構スゴい  
だろ。

「……」

「え？何で話しかけるかって？だって話してみたいからさ」

「……」

「興味を持つななんて言わないでよ」

やっぱり驚いてる。

てかふさぎ込んでるね。

一人ぼっち……か。

「……僕は話す必要のない人とは話さないから」

「なるほどね。じゃあ俺はどうなの？」

「……話してもいい」

何か素直だな…コイツ。

誰からも話しかけられないから自分から話しかけなかった訳ね

しかし…教室のみんなは俺と椎羅が話してんのを驚きびっくりして  
るよ。

別におかしくないのに。

「……………で、何？」

「友達になるうよ」

「……………は？」

「友達！！一緒に遊んだりする大切な仲間に！！」

「……………拒否」

「えええええつ?!」

拒否られた?!

う 意外と傷つくぞ。

ちらりと椎羅を見ると椎羅は軽く嬉しそうに見えた。  
つていうのか…笑ってないけどなこれは。

「いいよ」

「マジで?! イエーイ」

「そんなに喜ばなくても良いんじゃないか」

「……………スイマセン」

「ほら授業、お前は僕に放棄させる気か？」

眼鏡の中から見える椎羅の顔が恐ろしい。

俺は静かに席についた。

なんか心がスツキリしている。

最後アイツが見せた嬉しそうな顔から分かる事。  
それは

”ありがとう” だったからである

人間観察も良いことあるじゃん

まあ…それから二年間俺らは仲良しだった。

そんなある日転校生がやってきた。

成績優秀、容姿端麗、と噂されていた奴がきた。  
いつもの通りに人間観察をしようとした時だった。

そいつの顔を見た時世界が凍りつくかと思った。

「猪垣愁、関係ない奴と話す気はない」

自己紹介になつてねえ！

しかもそいつの目ときたら前の椎羅だよ。  
誰も寄せ付けないオーラを出していた。  
第一印象”絶対に喧嘩に強い”だった。

これは……………スゴいぞ。

俺は初めて見たそいつの顔に少々憧れを抱いた。

かけ

「おい、お前邪魔」

「あ？年上に向かつてなに様どころあ」

「ふっ」

「なんだてめえ」

「”俺様”」

三年生に喧嘩売ってるよこの人

周りはシーンとなっていていつの間にか二人舞台になっていた。

こええええええ？！

「野郎っ！！！」

三年生が先に手を出してきた。

猪垣は避けもしない？！逃げるよバカ！！  
その時だった。

隣にいた椎羅が小さく溜め息をついて立ち上がった。

「お前なにする気…？」

「本借りにいく」

「ばっ……」

俺の止めも聞かずアイツは歩いていった。  
ポコポコにされるよ？！

「なんだおめえ？入ってくんなよ！！！」

「あつちいつてる！」

「……邪魔なんですけど道の」

「あ？！てめえ！」

殴られるつつつ？！

パシッ

廊下にその音が響いた。  
俺は全てを見ていた。

「邪魔なんですけど」

椎羅は…三年生の拳骨を素手で掴んでいた。  
誰もが啞然とした。だってあの無言少年が三年生を止めたんだぜ  
三年生は椎羅の顔を見て逃げていった。

現在…怒り中

「お前…名前は？」

「椎羅鏡」

「鏡か。お前強いな」

「それ程でも」

「ふうん…おもしれえ奴だな」

何か雰囲気が……………？

俺は教室から出て二人を見ていた。

友情…決定?????????

「あの〜」

「何」

「お二方は〜」

「別に」

声八モってるからっ！！

おあい…（泣）

その猪垣と椎羅と俺はそれ以来仲良くなった。

猪垣には昔から友達の灰原っていう奴がいてそいつとも仲良くなっ

た。

いつの間にか俺らは注目の的になっていた。

でも。

椎羅は笑った事は無かったのだ

\*\*\*\*\*

「由也？」

「あ、ああ……。話終わったのか」

「うん……まあ」

「お前さ、昔から笑わなかったのにな」

「人間観察が趣味の人に言われたくないね」

「ははは」

鏡は…変わった。

笑うようになったし、本当に変わった。

きつと。

ずつと。

俺たちは仲間でいよう。

信頼し合える仲間で。

再び銃声の音が鳴り響いた。



### 第十三話 運動会！！！！！！！

「ふあわ〜」

「眠そうねさーちゃん」

「実は昨日鏡さんが言ってたアニメ見たんです」

「あ キャンポリ？」

「はいっ」

キャンポリとはキャンディポリスの略である。

主人公の柊アスカ警部が悪等共をやっつける話である。

そのアニメが好きな鏡は沙紀に日にちを教えたのである。

それは深夜なので沙紀は少し眠そうだ。

「でも…面白かったんですよ」

「そう。良かったわね」

「ふふふ」

何かスゴかったんです！！アスカ警部が悪等共をやっつけるのが  
でも深夜三時って…眠くて眠くて…大変です。

ふあわ…。

「欠伸ばっかしてんじゃねえよ沙紀」

「ふあわ…愁さん〜？」

「お前次昼前の最後なんだから頑張れよ」

「次〜ああああ？！そういえば次障害物競争でした！！！！」

「行ってこい」

「はいっ！愁さん見てて下さいね！」

私障害物競争でるんでしたあ！

さっきので眠くなっていたので忘れてました。

小学生を思い出しますねえ……

さっきは綱早抜け競争だったんで……。

はあ……

「あ、さーちゃん」

「克くんっ」

「さーちゃんも障害物競争だったんだ」

「克くんもですね」

克くんはニツコリと笑い私の隣へと並んだ。

ん……………？

お隣さんたら克君くわゝなんて運命的

「よーい！ー！」

パンツ

「ゆおおおっ?!」

最初の障害物はハードルですね

ひよいつと飛び越えた。

足だけは早いらしいので今は沙紀が一番である。

次は綱。

ま、ま、またですか?!  
網嫌いですつつつ!!!

「網〜〜!!」

「大丈夫?」

「克くん〜(泣)網が髪に引っかかるんです」

「あ……………」

うつうつ……………。

泣けてきますよおおっ!

長い髪切りましようかねえ…………

「はい」

「え?」

「髪これなら絡まないでしょ」

克くんは網を持ち上げてくれました。

ありがとうございますつつつ!!!

克くんのお陰で大嫌いな網から出ることが出来ました!

最後は……………え?

あれはあ…………

”跳び箱”……………?

「飛ばませんつつつ!」

跳び箱だけは練習してないんですよおっ?!

どうしよう…どうしよう……

「沙紀！飛べ！」

「え?!愁さん?!」

「踏切板を思いつきり蹴るんだよ!」

「克くん?!」

『飛べ!!!!!!!!!!!!!!』

私はキツと跳び箱を睨み付けて走り出した。

踏切板を蹴る…蹴る…!

「えいつ!!!!!!!!!!」

ビヨーン!!

「あ…れ？」

う・い・て・ま・す?!

「キャアアア?！」

沙紀は跳び箱を飛んだのはいいものを飛び越え過ぎて地面に直行状態であった。

目を閉じた……………。

ドスッ

鈍い音がして沙紀は閉じた瞳を開いた。  
そこに映っていたのは誰かの腕  
上を見るとそこにいたのは……

「よく頑張ったな……」

「しゅっ…さん？」

「まったく可愛い顔怪我したらどうするんだ」  
「／／／／／／／／」

愁さんにつっ『可愛い顔』って言われましたっ！  
ポオっと頬が赤くなる。

沙紀は愁のことをずっと見つめていた。

「はい そのお二人様先に進めないでしょ」

「あ、わりい」

「克くん」

「じゃあお前も行けよ」

愁さんは私を下ろすと客場まで戻っていった。  
最後は真っ直ぐだから大丈夫ですね\*\*

私は結局一位でゴールすることが出来ました！！

ありがとうございますっ

「え では一時間お昼の時間を取りますので…」

「沙紀、屋上行こう」

「あ、はいっ！」

「僕らも行くよお」

「アスカ」

「てめ……………はあ…なんか鏡君の今日の笑顔は怒りにくい…」

珍しく夏樹くんは私をアスカと呼ぶ鏡さんを怒るのを止めたんです。鏡さんは嬉しそうです。

なんだか私も幸せです！

屋上にて

「遅いわよ」 あ、人数分紅茶いれといて」

「かしこまりました」

「あの…」

「あ、さーちゃんは晴彦見るの初めてか」

「え？晴彦さん？」

私の方を見て一礼をした礼儀正しい男性を見て私も一礼をした

静さんはお金持ちさんなんですなえ…

「ではごゆっくりと」

「ありがとうございます」

「いえ」

その…晴彦さんは多分執事の様な人なんですな。

私が口を開けていると静さんが説明をし始めた。

「あのね、彼は私の執事で名前は乃木晴彦23歳で…って聞いている？」

「へ？あ、すみませんっ」

「何見てたのかし…」

静は沙紀の視線の先を見て

「あらそうね」と言いながら笑った

沙紀はずっと愁を見ていたのだ

「沙紀？どした？」

横顔…キレイ…

髪の毛…サラサラ…

何だか格好いい…

抱きつきたい…

「沙紀…？」

「愁さん…」

「大丈夫か？」

「さっきはありがとうございましたっ」

「あゝああ」

空青いですね……。

それに比べたら愁さんはキレイでキレイです！

あつゝお腹すきました。

お弁当食べましょう！！

「手作り？」

「皆さんの分ありますよ」

そうなんですっ!!!

私今朝は早起きして皆さんの弁当も作ったんですよ!!  
普通ですが…頑張りましたっ!!

「うまそうだな」

「はいっ」

「沙紀ちゃん上手だねえ!!」

「ありがとう!!」

「アスカありがとう」

「鏡さん……」

何だか妙に鏡さんの笑顔にキュンときますね。

メガネ外したら綺麗なんだろうなあ……。  
私が鏡さんで見つめ合っていると愁さんに止められた。

「メガネ外してみてくださいよ」

食事を始めて十分ほど経って落ち着いた私は再び鏡さんに聞いてみた。

私のお弁当は意外と美味しかったらしく大盛況でした。

みんなお茶を飲んで一休み中…

「あ メガネねえ…」

「そっぴゃ〜鏡くん視力いいんじゃないの〜」

「え?!」

綺麗に夏樹以外全員の声が揃った。

鏡は

「……………まあな」と軽く答えてた。

えええっ?!

鏡さんは視力いいんですか?!

それはないですよ……………

悲しくなってきました。

「メガネ外してみてください」

「あ……………」

「お願いしますっ!」

鏡さんは私に

「少しだけなら」と言っつて後ろを回きました。

楽しみです……………

「はい」

「それではありがた……………」

『……………ダレデスカアナタ……………?』

今度は全員が口を揃えて鏡に指を指した。

そうなんです……………。

鏡さんがメガネを外すと美少年になったんです。

……………ダレデスカ?

「き……………鏡さんは何処に……………」

「……」

「おいっ！鏡がいなくなったぞ探せ！！」

「……ここにいる」

「鏡くん！！もう怒らないから出ておいで！」

「……おい」

「きょん〜 本当にないわねえ……」

「……無視？」

鏡さん〜帰ってきて下さいっ！  
カムバックっっっ！！

鏡はメガネをかけた。

すると視線は一斉に鏡のもとへ

「お帰りなさい！！」

「どこいったんだよ……心配かけんな……」

「もう〜」

「怪我してないかしら??」

「もう……いいです」

鏡さんは一人で拗ねていました  
いや実は現実逃避してました。  
本当に格好良かったですよ鏡さん。

ピンポンパンポン

『え、後五分で午後の競技を始めますので……』

校長先生の声が屋上にも鳴り響いた。

私たちは既に片付けをしてあったので校庭に戻ることにしました

「鏡さん。格好良かったです」

「え？」

「笑ってる鏡さん素敵ですよ」

「ありがとうございます」

鏡は嬉しそうに沙紀の頭をそっと撫でた。

それを見た愁が鏡にマジギレしたのはまた次のお話……。

## 第十四話 家族とは（前書き）

遅くなつてすみません。

只今風邪を引き更新が遅れつつありますが、どうか宜しくお願いします。

皆さんも風邪にはお気を付けて

## 第十四話 家族とは

「優勝は… 1 - A!!!」

……優勝しちゃいました……？

何かよく分かりませんがリレー一位取りました！

後は…着せ替えルーレットとかいう競技がありまして私のクラスは私が秋場原のメイドの格好をさせられました。

あれは………

恥ずかしかったです。

ま、まあ喜びましょう！

やった〜!!!

万歳〜!!!

ありがとうございます!!!

「では優勝カップ授与の為水野さん上がって下さい」

「わ…私？」

「沙紀ちゃん行っておいで〜」

夏樹くんに背中をおされ壇上上がった私は校長先生と目が合った。

わあ…何だかすごい…  
皆さんの視線がすごくします…  
わわわ…怖いです…

何あいつ…キヨロキヨロしてんだよ…。

あ…そつか。まだあいつ親父に慣れてないのか。

親父顔だけは怖いしな。

それだけは俺も似てる。

あゝ可愛いゝ

「優勝1 - A殿、あなた方は優秀な結果を治めましたのでこれを賞  
します」

「はい」

「おめでとう！愁の彼女さん」

「え？」

な…何て言いました？！

愁の彼女さん？！な…な…何で知ってるんですかお父様？！え？！  
おかしいですよ！！愁さあああんっ！！

「ふふふ」

頭がクラクラしてきましたよお

おおおおっ？

また倒れそう…。

でも…頑張んなきゃ！！

「有難うございます」

思いつきりの笑顔で頭を下げた  
皆さんの拍手が凄く響いてました！！  
いやあ…嬉しいです。

放課後私たちは鏡さんの家に向かいました。  
部屋に入るやいなや鏡さんのお姉様に抱きつかれたのは言うまでも  
ありませんでした…。

あうう苦しいんです！  
胸が…おつき…むぐ…

「姉ちゃんアスカ苦しそうだから離して」  
「あら、鏡あなた…」

あ、解放されました。  
相変わらずお胸が大きいです…  
でも綺麗です。  
ふう…

「アスカ、おいで」  
「はい。あ、そうでした！鏡さん好きな人って誰なんですか？」  
「突然だね…」  
「す、すみません…」  
「いや、いいんだけどね。好きな人はいるよ」

それは知ってますよ？と私は笑って言った。  
鏡さんの好きな人ってもしかしてお姉さん？  
それはうーんと…近親相姦…じゃなくて…美しき姉弟愛でしょうか？

って私何言ってるのでしょうか？！

いつの間にか頬が赤くなっている事に気付く沙紀であった。

「沙紀、お茶」

「あ、ありがとうございます」

「ねえさーちゃんは愁の事どの位好きなの？」

「ブツ?!」

私はお茶を吹き出してしまい静さんの顔に思いつきりかかってしまった。

静さんは鏡さんの布団の毛布で顔を拭いていた。

「すみませんっ!」

「いいのよ」

「それは俺も聞きたいんだけど沙紀」

「愁さんまで」…」

愁さんの目が怖いっ!

”言え”と言ってます!!!

ひい?!

だって…愁さんがいなくては胸が苦しくなるほど好きなんです…何  
て言えないですよ(泣)

「沙紀?」

「さーちゃん?」

「沙紀ちゃん?」

「アスカ?」

みみみみ、皆さん?!

顔が怖いですよm)。(・)m  
言わなくちゃだめでしょうか?

「あの…私は…」

視線が私に集まる。

「愁さんの事が…」

私も唾を飲み込んだ。

「す…」

一呼吸置いて言おうと…

バタンっ

バタバタバタバタッ

ガラッ

すごい音がして鏡さんの部屋のドアが開く。  
そこに立つのは同じ年ぐらいの女の子…？

「鏡さま！お…お父様が…」

その”鏡さま”と呼んだメイドの女の子さんは息を切らしながら鏡  
さんの腕を引っ張った。

どうか…したんでしょうか？

「茶衣どうかした？」

「どうも…どうも…お父様がお帰りに…！」

「父が?!」

鏡さんもびっくりした顔で部屋を出て行った。  
????

何かあったのでしょうか…?

心配ですね〜。

「とうとうか…」

「へ?」

「そうだね〜…」

「あの…」

「大丈夫かしら…」

皆さん鏡さんの事異様に詳しいですね……………

私は小さくため息を付きトイレに向かいました。

……………はぁ……………

第十五話 鏡とメイドの恋模様（前書き）

お久しぶりです。

やっと受験が終わり書きました

今回で鏡シリーズ終了です。

一体鏡の好きな方とは？

## 第十五話 鏡とメイドの恋模様

話し声が聞こえます…

私はトイレからでてその声ができる部屋の前に立っていた。  
なにやら家族のお話をやってるようです。

ほんとに盗み聞きはいけないのですが…

どうしてもさっきの皆さんの言葉が気になってしょうがないのです…。

「あら、あなたは…」

「ぎくり」

「初めまして、私柊茶衣。同い年…だよね」

「はいっ！私水野沙紀といます！」

わあ〜近くで見ると物凄く可愛いですっっ！

なんといいですか…まさに美少女ここにありっ！という感じ…

「あ、あのっ鏡さんのお父様が帰って…？」

「そうなのよ…あ沙紀もタメ口でいいよ」

「はいっ」

「この家少し複雑だね、奥様がお亡くなりになってから御主人は鏡さまに結婚をされたがるの」

「けっこん?!」

「シーっ！沙紀声大きい！だから多分今回は…フランスの女の子かな〜」

フランスの女の子と結婚するんですか？！

鏡さんすごいです！

でも…何だか嫌です…

もし結婚したら学校には通えないんですよね…

それは…

「嫌です……………」

「沙紀？嫌なの？もしかして鏡さまの事…」

「違いますっ！

ただ…学校に来なくなるのは嫌なので…」

茶衣さんは私の顔をまじまじと見て笑った。

か…かわいいっ！

かわいいですっ！

でも次の瞬間私は茶衣さんを少し恨むことに…。

「じゃあ止めといで」

「はい？」

トンツと背中を押されて私はその秘密の部屋へ。

な、何するんですかあっ

「アス…」

「鏡さん…すみません」

「キミは？」

この方が鏡さんの…お父様？！

……し、渋い……  
私は硬直してしまう。  
だって……怖いんだもん。

……  
「同じ高校の同級生の子で水野沙紀さん」

鏡さんが助け舟を出してくれた  
私はふうつと息を漏らし安堵の笑顔を見せた。

つ……鏡さん?!

何で眼鏡外してるんですか?!  
しかもカツコイイ版の鏡さんですよね?!

と口をパクパクさせて指を指してしまった。

「沙紀、行って」

「あう……」

鏡さんに”沙紀”と呼ばれ私は顔を赤くした。  
慣れない言い方をされると照れるのが沙紀だ。  
……。

「沙

「君が水野沙紀か」

しかし鏡の沙紀への言葉は彼によって遮られた。  
そう鏡父である。

「?」

「私は椎羅和也、鏡の父だよ。宜しくね」

「あ…ハイ…」

「ところで君はうちの鏡をどの位好きかい」  
「はい?!」

どの位好きか?!

そんなの分かりませんよ!!

だって…私…愁さんが好きだから…

でもどのくらいといわれると…

うーん…

「友達としては大好きです」

鏡と鏡父の顔が軽く曇る。

あ、あれ…?私何かマズい事を言っちゃいましたか?

……… 本当に友達としては大好きなんですよ?鏡さんは。

「水野さん、君、鏡と結婚しないか?」

「はい?」

「ちよ…親父!あ…」

まずった…という顔をした。

珍しく鏡が鏡父を親父と呼んだ

の前に!結婚て何ですか?

私まだ高校一年生ですよ!

冗談ですよね。

「ダメかな水野さん」

「……すみません」

「そうか」

ガラッ  
バタンッ

すごい音がして茶衣さんが倒れ込んだ。何が起きたんですか?!

あ、泣きそうになってる。

ああ…なる程。

「茶衣?!どしたんだ?」

「鏡様…私は…私は…」

鏡様が大好きです!!!」

「え?」

茶衣さんは顔が真っ赤。

鏡さんも顔が真っ赤。

お似合いです。

鏡は何がなんだか分からないけどだんだんと理解したみたいで頭を掻きだした。

椅子に座る鏡父はにっこり笑って私の方へ歩いてきた。

鏡父は私の耳に軽く呟いた。

「アノ子たちを見守らなきゃね。クスッ」

あなた、分かってて?

よくやりますね…。。

私は鏡父と一緒に部屋を出た。あの二人はきっと幸せになりそうです。良かったです。

愁さんたちがいる部屋に戻るとあまりに遅いと断定した三人は爆睡しており、フフと笑ってしまった。

夏樹くんは小さな男の子みたいで可愛くて静さんは美少女で、愁さんは…

「か…カッコイいです…」

はい、カッコ良かったです

私は小さく笑った。

みんな男の子なんですネ。

素敵な人たちです。

「愁さん、大好きです」

でも

こんな幸せが一瞬で崩れ落ちるなんて考えも付きませんでした

次の日…

「朝です！！遅刻！！」

「あ、沙紀。おはよ」

「おはよございませすッ」

やっぱり待ってましたね？！

遅刻してすみません!!

愁さんにはっこり笑って私の頭を優しく撫でてくれた。

愁さん？

「何かありました？」

「ああ…特にねえけど…な」

「そうです…じゃないですよ！遅刻！遅刻ですよ愁さん！」

私は愁さんの手を引っ張って思いっきり走り出した。

運動会練習で鍛えた足！

早いですよ！私！

「ちよ…待てつて…」

「いいえツツ！急ぎます！」

ダアアアツと走り学校へと入った私と愁さんは汗をかいた。

私は普通の汗、愁さんは冷や汗でした。

あ、すみません！

「はい、連行な」

「え？ちよちよつと愁さあああん！」

力無く愁さんに担がれて結局連行されてしまいました。

はあ…。。

教室に入ると、夏樹くと鏡さんがこっちを見て手を振って笑ってきた。  
鏡さんは携帯を見て嬉しそうに笑っている。ん？

愁さんに降ろされて鏡さんに近付く。携帯をサツと取り上げた。

「んあー!」

「鏡さん…おめでとつです」

「あ……。うん…」

鏡さんの携帯にはしっかりと茶衣さんのメルアドと電話番号がありました。  
ふふふ。

「沙紀ちゃん聞いて　鏡くんね今日茶衣ちゃんとおデートなんだ  
つて」

「おデート?!」

随分早いおデート……。

羨ましい…です。

チラリと愁さんを見る。

また寝てる。

もう…でも…寝顔可愛いからいいです。今度しましょうね。

ガラッ

「はい。静かに。今日は転校生が来てるわよ　しかも女の子で  
すー!」

「マジで!」

「沙紀姫以外に来たあ!」

沙紀姫…?

私姫って柄じゃないです。

「入って」

一瞬、場が静まった。  
教室に入ってきたのは長い黒髪にスラツとした体、整った小顔。  
みんな惹きつかれていた。

「時枝 真子です。どうぞよろしく」

綺麗な声。

すると起きた隣の愁さんがびっくりした顔で時枝さんを見ていた。

「なんで…?」

そう呟いた。

なんで?

「なんで真子がいるんだ…?」

真子?知り合い?!

私はガクガクと口を震わせていた。だって…愁さん美少女とお知り  
合いですか?!

愁さんと目があつた時枝さんはこちらもびっくりした顔で

「愁?」

と言っていた。

お知り合い決定ですね。

私どうなるんですか!!!

第十五話 鏡とメイドの恋模様（後書き）

長い黒髪に憧れる桜木です

（一）（二）

第十六話 恋の天敵は結構イイ奴？（前書き）

嫌な人を出すのが苦手な私です

実は転校生時枝真子は愁くんの……？

時枝真子は結構イイ奴です。

さっぱりあっさり？

## 第十六話 恋の天敵は結構イイ奴？

「どうして真子がいるんだ？」

「愁？」

出会は運命的  
私にとっては最悪

…  
…

キンコーンカーンコーン

「はい、ホームルーム終わり」

先生の声がして意識が飛んでた事を知る主人公沙紀。  
共に意識を飛ばしかけていたその彼氏愁は転校生時枝真子と知り合  
いで…

「愁、あなたこの学校に良く来てるわね。あなたの父親の学校でし  
よ？」

「お前こそ…」

「あら、心配ありがとう。クスクス」

「なんだよ」

.....ジ.....。

なんでしようこの胸のズキズキは。痛いようで微妙な...？  
愁さんが私以外の女の子と話しているのは珍しいからかな。  
でもなあ...。

「真子ちゃん、現る...ねえ」

「夏樹くん...」

「あれ、幼なじみ」

「.....鏡さん」

幼なじみの再開...。

とてつもなく嫌な予感がむんむんしているのですが？！

おお... (泣)

『で、元カノ』

夏樹くと鏡さんの声が綺麗にハモる。んな事関係ない。

沙紀は元カノの部分にガガーンときていたのである。

見た目自体負けている。

らしい。

沙紀は小さな体に小動物みたいな女の子で肩ぐらいまである髪は先  
つちよが軽くはねている。時々結んでる。

真子は長い黒髪にスラツとした体に長身だから愁と並ぶと美男美女

(笑)

「笑い事じゃないです」

確かに美男美女ですが、私は…私は…愁さんが大好きです！  
と、叫びましたが無理です。  
仲良さげですね…

「沙紀ちゃん、ヤキモチ？」

「焼き餅？好きですよ」

「バカ」

「へ？」

「ヤキモチっていうのは好きな人が誰かと話しててそれが嫌だなあ  
つとか思ったりする事で」

……ヤキモチ？

私ヤキモチなんですか？

確かに嫌だなあつとか思いますが…それはそうなのかなあ…？

「ねえ愁。ヨリ戻さない？」

「は？」

「私さ、やっぱり愁が…」

「自己中過ぎねえか真子。俺お前に『好きな奴出来たから別れて』  
つて言われて…正直泣きそうになった。

でも、お前は俺とヨリ戻してえ？それは自分から別れを告げたお前  
が言う台詞じゃねえよ。だから俺は無理だ」

愁さん (泣)

カッコイいです (泣)

それに真子さんは負けじと言い返す。

「だってあいつ…大樹は私以外の人と付き合って…」

「だからなんだよ」

「だったら私だつてって…」

「バ」

愁さんが言いかけた時私は体が自然に動いていた。

何でだろう？

滅多にキレない私がキレた。

すみません。

「バカ！！！！！」

『へ？』

愁さん、夏樹くん、鏡さん、静さん、その他クラスメートはびっくりしている。

一番びっくりしているのは時枝さん。

「あなたはバカです！！彼氏がいるのに他の奴と付き合うバカいますか！！」

「だって…大樹が…」

「その人バカです！！あなたはその人がしてる同じ事して何か良いことはあるんですか?!」

「……………」

「だったらビンタして『このバカ男！』と叫んで下さい！」

は は は ……

と、とにかくですね？

「プッ」

「へ？」

「あはは…あはははっ。」

「何がおかしいんですか？」

急に笑い出した時枝さんを見た。

本当に爆笑してる。

私ウケを狙った訳じゃないですよ？！

愁さんも笑ってる。

「あはは…は面白い子。うん、分かった。彼氏ビンタするよ。ありがとう」

「面白い子?!」

「うん。面白い。じゃあさ友達なる。私時枝真子。真子でいいから。」

「あ、水野沙紀です」

いつの間にか険悪なムードからいい感じなムードになっていました。真子ちゃんの手を握ってにっこり笑って抱きついてきた。

抱きつきにびっくりした私はうひゃあ?!と変な声が出てまた笑われた。

う (泣)

「え?じゃあさ沙紀は愁の彼女なの?知らなかった!」

「当たり前だろ」

「はい!」

「愁ってさ女嫌いで有名だったし私以外の女と話さなかったからなあ」

「そうそう」

「あつれ?きよんとなつじゃん。二人もこの学校なんだ」

きよんとなつ?

ああ鏡さんと夏樹くん。  
お二人も幼なじみでしたか。

「てかさ…二人シタ？」  
『ブツ！！！！』

思いつきり吹き出した私と愁さん。顔が真っ赤である。  
その反応にも真子ちゃんは爆笑

「あっははは！分かりやす！まあ愁の事だし頑張って」

「何を頑張るんですか？」

「そういう事沙紀に教えるなバカ！！！！アホ！！！！」

「バカアホ言うなバカ！」

こどもの喧嘩。

私は何を頑張るのかを一生懸命考えていました。  
???

「まだ悩んでるし！！！！」

「沙紀！忘れろ！」

うん。

愁さん？頑張る？

うん。

「どうせマウスとウマウスもまだでしょうね。あはは」  
「うるせ」

「あんた私の時だって一度もしたことなかったね」

真子ちゃんは苦笑い。

私はまだ悩みちゆう。  
でも、もういいや。

「次、音楽ですな」  
『切り替え早ッ』

と突っ込まれた。  
え？早かったですか？  
でももう移動時間ですよ？

私は鞆から教科書を出して皆さんに呼びかけて音楽室に向かいました。

今日は、幸せが一瞬で崩れ落ちなかったから良かったわね（笑）  
…え？もう一人転校生が来る？

さーちゃん、頑張つて。  
しかし…女装辞めようかしら  
静も頑張ろ！！

第十六話 恋の天敵は結構イイ奴？（後書き）

次は夏樹少年の恋バナです。

**第十七話 夏樹少年の恋愛白書（前書き）**

今回は夏樹少年です。

鬼畜キャラの夏樹少年は時枝真子の事を……………？

夏樹シリーズは一個だけです

## 第十七話 夏樹少年の恋愛白書

夏樹side

………久しぶりに会った彼女は短かった髪の毛を伸ばして綺麗になつていた。  
幼稚園の時から幼なじみで中学生の時、フランスに引っ越しちゃったから伝えられなかった

僕は…時枝真子が好きだった。

いつからだろう。ずっと目で追いつけていた自分がある事に気付いたのは。  
でも言えなかった。

愁と付き合っていたからだ。  
真子の方から言ったらしい。

真子と愁は付き合い始めた。元から有名だった二人は美男美女だった。

僕は諦めた。

だけど笑っていた。  
泣かない。泣かないよ。

「夏樹くん？」

沙紀ちゃんと呼ばれて安心してた事に気が付いた。

既にホームルームは終わり次の授業が始まるみたいだった。教室には僕と沙紀ちゃん愁しかいなかった。僕がぼーっとしていたから心配で残っててくれたみたいだ。

「ごめんね さ、行く行く」

無理に笑ったから変だった。

まだ好きなんだ。

愁と真子は別れたけどまた真子は違う人と付き合い始めていた事は愁から聞いた。

「なあ、夏樹」

愁に話しかけられた。僕はにっこり笑った。

「何？どしたのお？」

「それ、止めていいよ夏樹」

愁が真面目な顔で言った。

あっそ。

「何？」

「おお…戻った」

「さっさと言えよ」

「お前、真子好きだろ」

「ブツ?!」

思いっきり吹き出した。だって真子好きだろって堂々と言われて心臓びっくりだよ！

てか…気付いてた訳ね。

「……………ああ」

「だろうな。分かりやすい」

「なんで分かった？」

「親友だからな」

親友、そうなんだ。

あはは…分かりやすいか…

「僕はさ…愁が真子と付き合い始めた時、お似合いだと思ったから諦めた。」

ただそれだけだよ」

「夏樹くん、笑って下さい」

「さ、沙紀ちゃん」

沙紀ちゃんが振り返った。

笑顔で僕の頭を撫でた。

「泣きたい時は泣いて良いんですよ？泣いて」

「……………」

「夏樹くんの笑顔が好きです」

や、ヤバい！

キュンときたよ?!

夏樹くんの笑顔が好き…

ありがとう、沙紀ちゃん。

「僕も沙紀ちゃんが好き」

「す…／／／／」

「おい夏樹！沙紀は俺のだ！」

一生懸命に批判する愁が面白くて爆笑してしまった。  
沙紀ちゃんは真っ赤になって  
「す、好きだなんて…」と言って愁の背中に隠れた。  
可愛い。

「さ、行こう」

「夏樹！！渡さねー！！」

「はいはい」

僕は叫んでいる愁と真っ赤に照れてる沙紀ちゃんに笑いかけた  
ま、頑張ってみるかな。

なんて俺はいい友達…いや、親友を持って良かったな。  
ありがとう、二人とも。

### 音楽室

ザワザワザワザワ

「遅かったねなつと沙紀と愁」

「ああ、わりい話してた」

「え?! なつ? 声色違うよ?」

「これが普通なの」

びっくりしてる。

まあ…当たり前だけど。

すると真子は携帯を取り出して見せてきた。何？

「振ったんだよ 彼氏」

「え？」

「やっぱりアイツは私には合ってなかったしなあ」

「じゃあさ、俺にしないか」

これが俺の本当の気持ち。

真子が好きだ。

俺は真っ赤な顔をしながら真子にそう言った。恥ずかしくて。

「ねえなっ」

真子に呼ばれて顔を上げた。

真子は…俺より真っ赤だった。  
え？

「私…浮気するかもよ？」

「い、いい！そしたらもつと俺の事好きになってもらっ…」

「なら、宜しくお願いします」

「！…！」

本当？夢じゃない？

俺は…（いつの間にか俺になってる夏樹少年）嬉しい！  
感極まって泣いていた。

音楽室のど真ん中で。

「ちよ…夏樹！」

夏樹って呼ばれたよ（嬉）

俺幸せです！

ああ神様、感謝致しまする！

（感極まって武士語になってる夏樹少年）であった。

「良かったですね。夏樹くん」

「ああ」

なんて思う沙紀たちだった。

幸せっていいですね。

微笑む彼女たちの歯車は…

『彼』によって狂わされる。

車の中で沙紀の写真を握りニヤリと笑う少年によって。

第十七話 夏樹少年の恋愛白書（後書き）

次は大事件が起こります。

ヒントを言えば沙紀と愁の歯車を狂わす人物が現れます。

これは少しシリーズです。

続きます。

第十八話 運命の齒車（前書き）

三時のおやつは文明堂（笑）

今回新キャラ登場です！

かなりの俺様？かな。

## 第十八話 運命の歯車

沙紀たちの歯車は『彼』によって狂わされる

「 『水野沙紀』

キミは僕のものだ」

長い車の中で足を組み小さな写真を片手に持つ少年。

何故沙紀の事を……？

「広尾、入学手続きは？」

「済んでおります。光一様」

広尾と呼ばれた30歳ぐらいの男はきつちりと背広を着こなしていた。

光一様と呼ばれた16歳の少年は見た目からしてお坊ちゃま。

彼らは車から降り、新しい制服を着て今、橘学院高等学校に向かった。  
そう。

沙紀たちの学校に。

…

「沙紀、弁当食お」

「あ、そうですね」

「俺も」

「じゃあ私も」

「俺も食べる」

「じゃあ屋上に決まりね」

いつものメンバーでお弁当です

と言っても真子さんが増えましたけど楽しみですね。

屋上って好きです。

風が気持ちよくて。

「沙紀、おいで」

愁さんに呼ばれて私は笑顔で振り返り飛び込んでいった。  
静さんが

「ラブラブねえ」と笑いながら言っていた。

はひッ?!

ラブラブ?!

すぐに真っ赤になってしまう。

みんなに笑われていた。

楽しい…

…

コンコン

「失礼します」

先ほどの彼らは校長室に。  
校長、愁の義父だ。

「校長、転校生の菜川光一様でいらっしやいます」

「キミがああの菜川財閥の」

「はい。今回は手に入れた人がいましてね。是非とも」

ニツコリと微笑む少年は高校生には見えぬ一人の紳士である。

彼の名前は 菜川 光一。

菜川財閥の次男。

兄が一人と妹が一人いる。

「これから頑張ってください」

「はい」

光一が立ち上がりドアに手を伸ばした。その時校長が言った。

「彼女たちには手を出さないで欲しいですね菜川くん」

と。

ピクリと反応した光一はフツと笑い校長室を出て行った。  
執事の広尾に光一は指示した。

「帰る前に水野沙紀について調べておけ広尾」  
「かしこまりました」

彼のクラスはA組。

沙紀のクラス。

一体何を企んでいる……？

キンコーンカーンコーン

タイミング良く鐘が鳴った。

今日はこれで終わりだ。

光一と広尾は帰っていった。

…

「じゃあね　沙紀ちゃんと愁」

「さようなら〜」

今日は夏樹さんと真子さん、鏡さんと茶衣ちゃんがデートだそうです。  
羨ましいです…

「沙紀、帰ろう」

「はいっ」

手を繋ぎ歩こうとした時、後ろから声をかけられた。  
え？

「水野沙紀？」

ふ、フルネームですか？

確かに水野沙紀ですが…？

どなたでしょうか。

???

「初めまして。僕は菜川光一」

「菜川…光一？」

「愁さん知ってるんですか」

「……………お前何しにきた」

知り合い…なんですね。

「やあ愁。久しぶりだね」

「馴れ馴れしいんだよ」

「愁さん？」

愁さんが人を嫌ってるなんて見たことなかった。  
彼は一体？

「彼女貸してくれない？」

「貸すだと？」

「へ?!」

貸す?!

私をですか?!

断るに決まっています!!

「断る。行くぞ沙紀」

「は、はい」

愁さんは私の手をギュッと握りしめて歩いていった。  
私も。

「沙紀、キミはきっと僕の所に来るはずだよ。必ずね」

菜川くんの言葉が何を企んでいるのか分からなかった。

でも、私は愁さんを離れません。

大好きだから。

家の前に行くと愁さんが振り返って私の腕を引っ張った。

ポフッと愁さんの腕の中にいる私は愁さんの顔が気になった。

……………愁さん?

「じゃあ、明日な」

「あ、はい」

愁さんは気付いてたんだ。

私たちに起こる大事件の事に。

「畜生……」

なんであいつが……

沙紀に…何の用だ…

俺は気付いた。奴の企みを。

………守る。

離さない。必ず。

だから………。

第十八話 運命の齒車（後書き）

「愁って人脈広いですよね。」

第十九話 one round (前書き)

とにかく毎日更新できるように頑張っております。

春休みだから暇なもので(笑)

あと明日から決まった時間に投稿しますのでご覧下さい。

時間：夜の八時です。

遅れたらすみません。

第十九話 one round

「沙紀、キミはきっと僕の所に来るはずだ。必ずね」

彼は、誰なんだろう。

どうして私の名前を……………？

それに愁さんとは……………。

ガチャンッ

「わわわッ?!」

「ミィ」

そんな事を考えていたら持っていたお皿を割ってしまった。  
下にいたミント君がびっくりしていた様に見えた。

「ごめんなさいです」

割れた皿を拾おうとした。

「ッ」

人差し指からぷつりと血が出ていた。バカだなあ…私。  
何動揺してるんだろう。

…父が関わってるかも、なんて。

血が止まらないから口に入れた  
後で絆創膏貼りましょう。

「ミュ」

「ミント君、おいで」

ミント君は心配そうに私の腕の中に飛び込んできた。

そうですよ。

大丈夫。

「夕飯、つくりますね」

頭の中から消えない靄を考えないように私は夕飯を作り出した。  
き  
つと………

…

「沙紀」

「光一様。水野様には」

「ああ…連絡するんだったな」

光一はメガネを取り電話を掛けた。その相手は水野陽一。  
沙紀の父である。

彼は昔一度リストラされ沙紀に暴力を振り回していた。  
しかし今は一人で企業を建て、大企業の一つとなった。

つまり、沙紀は社長令嬢なのだ。

トゥルルルル

『水野だが』

「菜川です水野様」

『ああ…君か』

「今日会いましたよお嬢様に」

『……そうか』

「彼女なら僕にも相應しい。

勿論お受けしますよ」

『 沙紀は』

「彼女なら元気ですよ。

もつてのほか僕が壊しますが」

『 なッ…』

プープ プープ

光一はニヤリと笑った。

僕が壊しますよ。

彼女も、あの害虫も。

「ま、頑張つて下さいね」

…

「……………菜川光一」

あいつとは中学の時一緒だった  
親父とあいつの父親は友人。  
俺はその頃暴れてたからな。

確かあいつは俺を恨んでたな。  
成績は俺が主席、あいつが次席。  
運動でも何でも。  
俺が優位に立っていた。

「絶対に俺が守るからな……」

沙紀に手を出すなよ？

沙紀だけには…

## 次の日

「おはよ 沙紀姫」

「おはよございませす」

はあ…。

なんでしょう…疲れが。  
ドハッと来ました。

「沙紀、指どした」

「あ…愁さん…」  
「切ったのか？」

愁さんが心配そうに顔を覗き込んできた。 ……はい。

「たく…寝ぼけて」

「愁さん…あの…」

「ん？」

「……い、いえ」

愁さんには心配させちゃダメ。  
だって…私を守るでしょう？  
私は…大丈夫です！

「行きましょう！」

「…ああ？」

笑顔笑顔！

頑張ってみよう！

「あ、愁と沙紀ちゃん！」

「おはよ」

「夏樹くん、真子さん」

「はよ」

「鏡さんおはようございます」

にっこり。

「今日転校生来るって」

「へえ」

「静、ちよつと来い」

「え？愁？」

愁さん？

愁さんと静さんは教室を出て行った。何の話なのかな…

あ、もうすぐ始まつちゃう。

「私呼んできますね？」

「あ、沙紀ちゃん…」

「沙紀さ、笑えてないよね」

「…アス力何かあつたのかな」

あ、いた。

何を話してるんだろう。

「…から愁は、どうなのよ」

「分かんねえ」

「分かんねえって…」

「アイツに何かありそうで」

アイツ？私？

「……菜川光一かあ……」

静さん？！なんで…

あ、いところだから…か。

「気をつけなさい愁」

「ああ」

「時には離す事も考えて」

離す事……………？

私を……………？なんで？

愁さん……………？

「さ、戻るわよ」

静さんがこっちを見た。

びっくりしてる。

当たり前ですね。あはは。

あはは……………

「さーちゃん?!」

「沙紀?!」

「呼びに…来たんです…」

「じめんなわい」

「沙」

なんで私泣いてんでしよう。

離すなんて…ないですよね。

嘘ですよね。

タッタタッタ

「おかえり沙紀…?」

「泣いてる…?」

「な、泣いてませんよ!」

ただ欠伸したんですよ」

私は嘘をついた。  
すぐバレるのに。

欠伸でこんなに泣きませんよ。

ガラッ

「またまた転校生よ」

「マジ？男かな」

「女がいいな」

みんなが騒いでいる時教室の扉が開き彼が出てきた。  
そう、菜川光一が。

「なんだ男かよ……」

「結構イケメンじゃない」

「真子?!」

菜川光一がニヤリと笑った。  
私を見て。

「菜川光一です。宜しく」

「なんと彼はあの菜川財閥のご息子らしいです!」

「マジで?!」

……………菜川光一。

菜川財閥のご息子。

私の父の……………契約会社。

多分……………（曖昧）

「席は…じゃあ窓側で」  
「ええ」

菜川くんは席に座った。

視線を感じる。

見てますね…絶対。

私、何ヶ月持ちますかね…

第十九話 one round (後書き)

まだまだ続きますヨ？

沙紀VS光一

第二十話 俺の女に手え出すな（前書き）

題名は気にせずに。

最近変な小説になりつつ…

あはは…

## 第二十話 俺の女に手え出すな

now 1ヶ月が経った。  
今はまだ何も手を出さない。  
奴の狙いは……？

「愁、愁ったら」

「あ、わりい……」

ついぼうつとしていた。  
最近沙紀が俺を避けてる。  
なんでだかは分かっていた。  
……この間からだ。

静との話を聞いていた。

あいつのバカ。

静が言った事には賛成できない  
俺は離れない。  
例えこの学園が壊れようと。

あいつの狙いは俺と……沙紀。  
破滅にでもする気だな。

しかし沙紀があの水野企業の社長令嬢なんて静が言うまで気づかな

かったよ。

俺の親父の親友だし。

まさに運命だな。

……はあ……堪えるなあ……

沙紀を抱きしめたい……

「ねえ愁、考えた？」

「賛成できない」

「言つと思つたわよ」

静は両手を広げて上に乗せた。  
はあと溜め息をつかれた。

「あんた学園守りたくないの」

「……沙紀と離れるよりマシ」

「私もよ。菜川に何かされる前に学園もさーちゃんも守る」

「同感」

それには同感だ。

あいつが何かやらかす前に済まさないきゃこの学園もろとも終わりだ。

そうはさせねえ。

「まずは……仲直りだな」

「行ってらっしゃい」

沙紀に説明しよう。

と、俺が沙紀に言おうと近付いた時スツと手が伸びてきた。  
誰だ？

「ねえ猪垣くん」

「てめえは話しかけんな」

「ふふ」

「なんだよ」

目の前にいる菜川は笑いだした  
イラつく。ウザイ。

「邪魔だ」

「one roundだよ。愁」

「なッ」

「僕は彼女のフィアンセさ」

「は？」

なんだコイツ。頭いかれてる。  
何言ってるんだ？

「分からないようだね」

「当たり前だろ」

「彼女の父親は僕の父の会社の契約会社なんだよ」

「!!!!」

だからあいつ俺に迷惑かけまいと離れてんのかよ…  
バカな奴。

「だから彼女の父の会社を潰す事だってできる。それは拒むだろう  
？だから彼女の父は彼女を僕に。」

「さあ分かったかな」

「それがなんだよ」

「彼女も君も潰してあげる」

またあいつは気味の悪い笑顔を俺に向け教室を出て行った。  
うぜー。何がフィアンセだよ。  
ま、沙紀と仲直りを…

「沙紀」

「…」

「大丈夫だよ。俺は潰されません。バカだなお前」

「だっ…離…言っ…」

「え？」

「だって離れるって言った…」

ぶ…。

なんだよその顔。

ずっと泣いてたのか？

つい俺は笑ってしまった。

「何…笑ってんですかあ」

「ごめんな沙紀」

俺は泣きじゃくる沙紀を優しく抱きしめてあげた。

肩が震えてる。

可愛い（キャラ変）

とりあえずはクリアかな。

仲直り大作戦。

……………フィアンセか。

「なあ沙紀」

「は、はいッ」

「菜川光一に気をつける」

「……………勿論です。  
潰されませんよ私も」

そう沙紀は言った。

そうだな。

潰されない。俺たちは。

負けない。俺たちは。

なあ、そうだろうか？

ガッシャンッ

「わ?!」

「なんだよ?!」

せつかく幸せに浸ってたのに邪魔をする奴だれだよ!

後ろを振り返るとそこには怖い顔をした夏樹と鏡と真子。

……………怖っ

「おい愁。何で黙ってたんだよ」

と夏樹。

「バカ愁!」

と真子。

「心配…するだろ?」

と鏡だった。

ごめん。沙紀泣かせた。

……言うか。

「あのさ、実はな」

「言ったわよ。もう」

「静【静さん?!】」「?!」

びっくりして叫んだ。

静早え……。言うの早え……。

「よし！菜川光一、撲滅！」

「沙紀、怖いよ……」

沙紀の顔が怖かった。

かなりダークだった。

………まあ、頑張る。

俺たちは作戦会議を放課後鏡の家でする事になった。

第二十話 俺の女に手え出すな（後書き）

作戦会議とかになると必ずしも鏡の家になるんですよね（笑）

第二十一話 菜川光一撲滅会議 1（前書き）

わ  
！

なんか恋多いです！

という雑談でした。

第二十一話 菜川光一撲滅会議 1

放課後

「また俺んち………?」

鏡さんは溜め息をついていた。

そんな鏡さんに夏樹くんはにっこり笑って低い声で言った。

「良いよね?」

「うぎゃああああ!!!!」

顔は皆さんの想像にお任せします。一応かなり怖いですが、失神した鏡さんを抱き上げ夏樹くんは可愛い笑顔で笑った。

「さあ、行こう」

多分ここにいる他四名。

同じ事を考えただろう。

【彼には逆らえない】と。

「どうかした?」

『全然』

綺麗にハモった。

そう答えるしかないらしい。

「じゃあ鏡くん家行こ」

「…お」

遅れましたが沙紀です。

今回は菜川光一撲滅大作戦という事で鏡さんの家で会議をする訳です。はい。

実は私の父が関係している様なんですがあまり詳しくは…

私の父は一応は社長です。

それにより私は社長令嬢です。

…嬉しくないです。

だって契約会社ですよ？

思いつきり手駒ですよ？

社長令嬢だって言ってもこの性格と見た目ですから…。

父が社長だって聞いたのはおばあちゃんが亡くなった時でした

一応は父の母な訳なので葬式には来ていました。

相変わらず冷めた目でしたが。

あの人は…私が嫌いなのに。

なぜ 婚約者なんて…

母は今実家らしいです。

実家と言ってもフランスです。

祖母や祖父は日本人です。

…全く。変な家族ですよ。

娘を一人暮らしさせるとか。

バカらしくなります。  
はあ。

ドタドタドタドタドタ

バタンッ

ムギユッ

「ひいいやあッ?!」

後ろから抱きしめられた。

この独特の香水…

「お姉さん？」

「きやあああッ！また会えたわ　！！私のお人形さん！」

鏡さんのお姉さんでした。

ちよっと待って下さい…。

お人形さん……………

「お邪魔してます」

「あら愁くんと夏樹くん」

「胸…デカ…」

「この子誰？可愛い」

「と、時枝真子です」

「で、この子は」

お姉さんは静さんを指した。  
今綺麗な顔で寝ている。

「仲良しの静さんです」  
「……………ふうん」

静さん綺麗ですよ。

サラサラした黒髪…。スラリとした長身に綺麗な顔立ち。  
女の子だったらモテモテ…

「なんで女装してるのかしら」  
「さあ…っってお姉さん?!」

気付いてたんですかあ?!  
お姉さん凄い!  
その時だった。

「んあ…」  
「静さんおはようございます」  
「さ ちゃん…?おはよ」  
「静さん声色が…?」

静さんにしては声が低い。

男声… / / (何故お前が照れる)

「あ…風邪引いたかな」  
「風邪ですか?!」  
「ま、大丈夫だろ」  
「愁さん…」  
「じゃあ、鏡くん起こそ」

と言つて夏樹くんが鏡さんを蹴飛ばした。ひい?!  
鏡さんはむっくりと起き上がつて私たちを見渡している。  
私を見つけた瞬間抱きついてきた。あら?あら?!

「鏡さん?!ちよ…!」

「アスカくラブリー」

「/ / /」

メガネ無し鏡さん!!!

に言われるとドキツとします。

そんな真つ赤な私が気に食わない皆さんは私から鏡さんを離して蹴飛ばし始めた。え、ええ?!

「い、痛いッ!痛い!」

「てめえ俺の沙紀に!」

愁さん? (苦笑)

「あなた、変態」

真子さん? (苦笑)

「選択肢二つな?

死にたい?殺されたい?」

夏樹くううん!! (驚)

私、どうすれば?!

私があたふたしていたら静さんに抱きしめられた。

これはみんな見てません。  
どしたんでしょう。

「さ ちゃん。ごめんね」

「へ?!」

「私、実はね…」

耳にぼそりと言われた。

へ?! 本当?!

それは…何て言えば…。

うん…

「……………ごめんなさい」

「あはは。大丈夫よ。」

さ ちゃんは気にしないで」

そう言われましても…。

だってこんな時に…。

……………嬉しいですよ。

でもですね…

「さ、止めましょ」

「…はい」

私は、困りました。

静さんの言葉が。

……………。

『さ ちゃんが、好き』



第二十一話 菜川光一撲滅会議 1 (後書き)

静、頑張れ！

( 作者が言つな )

## 登場人物紹介2 (前書き)

暇つぶしっす。

気になる人がいたらどしどし言っして下さい  
鏡と茶衣のデート編あり。

## 登場人物紹介2

### 番外編

#### 登場人物紹介 2

サトウチユウヤ  
里内由也

昔の鏡と愁と夏樹の事を知っている数少ない人間である。  
好きな事は人間観察。

誕生日は二月二十八日

魚座のA型

トキエタマコ  
時枝真子

謎の転校生

スタイル抜群

実は愁とは元付き合っていた。

誕生日は十二月十二日

射手座のB型

ナノガワコウイチ  
菜川光一

沙紀の婚約者

お金持ちのお坊ちやま。

愁を敵対視している。

成績優秀、容姿端麗。

誕生日は十月二十六日  
蠍座のA B型

ミスノヨウイチ  
水野陽一

沙紀父

昔は仕事のストレスで沙紀に暴力を振るっていた  
今は大企業の社長様。

誕生日は五月二十三日

双子座のO型

椎羅 零 シイラレイ

鏡姉。

超お嬢様で可愛い物好き。

実は超頭良いとか。

誕生日は一月一日

山羊座のA B型

以上が一応登場人物紹介です。

気になる人がいたら是非是非言ってお下さいね？

以降穴埋めでございます。

爆笑？鏡さんのデート

キ

「さ、茶衣。い、行こう」

サ

「はい！鏡さま！」

キ

「いや様は…鏡でいいよ」

サ

「きききき、鏡／＼／さまああ」

結局様かよ…おいおい。

ま、可愛いからいいや（照）

という訳で今日は遊園地！

でも俺は…絶叫系…無理。

……………茶衣さん。

サ

「鏡さまあれ乗りませんか」

キ

「……………」

勿論、ジェットコースター。

俺は…首を…縦に振るしかない

ウウ…。

サ

「きゃあああつ！」

キ

「……………」

放心状態の鏡。

あまりにも怖かったのね…

サ

「楽しいですね鏡さまッ」

キ

「ウン…ソウダネ…」

サ

「気分悪いですか？」

キ

「……ごめんな」

サ

「なら、休憩しましょう」

茶衣はにっこり笑って俺の手を握りしめベンチへ向かった。

サ

「ちょっと待ってて下さい」

そう言ってどこかへ行った。

あ…楽しませたいのに。

俺バカだな…

サ

「鏡さま！お茶ですよ！」

キ

「ありがとうございます」

お茶ね。ありがとう。

茶衣には悪い事したなあ。

サ

「鏡さま、今日はありがとうございました。すごくすごく楽しかったです  
！！」

キ  
「……………本当？」

サ  
「はい！大好きです！」

…………… / / / / /  
超可愛い…………… / / / / /  
にっこり笑った顔…

キ  
「可愛い……………」

サ  
「へ?!鏡さま?!」

あ、やべ。声に出た。  
うん本音。  
可愛いよ。

あはは (壊れた)

キ  
「あのさ、俺はつきりお前に返事してないだろ？」

サ  
「は、はい」

キ  
「していいか」

サ  
「勿論ツです」

キ  
「俺茶衣が好きだ」

サ

「私もですううう（泣）」

泣き出した?!

え?!なんかすみません?!

好きです　　!!!

キ

「えと…好きです」

サ

「ううっ嬉しいですッ」

という訳で俺幸せです。

アスカより好きです。

大好きです。

大切にさせて頂きます。

<完>

番外編 爆笑?鏡さんのデート

## 登場人物紹介2 (後書き)

次は本文です。

読んで下さって有難うございます

ではでは (^・^・^)

第二十二話 会議してませんね（前書き）

はい。こんばんわです。

愁は最近カッコイイです。

静の恋はいつに...？

## 第二十二話 会議してませんね

『さーちゃんが、好き』

静さん……………？  
そんな…事…言わないで…

バカな私には分かりませんが…  
でも…静さんは…  
大切な人いるでしょう…？

突然の告白に焦る沙紀。  
当たり前だろう。

今まで”友達”としていた静がしっかりした瞳で言ったのだから  
友達…じゃダメなんですか？

「で、じゃあまず菜川光一についての話だな」  
「あのさあいつは親の権利使ってるだけな訳じゃん」  
「お、真子良い案あるの？」  
「うーん…親に言うとか」  
『……………バカ？』

親に言っても無駄ですよ…  
私の父と菜川光一の父親が幼なじみで、しかも契約会社。  
だから負けるのが確実。  
ですよね。

「てかなんで沙紀ちゃんが菜川のフィアンセな訳」

「そっだよ!」

「…」

「沙紀?」

「はっ?!え?!」

ボーっとしてしまった。

やっぱり考え事してちゃダメですよね…ね…。  
すみません皆さん。

「えと…はい?」

「お前最近どうしたんだよ」

「いや…あの…ですね」

愁さん…。

はいっすみませんっ!

ボーっとしてたのは静さんの事を考えていた訳で…

「あはは。ごめんね愁。私のせいなんだ。さーちゃん」

「え?」

「私、さーちゃんが好きな」

『え??!』

し、静さん?!

何言っちゃってんですか?!  
ちよいちよい!!

「お前…マジかよ…」

「静ちゃん沙紀ちゃんの事…」

「本当なのか静」

「うん…まあね」

ドガッ

「ッ…痛い…わね」

おい!

テレビかい!

愁さん暴力はいけません!

愁さんが静さんを殴った。

喧嘩は…いけませーん!!!

プチッ

「二人共…人の前で喧嘩しないで!私は静さんが大好きです!でも愁さんの方が好きです!それじゃあ…それじゃあ…ダメなんですか…?」

「さーちゃん…」

「沙紀…」

「今は菜川光一撲滅大作戦会議です。それは今しなくてもいいですよ…」

何か…疲れますね。

後で…返事します。  
ちゃんと、しっかりと。

「じゃ始めましょう!」

「……うん」

「……分かった」

それから会議は再び始まった。  
その中には案が一つ出てきた。

”私が父に会いに行く。”

これは…かなり嫌ですが…。

これしか無いんですよね。

頑張らしましょう!

「じゃあ私が付いてくわ」

「静さん…」

「頼んだぞ。静」

「OKよ」

仲良しこよし。

嬉しいです。

でもこれが大事件になるなんて

### 次の日の放課後

「静さん!行きましょう!」

「さーちゃん」

「はい？」

「大丈夫？」

「心配ご無用ですよ」

大丈夫じゃないですけど。

すごく不安です。

フラッシュバックしそうで。

あ、殴られた記憶がですよ。

怖いですよね。

父が怖い。また殴られたら…

なんて…ありえませんが。

「さ、ついたわ。水野会社」

「ドでか?!」

六本木ヒルズ並み?!

見たことないですけど…

父結構頑張ったみたいですね。

はあ…

「入るわよ」

「う、ういっす」

「あはは。緊張し過ぎよ」

「すみません (泣) 」

そして私たちは六本木ヒルズ並みの水野会社に入っていった。

結局会議っていう会議してませんね（笑）（作者&沙紀）

第二十二話 会議してませんね（後書き）

突入です！

父と娘の再会です！

第二十三話 沙紀危険？（前書き）

わ  
！

菜川光一 変態いい？！

（ 作者の気持ち ）

## 第二十三話 沙紀危険？

「あ、あの…水野社長は…」

「水野社長ですか？アポはお取りになりましたか」

「い、いや…あの…」

怖い ……！！

アポって何ですか ……？！

「今から継いで下さい。この子水野社長の娘です」

「え?! あつ申し訳ありません! どうぞ八階です!」

静さ…ん?!

凄い! カッコイ!

あ、そうでした。私娘でした…。

何の為に来たんですか! バカ!

「エレベーターこっちだよ」

「あ、はいっ」

エレベーターに乗り込んだ。しかし広いエレベーターですね

ポーンと音がして沙紀びびる。

「うひゃあ?!」

「いや…着いたただけだから」

「すみませんっっ」

エレベーターって滅多に乗らないから怖いんですよ。  
落ちるとか閉じ込められるとかあったら……ああ……怖い。

「行くわよ、さーちゃん」

静さんに手を引かれて歩いていく。緊張するなあ……。  
と、あっという間に社長室前。

ひー……ふ……ひー……

コンコン

「静さん早いッ!？」

静さんの……意地悪……

まだ深呼吸途中ですよ!

すると声がした。……。

「どいぞ」

……。  
……。  
……。

ガチャッ

目の前には父と……

菜川光一…

何で菜川光一がいるの？！

え？！

なんで？！

「……………沙紀か」

お父さん…。

何でいるんですか？！

「あれ沙紀？手間省けたね」

クククツと笑う菜川光一。

不気味です…。

「さーちゃん下がって」

「え？」

私は一応言つとおりに下がった  
何か雰囲気やバい様な気が…

「おい菜川。私たちは社長に話なんだけど。お前邪魔」  
「はいはい。分かりましたよ」

あれ？意外と素直…。

こっち見た。へ？な、なんで？

「じゃあ代わりに沙紀借りますから。そういつ事で」

えええええ？！

ちよ…運ばないで！

ちよつとおおおお！！

しずかさあああん！！！！

…

「さーちゃん！」

「君は…沙紀の」

「友達だよ！早くさーちゃん助けろよ！お前の娘だろ！」

「………すまない………」

畜生！父親面しろよ！

さーちゃん父！！ばかやろつ！！

私は愁に電話をした。

トゥルルルルル

『静？』

「さーちゃんが菜川に誘拐された！！早く助けなきゃ！」

『は？』

「誘拐されたんだよ！さつさとしろよ愁！多分あいつの家だよ！助けたくねえのかよ！」

『………分かった』

プッ プッ

さーちゃん…

待っててくれ…

( 言葉を気にしなくなった )

…

ドサッ

「光様、どうするのですか」

「んーとねえ」

ここは…どこでしょう？。

何で押し倒されているの…？

しかも顔近い！

近いです！近い！

ここどこですかあ… (泣)

「襲っ？」

「ひぎゃあああああ！」

「冗談だよ。好きでもない奴には興味ねえから」

「腕放して下さい！」

「ああごめん」

「押し倒さないで下さいよ！」

「ああ…癖でな」

「癖で押し倒さないで下さい」

と言って腕を放してくれました

あれ？優しい…。

でも…じゃあなんで私を…

「……………じゃあなんで私が婚約者なんですか」

「頼まれたから」

頼まれたから？

じゃあ好きでもない私と…

「頼まれたからっていうだけで好きでもない奴と結婚するんですか？それって凄く矛盾してま…わっ?!」

ドサッ

また押し倒し再開。

しかも真面目な顔……………

何か雰囲気が悪い…

悪い事言いましたか?!

ヤバイ…です？

菜川光一がニヤリと笑った。

「その口封じようか？」

と呟いた。

ひい?!



第二十三話 沙紀危険？（後書き）

沙紀はどうなる？！

## 第二十四話 涙と決意（前書き）

今回はかなりのシリアス。

書いててうわっ…とか思ってしまった（おい）

どうぞ泣いて下さい？

## 第二十四話 涙と決意

「その口封じよつか？」

そこで私は怯えすぎて、  
気絶しました（泣）

だっだってですね？そんな男慣れしていない私にキスするぞって…  
（そうは言っていない）

とにかく怖かったんです！  
はい？！

で、目が覚めるとそこは学校の保健室で、消毒液の臭いが鼻にきていた。既に日は落ちいつの間にか外は真っ暗だった。

「目、覚めたか」

ビクッ

隣のベッドから声がした。

……………誰ですか……………？

シャッ

カーテンをどけてこちらを見た人。それはまさしく愁だった。

「しゅう……さん？」

「まったく……お前心配かけすぎ」

愁さんは私のベッドの隣にある椅子に腰かけて溜め息をついた  
あれ？ 静さんは？

「愁さん、静さんは？」

「静は………」

え………？

嘘ですよ………？

また、笑って言って下さいよ。

冗談だよって言って………。

私は布団を深く被り目を伏せた。

閉じても流れる冷たい水。

それを止める事はやっぱり無理だったんだと思う。

愁 s i d e

静から電話が来て急いで向かった先。そこはアイツの家、兼会社だった。  
つた。

信号が赤だったから立ち止まっていると後ろから声がした。

随分息切らしてる。

水野会社からアイツの会社までは結構な道のりだ。

運動苦手な癖に。

「は . . . . . よお . . . 愁」

「お前倒れんなよな静」

「あはは。心配ご無用。そんな柔な体じゃねえよ」

静、男モードだな。

まあ . . . 当たり前なのかもな。

と、信号が青に替わった。

「さ、行くよ」

「ああ」

気付いていれば良かった。

信号を無視して突っ込んでくる赤い車に。俺が気付いていたら . . .

「愁ッ . . . 危ないッ!!」

静の声を聞いて右を向いた。

もう . . . 遅い。

バンツという音がした。

でも . . . 俺は痛くなかった。

なんで？

なんで静が倒れてんだ？

なんで、血だらけなんだ？

「し、静アツ！！！！」

周りの奴らの声は雑音。

俺はクタリと動かない静を抱きしめて大声で叫んだ。

「きゅ…救急車呼んで下さい！」

それしか考えられなかった。

血だらけの静。

見たくない。見たくねえよ。

頼むから…死ぬな…静。

死なないでくれよ！！！！

それから数十分、救急車がつき静は運ばれていった。

小さな小さな声で静は

「さー…ちゃん…を…」と言っていた。

最後まで…沙紀の事がよ…。

自分の事…心配しろよ…

バカ。

アホ。

だから俺は一人で来たんだ。

沙紀を迎えに。

ボタンッ

ドアを強く開けると、菜川光一はいなくてベッドの上でぐっすり眠る沙紀がいた。

……………眠り姫？

つたく…。

するとテーブルの上に手紙があった。アイツからだろうな。

” dear 愁くん ”

はい愁くん。

僕だよ。菜川光一。

今回はちよつとしたアクシデントで僕はいないから沙紀を返すね

でも、僕は彼女が気に入った。

必ず婚約者として迎えるよ。

それまで、アディオス

菜川光一

「アディオスって…変な奴」

俺は沙紀を持ち上げて部屋を出て行った。……………静？  
ちゃんと助けたぞ？

沙紀 side

どうして静さんが…

私は震える手を抑えてベッドから飛び起きた。

愁さんは本当に泣きそうな顔で私の頭を優しく撫でた。  
愁さん…

「行ってこい、沙紀」

え……………？  
愁さん？

「静、青葉病院だから…行け」

「愁さんも一緒に…」

「お前だけが行け」

「どっし…」

愁さんは伸ばした私の手に触れず部屋を出て行ってしまった。  
愁さん……………？

部屋に取り残された私は一人また涙を流していた。

「静さっ…っうっ…」

泣いても泣いても泣いても。  
心の闇には光が差さない。

いつの間にか体は青葉病院に向かっていた。静さんに会いに。

病院に着くと、色んな放送が流れていて不安が増す。

………静さん。

歩いていくと、手術中の灯りがまだ付いている。

………あ、夏樹くん達………

「沙紀ちゃん……」

「皆さん……来てたんですね」

私も夏樹くんの隣に座った。

時間はただ過ぎてゆく。

パッ

と、赤いランプが消えた。

鼓動が早くなる。

ウィーン

重い扉がゆっくりと開いた。

中から先生方が出てこちらを見てきた。にっこり笑っていた。

「手術は成功です」

「ほ、本当ですか?!」

私は緊張が解けてまた泣いていた  
良かったって。

静さんが死ななかつたって……

「でもまだ安静にしておかなくてはいけませんので、集中治療室に

運びます。見学の方は……」

「あつ……行きます」

「じゃあ僕ら帰るね」

「夏樹くん……」

「良かったわね沙紀」

「真子さん……」

「……じゃあな」

「鏡さん……」

私を残して夏樹くん達は病院を後にした。私は静さんがいる集中治療室に向かっていた。

集中治療室に入ると静さんが眠っていた。頭に包帯を巻き、手足はボロボロで。

また泣いていた。

「しっ……ずかさん……」

私の声に静さんが少し反応した  
聞こえているんですか……？

横に置いてある手を包むように私は静さんの手を握った。

静さん？もう大丈夫ですよ？

私が……ずっといますよ……

だから……目を覚まして……

ピクッ

握っていた手が動いた。  
静さん？！

静さんを見ると目を開けてにっこり笑っていた。  
どこことなく嬉しそうに。

私は…いつの間にか泣いていた

「さ…ちゃん…」

小さな声で

「なかなか…いで…」

そう言われても…泣きますよ…

だって

だって

だって嬉しくて……………

「静さん有難うございます…」

私は真っ赤な顔で泣きながら静さんにお礼を言った。  
それで疲れたのか私は寝ていた

「アイツは、本当に好きなんだな…。沙紀の事」

愁は教室の机に座りずっとずっと空を見上げていた。

俺には…沙紀を守れない。

だから………

愁は静かに涙を流していた。

第二十四話 涙と決意（後書き）

愁が泣くのは初めてです。

あ 見てみたい…

## 第二十五話 別れの涙（前書き）

前回に続きシリアスです。

といたしますか：なんだか菜川を出していませんっ！

すみません（泣）

出しますんで！必ず！

## 第二十五話 別れの涙

静さんは二ヶ月後復活しました

良かったです。

本当に良かった。

今は夏休みです。

今年は暑いですねえ…

え？愁さんですか？

………じ、実はあ……

『連絡が途絶えてる?!』

「そうなんですう (泣) 」

愁さんが無視するし、電話にも出ませんしもう嫌われたんじゃないかって…うわぁん…。

「そついえばそつね」

「静さん知りませんか？」

「ううん。知らないわ」

今この話をしている時も愁さんはいません。うう… (泣)  
一体何があったんですか?!

と言つ訳で愁さん家に行く事になりました( ^o^ )  
すゝく心配ですが.....

今私たちは静さん家にいます。

つまり、豪邸.....

怪我は治りましたがまだ危険なので置いていきます。

す、すみません (泣)

「行ってらっしゃい」

「はいっ」

今日は...雨です。

生ぬるい雨に湿気が凄くて髪の毛がぴよんと跳ねていた。

「なあ沙紀」

「はい?何かしましたか?」

真子さんが私に言った。

??

「沙紀本当は行きたくないんじゃないの...?」

「.....」

「やっぱりそうか」

鏡さんも呟いた。

.....はい...行きたくないです。

あの時、手を退かされて無視された時から何故だか怖くて。

また離れていっっちゃう気がして

私は・・・また・・・独りかな...

ポンポン

と頭を撫でられた。

夏樹くん・・・

「僕たちがいるから...」

ありがとうございます。

それから、ごめんなさい。

「行こう」

私たちはボロアパートに向かいました。一応我が家です。

お隣さんが愁さんですからね。

はあ... 気まずい...

ピンポン

「うひょあ?! 早い!」

静さん似ですね・・・真子さん・・・

はあ...

ガチャッ

「.....」

ドアを開けた愁さんは固まった  
あ、ははは…

目が合うとフィとすぐにそらされてしまった。

……。

「はいおじやま」

「ちょ…真子！」

「話あんの。座れ愁」

「……」

夏樹くんの言葉に愁さんは諦めたのか部屋に入れてくれた。  
二回目…ですね。

「…失礼します」

「沙紀」

ビクッ

愁さんに呼ばれて緊張していた  
凄く、優しい声でした。

「ごめんな」

大丈夫ですよ？

私は…大丈夫です。

「で…愁さあ…何で沙紀の事無視するんだよ」

「……別に」

「別にじゃなくて!?!?!」

「……無視してた訳じゃねえ」

「じゃあ」

「もう良いですよ…？無視してた訳じゃないなら…」

やっぱり怖いのかな。

この場から逃げたい。

心拍数がスゴかった。

バクバクバクバクバクバク

……

「じゃあ私、帰りますね」

「あ、沙紀……」

外に出ようと玄関に行った時腕をぎゅっと引っ張られた。  
振り返ると愁さんだった。

力強いです……

愁さんの顔は切なそうだった。

「愁さ……」

「沙紀……」

……別れよう

え？

い、今何て言いましたか？

愁さん？

「……お前には静が合ってる」

……お前には静が合ってる  
それは、嘘ですか？

私は…私はつつ

言いたいのにな涙が溢れ出した。

声が出ない。

切なくて切なくて切なくて。

胸が痛くて。

いつの間にか愁さんの頬を思いつき叩いていた。  
それで家を飛び出した。

泣きながら雨の中を走り躓いて水たまりに落ちた。  
服はびしょびしょで髪の毛もびしょびしょで。  
心が真っ暗で。

雨の音が聞こえる。

冷たいよ。冷たいけど。

切ないよ……………

「つつ…つわあああッッ」

泣き出していた。大声で。

周りなんか気にしないで。

「つわあああッッ」

いつの間にか静さんの家に走り出していた自分がいた。

勿論静さんは驚いていた。  
泣きじゃくりびしょ濡れの私がいたのだから。  
びっくりさせて…すいません…

「さーちゃん…おいで」

静さんは泣いている理由も聞かず優しく抱きしめてくれた。  
それがまた暖かった。

これが失恋なんですね。  
私はずっと泣いていた。

泣き止んだ私は静さんに言った

愁さんに別れようって言われた事をちゃんと。

静さんは少し顔をしかめてもう一度私を強く抱きしめた。

すると静さんが離れた。

「さーちゃん」

真剣な瞳。まただ。

動けなくなる。

「さーちゃん、俺と…」

……付き合ってくれないか」

そう言った。

私はその言葉に小さく頷いた。

第二十五話 別れの涙（後書き）

返事をした沙紀。

これからどうなるのでしょうかね

第二十六話 好きだ。(前書き)

……愁が泣くの二回目でした！  
後書きを見た方嘘ついてすみません！って事でした…(泣)

第二十六話 好きだ。

「さーちゃん、俺と……  
……付き合ってくれないか」

私は

小さく

頷いた。

愁 s i d e

沙紀を泣かせた。

俺は最低だ。最悪だ。バカだ。

まだ好きなのに。

あいつが好きなのにッ

あいつに殴られた頬がジンジンして自分の言ってしまった事を悔いている。

何で言ってしまったんだ。  
別れよう　と。

あの時、一番に助けにいったのは静で俺は呼ばれて行った。  
一番沙紀を想ってるのは静だ。  
だから．．．俺は．．．

「ほんとにバカだね」

後ろで苦笑いしている真子。  
とマジ切れ寸前の夏樹と鏡。

するとダンツと夏樹が俺の胸倉を掴み壁に押し付けてきた。  
いつの間にか身長が俺より高くなっていた夏樹は幼さを感じなかつた。

……………怖いな。

「何泣かせてんだよッ」

「……………悪い．．．」

謝ったって沙紀を傷つけた事は変わらないのにな。  
泣かせたくなかったのにな。

だせえよ…俺。

「愁ッ……………あ…」

「ツク…」

だせえよ…。

何でまた泣いてんだよ…

自分が振ったのに…

未練タラタラじゃねえか…

夏樹は俺の泣き顔を見て胸倉を離して部屋を出て行った。

真子はその夏樹に小走りですいて行った。切ない顔をして。

結局家には泣いてボロボロの俺と真顔で本を読む鏡だけが残っていた。

「なあ、愁」

鏡は本に目を移したまま俺に話しかけてきた。

「お前…まだ好きなんだろう」

「……ああ」

「泣かせたくなかったんだろ」

「……ああ」

「何で離すんだよ」

俺は曖昧にしか返事が出来なくてそのまま無言の時間が過ぎた。

空は真つ暗で八時だった。

鏡が

「俺帰るな」と言って立ち上がったんだけど、俺は嫌で鏡の服の袖を微妙に掴んでいた。

無論、鏡に爆笑されたが。

「あはははッ！は…はいはい。じゃあ今日は泊まらせていただき

ますよ。たく…甘えん坊さん  
「……………うるせ」

鏡は笑いながら携帯で家に連絡していた。  
泊まる理由は言うな…

「うん。愁が大泣きしてね」

よおおおおッ?!

思いっきり言ってるし?!

「じゃあ明日夕方帰るね」

……………きよ うくん

キミは俺に殴られたいの？

「ひい?!」

さっきまでは…可愛かったのに…  
「……………!!!」

結局鏡は失神していた。

俺は夕飯を食べて風呂に行った

失神している鏡を連れて。

どうせ沙紀は静んどこ…

ああああッ!!!!

も 止めてくれ!!!!

俺のクールなキャラが壊れまくりじゃねえかッ!!

（ 誰のせいだよ ）

in フロ

「はあ……………」

ブクブクブクブクブクブク

「ん？あ、忘れてた」

メガネだけが一人で泳いでた。  
あれ、本人がいない。

ブクブクブクブクブクブク

……………鏡？

どこだ？

ブクブクブクブクブクブク

「沈んでるしツ?!」

鏡はずっと失神していた。

しかもメガネ無しなもんだから他の客にきゃあきゃあ言われていた。  
まあ当たり前だな。

「よっこいせ」

「しゅうの…バカやる…」

「はいはい」

「おれは さえが ……」

ええええ?!

それほんとかよ?!  
聞かなかった事にしよう。

「俺は 沙紀が 好きだ」

鏡を担ぎながら雨の止んだ帰り道を歩いてそう呟いた。

俺は沙紀が好きだ

でもな。

でも俺は……………

第二十六話 好きだ。(後書き)

鏡のメガネ無しってそんなにカッコイイのかなあ…

第二十七話 お祭り編 前編（前書き）

お祭り編です。

前編には出てきませんが後編には菜川と愁が出ます。

明日から忙しくなるので一日更新は今日までとします。  
でも出来るだけ頑張りますので是非是非ご覧下さいッ

第二十七話 お祭り編 前編

私はいつの間にか眠っていた。  
ここは…どこだろう…

「ん……」

「ん？」

何か声があったから横を見てみると真横に綺麗な寝顔が。

うつきよおおお？！

「誰デスカ ？！」

「さーちゃん声大き……」

あ、静さん？！

そっか…そうでした。

私…昨日静さんの家にびしょ濡れで来てそのまま寝ちゃったんです  
ね。でも何でベッドに…？

首を傾げて考えていると静さんに腕をグイッと引っ張られた

「わわっ？！」

思いつきり静さんの胸に潜ってしまいハッと離れた。  
びびびっくりしましたあ

だって静さん急に引つ張るし…  
私は顔を真っ赤にしていた。

「ねえ」

ビクッ

静さんに話しかけられて緊張していたのがバレバレだ。

「昨日の…本当？」

昨日の…？

少し考えてみた。

巻き戻し >>

『さーちゃん、俺と…』

……付き合ってくれないか』

私は、小さく、頷いた…  
ん？頷いた？

頷いたあああつ？！

え？！何ですか？！

私頷いたんですか？！

全く記憶が無いのですが…（汗

つて事は . . . . .

「え、ええええええええ?!」

「やっぱりね」

静さんは爆笑していた。

え っとお . . . えっ . . .

何か分かりませんがなんとなく . . . . .

「ごめんなさいッッ」

謝りました。

だって付き合うなんて . . .

私まだ愁さんが . . .

あ . . . . . そっか。

もう別れたんでした . . .

はあ . . . .

「何百面相してるのよ . . . クス」

「笑わないで下さいッ」

静さんの意地悪。

. . . . . ごめんなさい。

「ま、それは良いとして、今日はお祭りがあるから行きましょ」

「あ! そうでした! でも昨日と同じ服 . . . でした . . .」

びしょ濡れの（笑）  
乾いてますが着るのはちょっと……………。

「なら、お風呂入る？」

「へ？お風呂ですか？」

「うん。で、妹の下着貸してもらってから服は気にしないで」

「はいッ…って静さん妹さんいたんですかッ?!」

そこ！本当にびっくりです！

静さんはふふふと笑い頷いた。

「いるわよ。ちゃんと女の子の妹がいるわよ。お風呂から上がったら紹介するわ」

「分かりましたッ」

私は案内されてお風呂に行った

ガラッ

「うわぁ…広ーい…」

本当に広がったです。

綺麗な大理石に広いお風呂。

も 幸せですッ！

「さーちゃん？下着いっね」

静さんの声がした。

「ありがとうございます」

「じゃあゆっくり」

はふ．．．。

気持ちがいいですねえ

お風呂／＼／＼

二十分後

「あ、コレですね」

タオルと下着があつた。

それを着てお風呂場を後にした私は火照っていた。  
ふう…。

「さーきちゃああん」

ムギユツ

「うひよあぁッ?!」

また変な声がッ?!

といますか…どなたですか?

「沙紀ちゃんッ」

「ええと…はい?」

「やっぱり!可愛い」

「か、かわ…／＼／」

「この可愛い女の子は…？」

「由依！由依ったら…もう」

「兄貴！沙紀ちゃん可愛いね」

由依？

も、もしかしてツ？！

この方がッ

「そう。妹」

「静の妹の路乃由依です」

可愛い

由依ちゃんですねッ。

「水野沙紀といます」

「沙紀ちゃん」

「あ、そうださーちゃん。ちょうどね浴衣があるから着ない？」

「ゆ、浴衣ですか？」

「わ 兄貴ナイスタイミング ねえ沙紀ちゃん着なよお」

浴衣ですか…。。。

お祭りですもんね。

じゃあお言葉に甘えて…

「お願いしますッ」

「はい」

「じゃあ浴衣は由依に任せて 兄貴は化粧とか宜しくね」

「任せてよ」

と言って私は由依ちゃんに連れて行かれました。  
そこは由依ちゃんの部屋。  
綺麗に片づいてました。  
ふぉぁ…女の子の部屋です

「はい、ボーっとしないッ」  
「すみませんッ」

「あはは。沙紀ちゃん可愛い」  
「可愛いくないですよ…。」

可愛い可愛い言い過ぎですよ。  
私可愛くないです。

「嘘。超可愛いよ。だって兄貴が惚れるぐらいだもん」  
「それは…」  
「じゃあ時間無いから急ぐね」

と言って由依ちゃんはパパパッと浴衣を着せ始めた。  
うわぁ…早い…。。  
あっという間に着てました(笑)

「兄貴！OKだよ！」  
「はあい」

今度は静さんが化粧品を持ってやって来ました。  
な、何を……………？

「パパッと済ますからね」

静さんはパパッと本当に早く済ましてしまいました。  
びっくりです。この姉妹？

「さ、行きましょ」

「はい」

今は五時です。

昨日とは違って良い天気です。

「晴れたわね」

「そうですね」

「さーちゃん綺麗よ」

「へ?!」

急に言わないで下さいよッ／＼／  
も 慣れてないんですから／＼／

### お祭り場

「沢山人いますねえ…」

「あら、夏樹？」

「あ、静？」

夏樹くん、私に気付いてない…  
悲しい…

「あれ？えつと…沙紀？」

「真子さああんッ（泣）」

「沙紀だ……………」

沙紀ですよおおお（泣）  
そんな変ですか？！

「超可愛いんだけど！！」

「へ…？？」

「夏樹！これ沙紀だよ！」

「へ？マジで？！沙紀ちゃん可愛いんだけど！！」

と言って抱きついてきた。

夏樹くん……。

いつの間にか大きい…

「おい夏樹い？あたしの前でよく堂々と女の子抱きしめてるわねえ

………？？」

『ひいつ？！』

真子さんはブラック…

怖いです！…！

「はいはい。落ち着きましょ」

静さんの一言で止まった。

ところであの二人は？

「あ…知らね」

「え？」

「喧嘩でもしたんでしょ」

「……………」

そうなんですか？！

それは…どうしてですか？！

「沙紀ちゃんを振ったからだ」

「わ、私の原因？！」

なんか……………

ごめんなさいッッ！！！！

お祭り編 後編に続く

第二十七話 お祭り編 前編（後書き）

静って妹いました

路乃由依・ミチノユイ・

性別 女

年齢 14歳

性格 可愛い物大好き  
静にそっくり。

第二十八話 お祭り編 後編（前書き）

お久しぶりです

これからは三日置きぐらいに更新したいなあ…なんて思っております。

夜中の12時です。今度は。

楽しみに？している方、ありがとうございます

第二十八話 お祭り編 後編

ごめんなさいッッ!!!

と謝った私に夏樹くんたちは啞然とした後爆笑していました。  
な、なんで笑うんですか?!

私は頬を膨らました。

う . . .

だって喧嘩の理由って私なんですよね...?それなら...  
私がいけないんじゃないですか

「沙紀ちゃんのせいじゃないよ どうせあいつが意地張ってるだけ  
だし。あ、やべ良いこと思いついたんだけど!」

「良いこと...ですか?」

夏樹くんが笑いながら私に一步一步近付いてきた。  
な、ななな何ですか?

すると夏樹くんは私の耳元にぼそりと呟いた。へ?

ちょ...ちよつと待って下さいよ

私は良くないです!

「何何?」

「あのね、どうせなら沙紀ちゃんを餌にして愁を釣ろうかと」

「??？」

真子さんは理解してません。  
あのですね…つまりは…

『沙紀ちゃんが迷子になったフリをしてその辺を彷徨く。それで僕が愁に連絡して…あ、仲直りしようっていうね。で、多分来るだろうから、沙紀ちゃんがいなくなったっていう事を言う。そしたら探しにいくでしょ。もし行かなかったら少し脅してみるからね』

と言う事なんです。

私は…ミミズじゃありませんッ

(そこかい)

静さんは話を理解したらしく

「良いんじゃない?」と言った。

ええ……………。

「じゃあ…行っておいで」

「……ハイ」

「嫌?」

「……ハイ」

「まあね…あいつは静にヤキモチ妬いてるだけだし」

ヤキモチ妬いてる……………?

愁さんが…静さんに?

「え?何ですか?」

『……………(超天然……………)』

何ですかあああつ?!  
ちよつと教えて下さいよ!

「まあ…早く行け」

「真子さんまでッ…(泣)」

結局行きました。

はあ…つまらないなあ…

……………愁さん……………

『沙紀……………』

……………別れよう『

ズキンッ

胸が痛い……………

『お前には静が合ってる』

ズキンッ

思い出したくないのに…

もう…止めて…

これ以上苦しめないで…

「沙紀？」

ハッとした。

この声は…

「もしかして泣いてる？」



ま?!

どんな遺伝子ですかあ?!

「この子可愛いわね」

「だろ。俺の婚約者だよ」

「あこの子なのお?OKよ。」

この子なら許すわ」

「マジ?!」

.....あのう。

勝手にお話を進ませないようにして頂きたいのですが。  
婚約者でも何でもいいですが!私はあなたが嫌いです!

「じゃあまたね」

「も来ないで下さい...」

嵐が去った...。

私は小さく溜め息をついた。

はあ...

時間はどんどん過ぎてゆく。

私は眠気に負けてベンチで深い眠りについてしまった。

もっと寝とけば良かったで...す...。

トウルルルッ

「あ？着信……夏樹……」

プツ

「もしもし……」

『あつ愁くん？あのさ……仲直りしよう？だめ？』

「仲直り……スル……」

夏樹とは仲直りしたかった。

俺も謝りたかったからだ。

ごめんって。

『じゃあ今からお祭り場の大きな杉の木の下に来てね』

「分かった」

『沙紀ちゃんもいるからね』

俺は簡単に私服を着て外に出た

今日はいい天気だ。

そういえば今日祭りの日だったんだな。すっかり忘れてた。

仲直りしよう。

そう言い出せなかった。

はあ……何か疲れた……

「あ、来た。みんなイイ？」

『任せて』

お、夏樹いたな。

真子と…静……………？  
あれ？沙紀は…？

「愁くん、ごめんね？」

「俺も…ごめんな」

「仲直りしようねえ」

「ところで沙紀は…」

いるって言ってたよな…。  
どこに行ったんだ？

「あれえ…本当だ！ねえ二人知らない？どうしたんだろう」

「分かんない…」

「もしかして迷子かな…」

「それは無いだろ…」

「でも…沙紀ちゃん可愛いから変な男に襲われてたら…」

そ…それは…（汗）

あり得るな…（心配性）

沙紀は可愛いから…

って俺何を考えてんだ？！

／／／／／

「俺、捜してくる！」

『行ってらっしゃい』

「行ったね」

「行った行った」

「さて、静？良いの？」

「私はさーちゃんが幸せなら良いの。ほら好きな子には幸せになっ

て欲しいのよ」

俺は静がカッコ良く見えた。  
ちやんと…一人の男として。

”好きな子には幸せになつて欲しいの”。  
それが本心なんだね。

幸せになつて欲しいのよ  
さーちゃん。

「沙紀！沙紀！いるかつ？」

見当たらねー…  
どこいんだよ。ったく…。

すると声がした。

「ね この子可愛くね？」

「寝てるし！」

「超襲いたくなるな」

……………まさか…

絶対そんな気がする…

寝そっだし…

可愛いし…

俺は走り出していた。

ベンチに無防備に寝ている。

浴衣だ：／／／／  
って俺何照れてんだよ！！

「キスしよ かなあ」  
「あはは いいかも」

良くねえ！！！（怒）  
沙紀にキスしていいのは俺様だけだあああつ！！

「すみません、コイツ俺のなんですけど。離して下さい」  
「あ？なんだよ彼氏付きかよ」

そう言つて男三人組は去つていきベンチにはまだ幸せそうに爆睡している沙紀が残つた。  
今日何か違うな．．．／／／  
化粧でもしてんのかな。  
綺麗だ．．．

「ん……しゅ さん……」  
「ん？」  
「……嫌いに……なら……ないで」  
「ああ……」  
「……別れたく……ないよ……」

コイツ……。  
ごめんな。傷つけて。  
俺も別れたくないよ。  
だから……

「沙紀……」

目にかかっていた前髪をどかしてそっとおでこにキスをした。  
そうしたら沙紀が起きた。

「ん…あれ…」

こっちみた。

あ、固まってる。

「しゅ…愁さん?!」

「おはよ」

「おはようございます…?」

理解してないみたいだな。

あ…寝てたしな。

もう夜だぞ。

「あのさ、俺さ…」

「愁さん好きです!…!」

「は?」

「だから…だから…別れるなんて…言わないで下さいっ」

あ、泣き出した。

おいっ…泣くなよ…

俺は沙紀を抱きしめていた。

「二度と言わねえよ…誓う…沙紀を…一生離さねえ…」

そう言って俺は、

沙紀に、

初めてキスをした。

「……………」

「沙紀？」

「き、き、ききき…キス…／／／／」

「嫌だった？」

少し意地悪を試してみた。

無論、沙紀は真っ赤になって俺の腕を叩いていた。  
痛いから（笑）

「い、嫌じゃない…」

可愛い

なんだよコイツ可愛い！！  
もう一回ぎゅうってした。

（キヤラついに壊れた）

「愁さぁん…くるひ…」

「ああわりい」

苦しかったのか沙紀は肩で息をしていた。面白

「じゃあまだ時間あるから回ろっか？何か食べたいだろ」

「あ、はいっ」

手をしっかりと握った。  
もう離さねえ。絶対に。

「わたあめっ」

「わたあめ？買ったか」

「買ったあ」

俺はわたあめを沙紀に買って渡した。沙紀はすぐに食べて嬉しそうに笑った。

「はいつ愁さん」

「え？」

わたあめがこっちみてる。  
食べていい訳？

パクッ

「甘……………」

「愁さん甘いのだめでした？」

「ん．．．美味しいよ」

俺が言うと笑った。

甘いけど…イケるな。

「じゃあ…あれやりませんか」

「射的？」

沙紀が次に言ったのは射的だった。コイツ撃てるのかよ。

という目で見ていたら沙紀に怒られた。何で?!

「私銃とかは得意なんです」  
「へえ」

沙紀は射的を始めた。  
ガチャツと引いた。  
玉を入れて狙いを定めた。

パンツ

「あたりです」  
「:スゲ」

なんと沙紀は五玉全て当てた。  
一番喜んでいたのは大きな熊のぬいぐるみだった。  
沙紀熊好きだな。

おさねえ・・・  
幼い。

ヒュウウウウツ

パーンツ

「わー！花火だあ」  
「綺麗だな」  
「はいッ」

お前の方が綺麗だ／／／

（ 大丈夫？ ）

花火が終わるまでずっと俺は沙紀を見ていた。

沙紀、好きだよ。

第二十八話 お祭り編 後編（後書き）

つ、ついに…

愁初キツス。

おめでと

次回は多分4月8日12時です  
ご覧ください。

## 第二十九話 契約（前書き）

こんばんは？

少し早めの投稿です（泣）

明日学校なんで・・・うう（泣）

今度の更新は分かりませんが頑張ります（泣）（笑）

久しぶりに菜川光一が出てきました。すんげえ嫌な奴ですネ・・・

## 第二十九話 契約

キスをしました。

初めてのキスです。

幸せです。

でも、でもですね。

大事な事を忘れていました。

ハイ。読者の方は覚えてたはずですが、私の婚約者事件です。

菜川光一。

あの人は良く分からない。

．．．スミマセン。

何故出だしからこんなテンション+こんな話をしているのかと聞かれますと…答えにくい…。

だって．．．だって．．．

だってえ．．．

「あ、沙紀ちゃんは紅茶かな」

現在．．．菜川自宅です．．．

ここまでの経由を話します。

.....

あのお祭りから既に時間は経ち学校は始まりました。  
キスの事が余りにも衝撃的だったのか私と愁さん以外の人は固まっ  
ていました。

『キスねキス』

「はいっ」

「沙紀、コイツ等長いから先に帰ろうか。」

「へ？は、はい？」

愁さんに言われて教室を出た。

て、手繋いでます・・・／／／  
嬉シイ・・・

その時でした。

「猪垣くん、校長先生が呼んでたよ？」

「親父？何か用かな。わりい沙紀。先行ってて？」

「分かりましたっ」

この時気付けば良かったのですが、生憎私は天然なので。

（ やつと気付いた ）

私は愁さんと別れて玄関まで来て座っていました。

はふう・・・。

そういえば・・・もう九月なんですわねえ。。。月日が経つのは早いで  
すわねえ。

なんて考えてました。

あ、そういえば文化祭がもうすぐ何ですよねえ。

「劇ですねえ…」

「何が？」

「ひい?!変態ツツ!」

ハハハ。と笑っている奴。

はい。菜川光一でした。

しかも隣に美人さん…? ?

「沙紀…ちゃんだっけ」

「はい…?」

ギュウツ

と抱きしめられた。

レモンの香りがした。

「今日は私とお茶しましょ」

「ええ?!」

お誘い?!

え つと…でも愁さんが…

「俺が相手しとくから大丈夫」

「……………」

「なんだよその目。俺は嘘はつきませんよ」?

絶対嘘です!!!

つきませんよ ?の当たりが嘘っぽいですよ?!

「ダメ？」

うっ。。。

菜川のお母様・・・その目は・・・  
はあ...

「今日だけなら・・・大丈夫です」

「やった！」

「なんであなたが喜ぶんですか菜川光一。」

「え？なんでフルネーム？」

嫌いだからです。

でもお母様は好きです。

といますか、可愛いんです。

.....はい。

「じゃあ絶対に来ないで下さいね。菜川光一」

「はいはい・・・だからなんでフルネーム・・・」

菜川光一はため息をついた。

だから嫌いだからです。

「絶対愁さんとして下さいね」

「はいはい」

この時自分が馬鹿でした。  
お母様は良い人なのに・・・。

「始良？車は？」

「こちらでございます葉子様」

始良？葉子様？

へ？

「ああ。紹介遅れました 菜川光一の母親菜川葉子です」

「わたくしは菜川家の執事でございます始良と申します。どうぞお見知りおきを」

ぶ…武士…。

執事なんているんですね（笑）

始良サンは暗かった。

へ？な、何か？

「あの…何か…？」

「い、いえ。…あの…」

と言いかけた時、葉子さんが少し大きな声で言った。

「始良。余計な事は良いわ」

「あ…す、すみません…」

何ですか？！

あの…の後に聞きたいんですが

「言ってください」

「行きましょう」

つてオイ！

（ キャラ変 ）

結局車に乗せられて菜川家に。  
はあ・・・

という経由でした。

.....

現在

「紅茶で大丈夫です……」

「じゃあ淹れてきまーす」

.....

始良サンさつきから暗い・・・。  
やっぱり聞こう。

「始良サン始良サン」

「……はい？」

「さつき言いかけたの私に関してですよね？」

「……はい……」

やっぱり。

だって私の顔ちらちらと見てましたもんね始良サン。

「言ってください」

「しかし……」

「じゃないと帰りますよ」

「うっっ……」

私最近誰かに似てきた…  
誰だっけ…

「分かりました…。お話します。水野様あなたは今日…婚…」  
「始良ッ！」

あああああ（泣）  
タイミング悪すぎです…  
葉子さん…

「私…帰ります」

嫌な予感します。  
スツゴくします。

「だーめ」  
「…やはりいましたか」

菜川光一。  
で…この方は良く似てますけどお母様じゃないですね。  
はあ…。

「そろそろ限界なんです」  
「キレるの。」

私は何故丁寧語なのか皆さん知っていますか？  
正解は私キレるとヤクザになります。はいなります。  
「ざけんじゃねえ！」  
当たり前です。

だから…ムカつく事は…

「しない方が良いですよ？」

「沙紀は今日逃げられない。何て…た…た…って婚約パーティーだもんね今日は。アハハ」

婚約パーティー？！

どんな話ですか馬鹿野郎？！

何も聞いてな…

「ちゃんと許可はとったよ？君のお父様とね」

契約書をちらつかせる。

私はそれを奪い取った。

#### 【契約書

この契約書は水野沙紀を我が菜川家の婚約者として頂く為の物である。

もし、水野沙紀が破棄したら水野会社との契約は打ち切り、又橘学園高等学校を廃校とする。

契約 sign 水野陽一】

嘘でしょう？

水野会社との契約が打ち切りなら別に良いんです！

でも…なんで…なんで橘学園を廃校にするんですか！

それじゃあ…それじゃあ…

私は…

額かなきゃいけないの？

君は手駒。俺の操り人形。  
君を手に入れられるなら俺はどんな事でもしよう。

なあ？水野沙紀？

君はどちらを選ぶかな？

自分の幸せか、みんなの幸せか。

さあ？どうする？

第二十九話 契約（後書き）

いつも有難うございます。

第三十話 執事のキモチ（前書き）

お久しぶりです。

更新したの何日ぶりか？

今回はこの前の続き版。

そして愁sideです。

誰が好きか感想に書いて下されば幸いです。〇) ^ ^ ( ) 〇  
宜しく願います

### 第三十話 執事のキモチ

『お前に…大事な話がある』

そう親父は言った。

愁 side

「で、俺を呼んだ理由は？」

俺は親父が呼んでいたと聞いて沙紀を待たせている。  
今俺は校長室のソファに堂々と座り親父に問いかけた。

『大事な話がある』

親父はその言葉しか言っていない

大事な話？

俺に関係あることなのか？

ずっと黙ってる。

なんだよ？

「俺沙紀待たせてただけど」

「愁、この学園は…」

そこで再び黙った。

この学園は？だからなんだよ！

「早く言…」

「菜川会社に…売却されそうなんだ…。分かるか…？」

「は?!売却?!」

何の話をしてんだよ!

やっぱり菜川光一が元凶か…

あいつついに俺の学校まで…

でも、ちょっとおかしい。

売却されそう?って事はまだ何かあるのかよ?

「後は…まだ何かあんのか」

「…」

「言え親父。じゃないとこの学園を守れねえだろ」

「…水野さんを…婚約者にすれば…この学園は…返してやると…言われたんだ…すまない…」

沙紀を…婚約者に…?

あいつ…菜川光一…ツツ!

誰が渡すかよ!沙紀は…沙紀は大切な…大切な人だ!!

畜生ツツ!

「沙紀…ツ!ヤバ…沙紀待たせてるから…もしかしたら…」

俺は親父を無視して校長室を飛び出した。もう何も気にしない。

沙紀は手放さない!!!

玄関に息を切らして向かうとそこには沙紀の姿は無く一人の男が立っていた。

「誰だ」

「猪垣様。わたくしは光一様の専属執事広尾と申します」

「執事だと…？」

「…沙紀様は今夜光一様と婚約者パーティーを行うことになりました。それをお伝えすべく残らせていただきました」

は…？

今夜菜川と婚約者パーティー？

沙紀が？何…言っ…

冗談だろ？

「何を言っ…なんだよ」

「嘘ではございません。この契約書をご覧ください。水野陽一様、つまり沙紀様のお父上と契約しました」

「け…契約だと…」

俺はそれを奪い取って覗いた。

書いてある…。

どうしてだよ…。

どうして…

「あ…あなた…いいのか？」

「え？」

「あいつが幸せじゃない結婚してあなたはいいのか」

契約書まで書かせるって…普通はおかしいだろ？  
しかも愛がない結婚？  
そんなのくだらない。子供のおままごとじゃねえか。

「結婚はおままごとじゃねえ」

「しかし…これは決まった事でございます」

「だから俺はあんたの意見が聞きたいわけ。広尾サンの意見を」

広尾は黙っている。

ま、執事は主に従うってか。  
ばかばかしい。

「わたくしは、ちゃんとした結婚をして頂きたい。光一様には幸せ  
になつて頂きたい…」

「それがあんたの本音？」

「……………はい」

やっぱり、普通の執事じゃん。

従うだけじゃ駄目だ。

幸せに導かなきゃな。

「で、どうすんの」

「…本当は光一様に時間稼ぎをしとけと言われましたが…もう良い  
です。案内します猪垣様」

「マジで？広尾サン最高」

「広尾で結構です。さあ時間がありません。早く車に」

と広尾に催促されて素早く車に俺と広尾は乗り込んだ。

うわ…久々に乗ったな。ベンツ。

やべー…緊張だ。



「ただ一つだけ。」

光一様はその方を今なお愛しておられます」

「なら……」

「その方の為なんです」

「え？」

「お金持ちにはお金持ちを。……そういうのが菜川家の決まりで一般人とは婚約は許されないので」

……変なの。

豪に入つては豪に従えみたいなもんなのかね……。 (全然違う)

一般人との結婚ね。

俺んちは全然OKだからね。ハハ。

「でそれが今回の婚約者パーティーに関係あるの？」

「はい。とは言い切れませんがちよつとしたサプライズ……」

「へ？サプライズ？何すんの」

「婚約者パーティーは偽装なんです。本当はその方との……」

なんの話ですか？

おいおい？

サプライズ？

偽装？

その前にそれだけの話に俺たちは巻き込まれてるのか？

「けんな……」

「え？」

「ふざけんな……。それで沙紀を苦しめてんだ！お前たちは自分の事しか考えてねえよ！つーかマジ自己中……それで何自分たちだけ幸せになる？利用された沙紀とか沙紀の親父とかはどうなるワケ？」

「愁様…」

「沙紀を…沙紀だけは…泣かせたくねえんだよ」

泣かせたくねえんだよ。

沙紀は。

「…着きました」

あ…イラつく。

ま、早く止めなきゃな。

てかサプライズならいいんじゃないやねえ？いや…どうなんだろ。

ま、とにかく…

「行くか」

そう俺は呟いた。

今回のパーティー場所…。

菜川家。

やっぱり…デカイ。

六本木ヒルズ並だな。

「こちらです」

「ああ」

中に入るとパーティー会場は五階だと教えてくれた。

エレベーターに乗り込み五階のボタンを押した。

「そういえばさ…その子は来てんの？ここに」

「来ていらっしやいます」

「あそ」

来てるんだ。

絶対泣くな。絶対。

はあ．．．沙紀はどんな顔してるんだろっなあ．．．。

「どうぞ」

軽くエスコートされて部屋に入った。あ、やべ．．．俺今制服．．．ま、いつか。

「沙紀は．．．いた．．．」

沙紀は何も表情なく菜川の隣に座っていた。どうした．．．？  
なんで．．．あんな顔してんだ．．．？

「わたくしは．．．探してきます」

「ああ」

始良はそう言うと小走りでその場を後にした。  
俺は小さなため息をついた。

「はあ．．．」

第三十話 執事のキモチ（後書き）

ちよつとフライング（笑）

どうしてそんな顔をするの？

また会えるよ？

彼女は僕に笑いかけた。

真っ暗な空の下、二人きりで肩を並べたあの日。  
急に告げられた別れの言葉。

会えるよ…。

きつと…

ハイ。初めての光—sideです。

つて言っても沙紀sideですが…。あ、話的にですよ？

では

### 第三十一話 愛しの人（前書き）

おはようございます！

お早い投稿の桜木です（笑）

今回で菜川光一シリーズは終了です。もうすぐ完結に近付いて参りました。

早いなあ・・・。

三人称ばっかなので沙紀は私、愁は俺、光一は僕、俺の二つです。

ではでは。

## 第三十一話 愛しの人

どうしてそんな顔をするんだい？

菜川光一に耳元で囁かれた。  
あなたがいるからです。

沙紀side

契約書を見せられて固まった。  
コイツは頭がおかしい。  
どうしてここまで人を陥れるんだろう。何が楽しい？  
私は奴に聞かれた質問にずっと目を伏せていた。

自分が幸せになるのか  
みんなの幸せを願うのか

そんなの…決まってます…

だから私は頷いた。  
あなたの手駒だとしても。踊らされるピエロだとしても。

そして今に至る。

「……………沙紀様、お飲み物は？」

「いりません」

「かしこまりました」

かなり機嫌悪いです。

でも…何だかやるせない。

何も話す気も興味も無くてただボーっとこの過ぎてく時間に流されていくだけ。

「アハハ。そうですね」

奴の笑い声を聞いてチラリと目を向けた。

菜川はパーティーに来ていたお客様と楽しそうに話していた。随分、豹変するもんですね。

ヒマ…ですね。

ただ座っているだけ。

私はパーティーに来ている人たちを見渡してみた。

ひい ふう み やあ …

「多すぎです…」

しかしそんな中に一人来ている人たちの中で自分の学校の制服を来た女の子がいた事に気付いた沙紀は椅子から無意識に立ち上がった。

あの子…確か隣のクラスの…

井上 佳世さん…？

「沙紀様？」

「ちょっと…見てきます」

「ダメです。あなた様にはこの席についていて頂かなくては」

沙紀はにつこり笑って腕を掴む始良の腹に足蹴りを食わした。もちろん見えない場所です。

「グハッ」

「すみません。こういう事慣れてないんです」

沙紀は…怖い。

意外に…怖い。

腹を押さえながら始良は見えない沙紀の姿を見ていた。

「元気な…お方だ…」

「えっと…さっきの女の子はこの辺りにいたような…」

頭をフル回転させて探した。

うん…どこにいるのかなあ。

「おい」

誰かに腕を掴まれた。

振り返ると菜川光一だった。

邪魔しに来たんですか？  
そんな眼で睨みつけた。

「お前いちいち探させん…」

菜川光一が言いかけた時だった

「光一…？」

女の子の声が聞こえた。

私も菜川光一も振り返った。

あれ…さっきの女の子…？

えっと…

「お知り合い…デスカ？」

「……佳世…」

「光一…婚約パーティーって…本当なんですか…？」

悲しそうな顔をする佳世さん。

私は逃げた方が…。

はい！逃げましょう！

「じゃあ私は行きまー…」

「ああ。俺はコイツと婚約する。それぐらい分かるだろ」

そう言って掴まれていた腕を引っ張られて菜川光一の胸に飛び込んだ。

いったあ…

「……嘘ですよね」

「嘘じゃねえ。証拠なら見せるぜ？なあ沙紀？」

「はい？証拠ってなん…」

体を引き離され上を向いた瞬間、菜川光一の顔が間近にあった。唇には妙な違和感が。

こ…これは…

「ンンンンツ?!」

私は唇を塞がれていた。

そう、菜川光一の唇で。

つまり…キス…

タツタツタツ…

20秒ぐらいのキスが終わり息を切らしているといつの間にか佳世さんはいませんでした。

「あなた何をしたか分かって」

「分かってる。あいつは俺を見捨てたんだよ…」

そう言つて菜川光一は私を置いて戻って行ってしまった。

その場に残ったのは放心状態な沙紀と耳障りな話し声だった。

菜川光一の悲しい顔。

初めて見た。

どうしてそんな顔をするの？

あなたの答え聞かせて…？

「なんであいつ…いんだよ…」

呼んだはずはないのに…。

忘れた…はずなのに…。

胸が締め付けられる…。

あの時の光景が蘇る。

五年前の夏。

真っ暗な空には金色の星がポツポツと輝いていた。

どうしてそんな顔をするの？

また会えるよ？

真っ暗な空の下、二人きりで肩を並べたあの日。

急に告げられた別れの言葉。

会えるよ…

きつと…

彼女は理由を言ってくれなかったんだ。どうして僕から離れたのかを…。守ってやりたかったただけなのに…。

まだ…諦めが付かないのか。

親父に言われた言葉。

頷く事を許されなかった。

助けてやりたかった。

本当は、まだ愛おしい。

彼女が…愛おしい。

でも…沙紀を…巻き込んでしまった事は後にも先にも変わらないんだ…。

弱虫なんだよ…。

「菜川光一！！」

その呼び方…。

俺は少しだけ流れた涙を拭いて振り向いた。

「あなたは…はあ…まだ…好きなんですね…？」

「なんの話だよ」

「佳世さん、泣いてましたよ」

ビクッ

佳世という言葉に反応してしまう自分が馬鹿らしい。いつだって俺は…

「弱虫なんていませんよ」

「な…」

見透かされたように沙紀に言われてやっぱり涙腺が緩む。

弱虫なんていませんよ…

「弱虫って自分が思ってる人は弱虫じゃないんですよ」

「……」

「私はあなたが優しい人だって気付きましたよ。愛おしい人が待ってますよ」

沙紀はにっこり笑った。

どうしてだろう。彼女の言葉が胸に刺さる棘を抜いてくれた。

愛おしい人。

俺の愛おしい人は・・・

「佳世…ッ!!!」

いつの間にか俺はまた走り出して佳世を追いかけていた。もういないかもしれないけど俺は嫌いな運動をしている。

走り走り走り走り。

そして信号で止まっている懐かしい背中を見つけた。

まだ泣いてるかな。

俺は後ろから抱きしめた。

「わっ…? ……」

「佳世…」

懐かしい香り。

暖かい背中。

全て…全てが愛おしい。

「光…?」

「俺な…お前が好きだ…。世界中の誰よりも…好きだ…」  
「にっ…い…」

途中から背中が揺れていた。

泣いてる。

バカだなあ…。

やっぱり沙紀はすげえよ。

そしてごめんな。

俺は泣いている佳世にそっとキスをした。  
懐かしい愛おしい人と。

「え？なんだと？高校の売却は中止にしろ？水野家との契約もナシだど？！」

親父。俺は沙紀に教わったんだよ。愛しい人がいる事。  
幸せは自分が幸せじゃなきゃ幸せじゃないって事。

「バカを言うな！」

もう決めた事だ。

それに親父だってそうだろ…？

「……………」

母さんとの結婚。

反対されたけど幸せだったろ。

それと同じだよ。

俺も今幸せだよ。

「……………そう…だな」

じゃあ俺パーティーに戻って終わらせてくるから。

そう言つて息子は電話を切つた

息子は昔の俺に似ていた。

好きになる人まで似て。

まあ…成長したな。

なあ…桜？

お前は幸せだったか？

俺は…幸せだったよ。

きつと笑つてるよな。

桜…

その頃一方変わつてパーティー会場は呆れるかと思つていたが、何故か皆さん喜んでました。

「……沙紀」

「あ、愁さん。どうしてここにいるんですか？」

「……俺まだ理解不能なんだけど…。何コレ？ドッキリ？」

目の前の現状（光一と佳世が何故か胴上げされている）に驚く（実際には固まる）愁に優しく笑いかける沙紀。

ドッキリじゃないですよ。

「終わつたんですよ。婚約事件はもう。学校もなくなりませんし…

私も父も大丈夫です」

沙紀はん ツと伸びをしていた  
なんつう呑気な。

「沙紀ちゃん」

「あ、佳世さん！と光一・・・」

呼び捨て？！

え？！俺まだ愁さんだし？！

「沙紀、ありがとう」

「ううん。光一が頑張ったからですよ。お幸せに」

「それから・・・愁くん」

「お・・・おお」

「ごめんね。キスしちゃった」

.....へ？

ごめんね。の後なんつった？

キスしちゃった？

誰と誰が？

「じゃあ後は君らの番だよ」

「幸せは見つけるんじゃない。そう掴むものなんだよ」

そう言ってあいつらはパーティー会場の中に消えていった。  
残された俺と沙紀はかなり気まずい状況であった。

「キスはしましたが・・・心は渡してませんよ／＼／＼」

耳まで真っ赤。

なん…ちゅう可愛さ…///  
手を繋いで家を出た。

もう外は真っ暗で。

夜空に輝く星が綺麗だった。

繋いだ手は温かくて

優しくて

恥ずかしくて

嬉しくて

でも嬉しかったんだ。

愁さんが来てくれた事。

ありがとう…愁さん…

第三十一話 愛しの人（後書き）

後少し、頑張ります!!!  
では、行ってきます（笑）

## 第三十二話 伝わる思い（前書き）

おはようございます！

皆さんは通学中でしょうか？私は今電車に揺られながら打っています

（笑）

今回を入れてあと三話…。

ラストスパートです。

感想を書いて下さった方々！

ありがとうございます！

## 第三十二話 伝わる思い

婚約者事件から約一週間。

菜川光一は井上佳代さんと幸せな毎日を過ごしてました。

「……最近、ティータイムに来る人増えたわね。．．．」  
「てか、なんでこいつらがここに普通にいるわけ？」

愁さんが指差した方にはにっこりと微笑む菜川光一と井上佳代さんがいたのだ。

うん。同感です。

しかも広尾さんまで…

「邪魔？」

『あんたは邪魔』

全員口を揃えて言った。

菜川光一はシュン…っとなって佳代さんに抱きついてた。

佳代さんはすみませんすみませんとぺこぺこ頭を下げていた。

コントにしか見えませんか（笑）

「まあ良いんじゃないのか」

「鏡？」

珍しく鏡さんが笑いながらそう答えていた。  
鏡さんが言うのなら…。  
全員がそう思っただろう。  
しかし、

「俺も本当は茶衣連れてきぶほおっ」

全部言い終わる前に夏樹くんの足蹴りが鏡さんの鳩尾にヒット

「ただの自慢かよ」

「きょんウザす」

「死ね」

「ちよ…自慢じゃなくて…あ、自慢かへぶっ」

私と佳代さんと静さんはゆっくりとお茶を飲んでいた。

…：…久しぶりですね。

こうやって笑っていたのは。

私幸せです。

「あ、アスカああっ」

「ふう…」

どこからか小鳥のさえずりが聞こえますね…。

私はアスカじゃありませんし…一体誰のさえずりでしょう…。

（ダーク）

「こ、これでどうだっ」

鏡さんはメガネを外した。  
すると皆さんはうろつろつと始めて混乱していた。

……………？

「……………いいんだけどさ……………。うん……………。なんでみんな俺がメガネ取ると気付かないの」

「さあ……………？あんたイメージ違いすぎるからじゃない？」

静さんがお茶をすすりながら鏡さんに言った。

うんうん。そうですね。

でも相変わらず……………ですね。

「鏡さんはどうしてダテメガネをしているんですか？」

「ああ。沙紀には言ってなかったっけ。俺昔メガネ無しで学校行つてたら女子に凄まじくストーカー行為されてなあ……………」

な……………なるほど……………。

それは……………怖いですね……………。

私は自然と顔がひきつっていた

「ねえ、鏡つたらいつの間にかーちゃんの事沙紀って呼ぶようになってたの？」

「え？結構前だよ」

「はい。確か鏡さんの家に菜川光一撲滅大作戦会議をしていた時ですかねえ……………」

普通に呼ばれましたし。

沙紀。って。まあ呼びやすいんですね。

「ふうん……………」

「あ、そうでした！今日クッキーを作ってきたんですが…」  
『クッキー?!』

うわぁぁっ?!

み、皆さんすごい反応しましたね?!

一応…作ってきたんですが…。

まずいと思いますが…。

ハイ。

「いったただつきまーす!」

皆さん喜んでます。

嬉しいですノノノ

あ、愁さん…。

「愁さん愁さん!」

「あ?」

手のひらで呼んだ。

愁さんは?と言いながらこっちに歩いてきた。

愁さんは甘いもの苦手なんですよね?確か…?

「はい!どうぞ!」

「え?」

「愁さんは甘いもの苦手なので甘さ控えめジンジャークッキーです

!」

手のひらには別に包まれているクッキーが乗っていた。

愁さんは少し照れながら

「さんきゅ…!」ともらってくれた。

「沙紀？」

「はい？」

「あの…お前に言わなきゃいけない事が…」

愁さんは私の腕を掴んだ。

真剣な目…。

また何かあるのかな…。

「俺な…あし」

「愁！鏡の奴捕まえて！」

真子さんの声が響いた。

愁さんは言いかけた言葉を飲み込んで

「…ああ」と戻ってしまった。

あし…？

あしって…なんででしょう？

私はずっと悩んでいた。

愁さんが真剣な目をするのは本当に大事な事がある時だけだったから。

……………不安。

なんでだか不安がよぎる。

何故か分からないけどこの時私は…まだ気付いてなかった。

ラストステージが始まる事を。

そして、

「アスカッ？助けて！！」

「……………」

「アスカが無視したア！！」

そして、、、

「…うるさい鏡くん」

「ひぎゃあッ！」

「あははッあははッ」

……………そして、、、

「全く…お茶の邪魔だわ」

「あ、クッキー美味しいです」

……………もう良いです。

集中が出来ません。

そして、、、の続きが言えない。

ハア……………。

キーンコーンカーンコーン

キーンコーンカーンコーン

あっっっつっつという間に放課後！

沙紀と愁は委員会の仕事で残っていた。

そうです！彼らは委員会に入っていたのですよ？！

作者も書き忘れて…（バカ）

「終わりました！」

「結構かかったな……」

愁さんは時計を見て呟いた。  
私たちが始めたのが16時、今の時刻が20時。約四時間はやって  
いたんですねえ。  
ホツチキス留めも辛いです。

「あ、愁さん！今日お昼の時何か言いかけませんでした？」  
「ああ……ウン……そうだな」

また暗くなった。  
愁さん……何なんですか？  
物凄い……嫌な……予感が……

「俺、明日から………だ」  
「え？」

………？  
今、何て言いました……？  
俺、明日……

『留学するんだ』

「ちょ……ちょっと待って下さい！！留学するって……」  
「言わなくて……ごめんな」  
「そんな事……」

どうして言ってくれなかったんですか？！

つい声が大きくなる。

真っ暗な廊下に響く声。それが余計に寂しさを増させた。

ぎゅっと握りしめた手は震え、そして目の前にいる愁を沙紀はずっと見つめていた。

急な別れ。

そんな現実が嫌だった。

「沙紀……………本当にごめんな」

愁さんは優しく私の頭を撫でた

サヨナラを意味するように。

こんな私でも幸せだったんですよ…。愁さんや静さん…鏡さんや夏樹くんと…笑い合ってふざけ合って…。

他愛のない話で笑って。

泣きたいときには泣いて。

このままじゃダメなんですか？

このまま…幸せでいたいのに…

愁さんは離れていく…

それがどんなに悲しいか…

「…分かりますか？」

「……………」

「……………何処なんですか？」

「フランス…」

フランス……………。

滅多に会えないんですね…。

私は…笑った。

笑って送りますよ？

そうしなきゃ…ずっと泣いてる  
愁さんの事…大好きだから…

だからこそ

だからこそ笑うんです

「っ…クッ…ひっ…」

でも、泣いちゃうもんです。

泣かないつもりだったのに目からは大粒の泪が零れ落ちて止まらな  
かった。

愁さんはそんな私を優しく抱きしめてくれた。

暖かくて

また泣いてしまった。

弱虫。

愁さんは私が泣き止むまでずっとずっと抱きしめてくれた。

愁さん…

大好き…

だから…

行ってらっしゃい…



## 第三十二話 伝わる思い（後書き）

愁が留学って……………。

フランスと日本ってどの位離れているんですかねえ？

行ってきます〇 (^ ^ ) 〇

### 第三十三話 好きだから(前書き)

お久しぶりです！

一回三十三話が消去され…部活やらテストやらで更新が詰まっておりましたorz

すみません(泣)

今回が三十三話。

最終話は三十四話。

更新頑張ります！

感想等お待ちしております！

### 第三十三話 好きだから

愁 side

久しぶりに実家に帰ってきた俺に親父が告げたこと。かなり意味不明だった。

「は？留学？」

そう。留学だった。

しかも突然に。自分にとってはまだ高校生活がある。沙紀もいる。アイツ等だっているのに。どうしてだよ。

「急すぎるだろ?!」

「……」

「なんで今なんだよ!!」

「……」

「黙ってても意味ないんじゃないの？父さん？」

「姉貴?!?!?!?!」

目の前にはすんげえ久しぶりに見た姉貴がいた。

わ…………。

てか…

「なんでいんの?!」

「なによお…いちゃわるい？」

「……………」

「ま、それは置いてくわ。愁あんた、なんで父さんが急に留学の話持ち出したか理由分かる？」

「理由？」

姉貴は嘆息したように笑った。

理由？なんだよ…それ。

分かるわけないじゃん。

……………

「全く…父さんも父さんよ」

姉貴は何を知ってるんだ？

俺は取りあえずソファを立ち、冷蔵庫からお茶を取り出した。

お茶はギンギンに冷えていた。

……………はあ。

「すまない」

「さつさと言わないからこついつギリギリになっちゃうんだからさ

……………」

「なあ姉貴！何か知ってるのかよ？」

つい声が大きくなった。

俺の声に親父は驚いていたが姉貴はハハハツと笑った。

何が面白いんだよ。

「あんた変わらないね。いや変わったかしら。…あの子と会ってか

ら…？」

「早く言えよ」

「自分の夢、叶える為よ」

「夢？」

「昔私にだけ言ったことあるでしょ？【母さんみたいになりたい】って」

母さんみたいになりたい？

俺が？

母さんは……あ……。

そういえば……一度だけ……夢の話を姉貴に言った事があった。

\*

『僕ねっ姉ちゃん！僕お母さんみたいになりたいんだ！お母さんみたいに綺麗な絵、沢山描きたいの！！』

\*

あつたな。

あの頃の俺は……可愛かった（泣）

………て、オイ！！！！

何俺は思い出に浸ってたんだ？！

／／／／（何故か赤面）

「愁？何顔赤らめてんのよ」

「い、いや！！」

「で、その夢叶えてきなさい」

「は？何を突然」

「父さんの知り合いに、有名な画家がいるんだ。彼にもう頼んである。

どうだ？」

確かに…なりたいけど…  
なんで今なんだよ…。  
それは……………

「選択は2つに1つ。それは貴方次第よ。愁」

2つに1つ。

俺…次第…。

あ……………！！！！

こんがらがってきた！

沙紀……………

『愁さん！』

お前は……………

『え？』

俺の選んだ道を……………

『待ちますよ』

認めてくれるか……………？

「父さん。俺……………」

\*

「泣くな…沙紀…」

「な…泣いてませんッ！」

嘘つけ。

思いつき目赤いじゃねえか。

ま…泣かせたの俺だし。

「…愁さん？」

「ん？」

「私待ちますから」

「……………」

「愁さんの事大好きです」

「……………」

大好きです。

沙紀、どうしてお前はこんな俺の事を好きだと言ってくれるんだ？  
こんな無神経な俺を…

「ふふふ」

「ん？」

「愁さんって顔にやすいですね。全部分かつちやいますよ」

「……………」

「好きに、理由なんてないんですよ。だって好きなんですから」

やっぱりお前のおかげかもしれないな…。沙紀。

俺も正直になれる。

俺も好きだよ。

いつかお前を描きたいんだ。  
絶対に…  
だから…

『行ってきます』

### 第三十三話 好きだから（後書き）

感想等お待ちしております！

最終話予定は未明ですが七月中には更新できるかと…

読んでくださっている方々、

本当にありがとうございます！

第三十四話 キミに幸あれ！（前書き）

やってきました！

最終話ですよ！最終話！

自分よく頑張った（泣）

最終話ですが、実はもう一話話が続いているのです（＾Ｏ＾）  
最後までお付き合い宜しくお願いいたします

### 第三十四話 キミに幸あれ！

出発日．．．。

羽田空港には沙紀を始め、夏樹や鏡、静などみんなが来ていた。

愁が旅立つ日。

一年間会えないんですね

沙紀はずっと泣いていた。

本当は離れたくないんです。

ずっとずっとずっとずっととずっとと愁さんと笑い合いたい。

でも、

私は笑った。

なんで？なんで笑えるのか？

それは、愁さんが好きだから

愁さんが好きだから、笑って送り出すんです。

だって絶対帰ってきますから。

愁さんは帰ってきます。

それまで、待つんです。

「ふふ」

「？沙紀どうかした？」

「いえ」

あなたを待つんです。

「俺、いつかお前を描くから」

「私を？」

大切なあなたを。

「ああ。帰ってくるまで待っていてくれるよな？沙紀」

「はい！勿論です！」

沙紀の笑顔に愁は笑った。

「じゃあ皆さん愁さんにメッセージをしましょうか！」

「じゃあ僕からあ」

夏樹がにっこり笑った。

一瞬で表情が変わった。

「愁くん、行ってらっしゃい。まあ一年間だし…愁くんのことだし…大丈夫だと思うけど、浮気はだめだよ？」

「…しねえよ」

「したらの場合、鏡くん以上に虐めるからね？」

ゾクツと鳥肌がたった。

怖い。怖いです夏樹くん…。

「次は俺か」

鏡さんが笑った。

すると愁さんは鏡さんの笑顔が気に入らなかったのか、無視して私を抱きしめた。

へ…？

「お前ウザい」

「酷くない?! ねえ俺の扱っただけ酷くない?!」

「はあ…何?」

「う…うわあぁっ!! 愁の意地悪うつつ!! いいもんいいもん…」

鏡さんはなきべそをかきはじめた。

あ…それがメッセージ…ですか

私は抱きしめられたまま苦笑いをして静さんを見た。

静さんは…あれ?

「静さん?!」

「? 静?! 何その髪?!」

目の前には髪の毛をバツサリと切って男服を着た静さん…が?

「あ… . . イメチェン?」

「変わりすぎだろ!!」

「今まで気付かなかった僕たちも結構スゴいよね…」

それは…

そうですね(笑)

静さんとはってもカツコイイ静さんになっていました。

似合ってますよ?

「まあそれは置いとくけど、愁? 夏樹の言っとおり、浮気しないで

よね。まあしたらしたで私がさーちゃんのこと頂かせて貰うけど  
ねえ」

「なっ?!?!?!」

「静さん?!?!?!」

おほほと笑う静さん。

絶対これは本気だと思えます。

え?

だって目がマジですから。

「……………分かったよ……………」

「よし!行つてらっしゃい」

「じゃああたしかな?」

今度は真子さんです。

あの…愁さんそろそろ離してくれませんかねえ…?

恥ずかしくなってきたんですが

しかし愁さんはそんなことはお構いなしに抱きしめている。  
はあ……………

「元気でね、愁」

「ああ」

「私は、ちゃんと愁のこと好きだったからね!」

「……………ああ」

「沙紀ちゃんの彼氏なんだからちゃんとしなさいよね」

真子さん……………(汗)

しっかりしてるなあ……………

と、頷いてしまった。

実は彼氏と言う響きに結構な照れを…いえ照れていました。

……………エへ。

「あ！間に合ったあ！よ！」

「げ…菜川…」

菜川光一…。

呼んだつもりはないのに…

この人には色々とおったなあ…なんて…あ、ムカついてきた。

私は未だに愁さんの腕の中で唸り続けていた。

「色々とおかったなあ！猪垣」

「……………キライ」

「ははは。まあ嫌いでもいいけどな。悪いのは俺だからな…」

菜川光一は一瞬悲しそうな顔をさせて笑った。

でも、ありがとうございました

ウザいあなたがいてくれたせいで…いや、あなたのせいで変な毎日を過ごしてしまいましたよ

ええ。ウザかったです。

私がこんなにキレたのは久しぶりって感じでしたよ。

「じゃあ俺からも一言な！」

「いらね…」

「沙紀に会わせてくれてありがとな。大切なもの気付かせてくれたんだ」

……………菜川光一らしくない。

私は不思議そうに菜川光一を見上げた。ニヤリと笑った。  
げ…

「まあ…キスのことは忘れないからなあ〜」

「き……………」

「キスうつつ?!」

「わ　　っ……………!!な、な、なんでもないですよ……………」

菜川光一めえええ!!!!

このタコ!!!(キャラブチ壊れ)

……………キスは、いいんです。

あれは不可抗力というか……………。

……………。

「とにかく…元気だな」

「はいはい」

「じゃあ最後に沙紀だな」

「……………」

「沙紀?」

愁さんは腕の中にいる私の顔を覗き込んで笑った。

無理ですよ……………。

顔を上げるなんて……………。

だって……………

「……………泣いてるのか?」

なんだか感無量っていう感じで泣かないつもりが涙が流れてしまっ  
んです。

寂しいと頑張れが混ざって……………。

「…しゅ…愁さん？」

「ん？」

「頑張つて…下さい…ね？」

「ん」

「それと…」

それと。

それと私は

私は愁さんのこと

「…ッ誰よりも大好きです！」

愁さんをぎゅっと抱きしめた。

大好き！大好きです！

待ってますよ！

「ありがとう…沙紀」

「はい！」

「あ、なんかムカついたから俺も一っしていいか？」

「はい？」

愁さんは菜川光一並みにニヤリと笑った後私を見つめた。

へ？

私がかよとんとしていると、愁さんは私の唇に唇を重ねてきた。

……………。  
……………へ？

「……………」

「じゃあな」

「……………」

放心状態の私の頭を撫でてエスカレーターを降りていく。

……………愁…さん？

あの…

その…

「それであつていくなああああああああつ！！！！！！」

私の叫びを聞いた愁さんは笑って手を振っていた。

愁さんが見えなくなつてから急に私は力が抜けたように地面に座り込んだ。

「さーちゃん？大丈夫？」

「大丈夫です…」

「氣い抜けた？」

「はい…」

「ねえこの言葉知ってる？沙紀」

真子さんと夏樹くんが笑いながら私に聞いてきた。

え？

「『キミに幸あれ！』って言葉。きつとね幸せは見えてくるよ。それまで愁のこと待とうよ！」

「ッ……………はい！！！！」

私は愁さんのおかげで幸せでしたよ…。だから一年ぐらい入っちゃ  
らです！！

大丈夫！

私には皆さんがいる！

笑いあえる仲間がいる！

そして大好きな人もいる！

幸せをありがとうございます！

行ってらっしゃい！！！！

一年後

「ふうわあああつ」

テスト明けで眠いです…

大きな口を開けて欠伸をした。

「ずいぶんと眠そうだな（笑）」

その声を聞いて、私は笑顔で振り返った。

お帰りなさいっ愁さん!!!!!!

世界中の皆さんへ！  
キミに幸あれ!!

第三十四話 キミに幸あれ！（後書き）

いかがでしたか？

気に入らない点、好きなキャラがいたら是非感想下さい

もう一話続きますよ

## 最終話 メッセージ（前書き）

こんばんは！

これが本当の最終話です！

皆さんへのメッセージがキャラクターからあります！

ついでにストーリーもあります

是非、感想を下さいね

最後までお付き合いよろしくお願いします

## 最終話 メッセージ

え？皆さんへメッセージ？  
そ、そんな滅相もない…

「沙紀？どしたの？」

「なんか…一人一人読者様へのメッセージをしろと千尋さんから言われたんです」

「ふうん」

「愁さんやりますか？」

「沙紀がやるならな」

ダダダダッ

「ねっ！何の話い？」

「あたしたちも混ぜてよ！」

「夏樹くん！真子さん！」

「あら、私もいるわよ」

「……………静、お前髪の毛切ったんだから男言葉にしろよ」

愁さんは呆れ顔で静さんの頭を軽く小突いた。  
仲良いですねえ。

「で、何の話してたの？」

「……………あの」

「えっとですね」



分かったよ。

俺様が解説してやろっじゃねえか！！任しとけ！！

まずはキミに幸あれ！主人公、

『水野沙紀』！

「はい！皆さんこんにちは！

水野沙紀です！

皆さんには色々とお世話になりました。本当にありがとうございます！

愁さんとの出会いや、夏樹くんや鏡さん、沢山の友達が出来て幸せでした！

……うっ……（泣）

また会える日まで、皆さん笑っていて下さいね！  
ありがとうございます！」

うん。

やっぱり主人公だね、お前。

俺もお前に幸せ分けてもらったって感じだからな……。  
おっと。話を進めよ。

次は、クールなキャラ

『猪垣愁』！

「……あ。忘れてた。

……皆さんありがとうございます。一応お礼言っとなきゃ沙紀  
に後で叱られるからな。

まあ、楽しかった。

それは本当だと思っ。

皆がいてくれたから、もある。  
だから、ありがとう」

最後までクールだな、おい。  
でも、ま、それが猪垣らしいっちゃらしいんだよな。

次は、裏表アリ

『灰原夏樹』！

「はあい 夏樹だよ！

みんなありがとうね！！

僕にとつてみんなは大切な人たちで、本当に感謝してるよお  
真子とだつて付き合えたしねえ

これからも宜しくねえ」

うん。

そうだよなあ。

大切な人たち…かあ。

良いこと言つなあ、鬼畜…。

え？それはお前だろ？

……………ご名答（笑）

じゃあ次いくぞ？

次は、オタク青年

『椎羅鏡』！

「オタク青年つて…。

まあ合つてるけどさ…。

皆さんありがとう。

俺が頑張っただけなのは茶衣のおかげだけども……くほおあっ?!  
わ、分かった!真面目に話すから夏樹蹴らないで!!  
いたたた…。

皆さんも元気でね!!!」

………灰原に蹴られてたし(笑)  
幸せでいいな。

次、オカマだけど超美人

『路乃静』!

「あら、ありがとう。

みんなありがとう。

私は、楽しかった、とでも言っておこうかしら。

恋をしたのだったさーちゃんが初めてで愛したのもさーちゃんが初めて。

みんなには支えてもらったわね

貴女たちも頑張りなさい」

お姉さんタイプだよな。

沙紀に恋したのはいい経験って感じじゃないのか?

頑張れよ!

さて、次は、愁の元力ノ

『時枝真子』!

「みんな!大好き!

私途中からしか出てないけど少しでもあたしのこと覚えててくれたら嬉しいな!

また会おうね!

で、夏樹とはちゃんとやっていくから大丈夫だよ…？  
ありがとうね」

時枝も俺と似たもん同士だな。

え？何がって？

途中からしか出てないところ？

あはは…（泣）

畜生 ……！！！！

次は意外とよく出てた人

そして俺の専属執事！

『広尾』！

「こんにちは皆様。

わたくし光一様の専属執事広尾と申します。以後お見知りおきをお願いいたします。

ところで…光一様より先にわたくしがでてよろしいのですか？それにフアンの方にも…。

ま、まあ、一応は仕事として、しっかりと話したいと思います。

キミに幸あれ！にお付き合い頂き有難うございました。

これからも作者を応援してあげて下さいね」

……………広尾。

だってお前俺より人気あるもん

どうせ俺は憎まれ役だよ！！

でも色々とお前には世話になったよ。サンキューな。

さてさて、次は椎羅の恋人でメイドさん

『柊茶衣』！

「ちょ… ちょっと待ってください！ どうして私まで…?!  
え？ 一応鏡様の恋人なんだから？ あ、なる程！ 分かりました！  
皆様！ 本当にお世話になりました！ これからも鏡様を宜しくお願い  
いたします！」

この子も沙紀と一緒にで天然なんだよね。似てると思った。  
ま、椎羅とどの位もつかない（笑）

じゃあ次、愁の恋敵

『山本克』！

「おう！ 久しぶりだな！  
覚えてない…？」

ま、印象薄いけどな

沙紀姫のことは大好きだよ  
でもきつと、沙紀姫は愁さんのことしか見つめてない。

ありがとう、って言いたいな。  
みんなもありがとう！」

俺こいつとだけ会ったこと無いけど… 沙紀のこと好きなのか…  
いや、好きだったのか？  
頑張れよ！ 少年！

さあ、最後に俺行きますか！  
え？ 出番なし？

…… 無理やりにでも出てやる！  
性格悪いし暗黒大魔王

『菜川光一』！

「一人演技疲れた…  
てか自分で性格悪いし暗黒大魔王って言ってるの物凄い虚しいんだ  
けど。ねえ。作者のバカ。  
えっと、皆さんまず言っとく。  
ごめんなさい。  
めちやくちゃム力つく奴だったよなあ。俺って。  
はあ…  
でも沙紀たちをよろしくな！」

「……はっ…はっは…。  
た、ただいま!!  
あそこからスタジオまで結構あるから疲れた…。

これで…ハア…一応は…ハア、皆さんへのメッセージは終わりに  
なります!  
最後に、高校三年生になったみんなの物語をお送りします!

本当にありがとうございました

キミに幸あれ！l a s t s t o r y

「手、繋がねえ？」  
「／／／はいっ！」

そんなラブラブな二人を羨ましげに見る他六人。  
勿論、夏樹、鏡、真子、静、茶衣、菜川である。高校三年生にもな  
って未だチュウしかしたことがないウブな奴らである。

「あなたたちって…」

静が呟いた。

それに反応したのは沙紀である

「静さん？」

「さーちゃん、おいで」

「へ？」

「ちよ…静!」

静さんは私を捕まえると、猛ダツシュして学校の中に入っていった。  
な、な、何なんですか?!

「こじは…」

「ん？放送室」

「どうして?! どうしてですか?!」

「ちよつと遊ぼうかなあって」

遊ぼうかなあって……………?

え? えええつ?!

「コホン。思い出作りよ」

「思い出…作り」

「そ。さーちゃんは座ってて」

そう言うと静さんは放送室のマイクを手慣れた手つきで電源をいれた。

何をする気でしょうか…?

むむむ…。



だって…だって…私を賞金とした鬼ごっこですよ…!!  
ヒドいですよ…!!

「ところで…静さん？さっきから足音が聞こえるんですけど」

「……………来たわ」

「いやです…!!」

「さーちゃん、逃げきるのよ。こんなこと本当は言いたくないけど、  
学校中の男子はさーちゃんを狙ってるわ…」

「……………」

「時間は30分、愁を探して」

静さんの…

「バカああああつつつ…!!」

その瞬間、ドアが思いっきり叩かれ始めたのです。

「さーちゃん…!!行け…!!」

「えええっ?!」

私は放送室についている非常口から外に出て走り出した。いい加減  
に…してえええっ…!!

「はっ…はあ…」

「沙紀姫見つけたぞ…!!」

「よっしやー…!!」

見つかったあああああ…!!

とにかく…逃げるか…

はい…!!逃げましょう…!!…!!…!!

『15分経過。。。』  
意外と沙紀は逃げていた。

「もう…っ、疲れた…」  
「俺休む…」

と次々とリタイアする人が現れ始める中沙紀だけは真顔で息も切らさずに走っていた。

「運動会練習のお陰ですかね」

愁さん…

愁さん！！！！！

愁さあああああん！！！！

会いたいです！！！！

「ッ…捕まえた」

「?!」

「お前、足早すぎ」

「しゅ…」

「どうせ逃げるならここかなあって思って来たら、まさか……保健室なんてな」

愁さんは笑いながら私をぎゅっと強く抱きしめた。  
あったかい…。

「なあ、沙紀。覚えてるか？」

「え？」

「初めて俺らが会った日。俺は女が嫌いでお前は男が嫌い。」

「ははは。似たもの同士だよな」

「愁さん冷たかったです」

「流石にあれは悪かったな。初めて交わした言葉が『俺女嫌いだから』だしな」

「全くですよ」

ケラケラと二人で笑った。

でも、いつからか恋をした。

優しい目をした愁さんに。

いつからか恋をした。

いつも笑ってる沙紀に。

初めて出会った時は嫌いだったでも、いつの間にか一番大切な人になっていった。

かけがえのない人になっていた

心から愛しく思えるようになっていたんだよ。

「愁さん」

「ん？」

「愁さんのこと、

愛してます」

大切なあなたへ。

私はあなたを愛しています。

-  
f  
i  
n  
-

## 最終話 メッセージ（後書き）

キミに幸あれ！を読んでいたいただき本当に本当にありがとうございますとつづいまして！！！！

感極まり無いです。。。

キミ幸は、自分で書いていて幸せになるような小説でした。

読んでくださった方、感想をくださった方々に支えられて頑張れました！

最後になりますが、本当にありがとうございます！

これからもキミ幸、桜木千尋共々、よろしく願います

ではまたお会いしましょう！！

2008・7/27（日）

桜木千尋

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8765c/>

---

キミに幸あれ!

2010年10月26日02時31分発行